

2023年42号

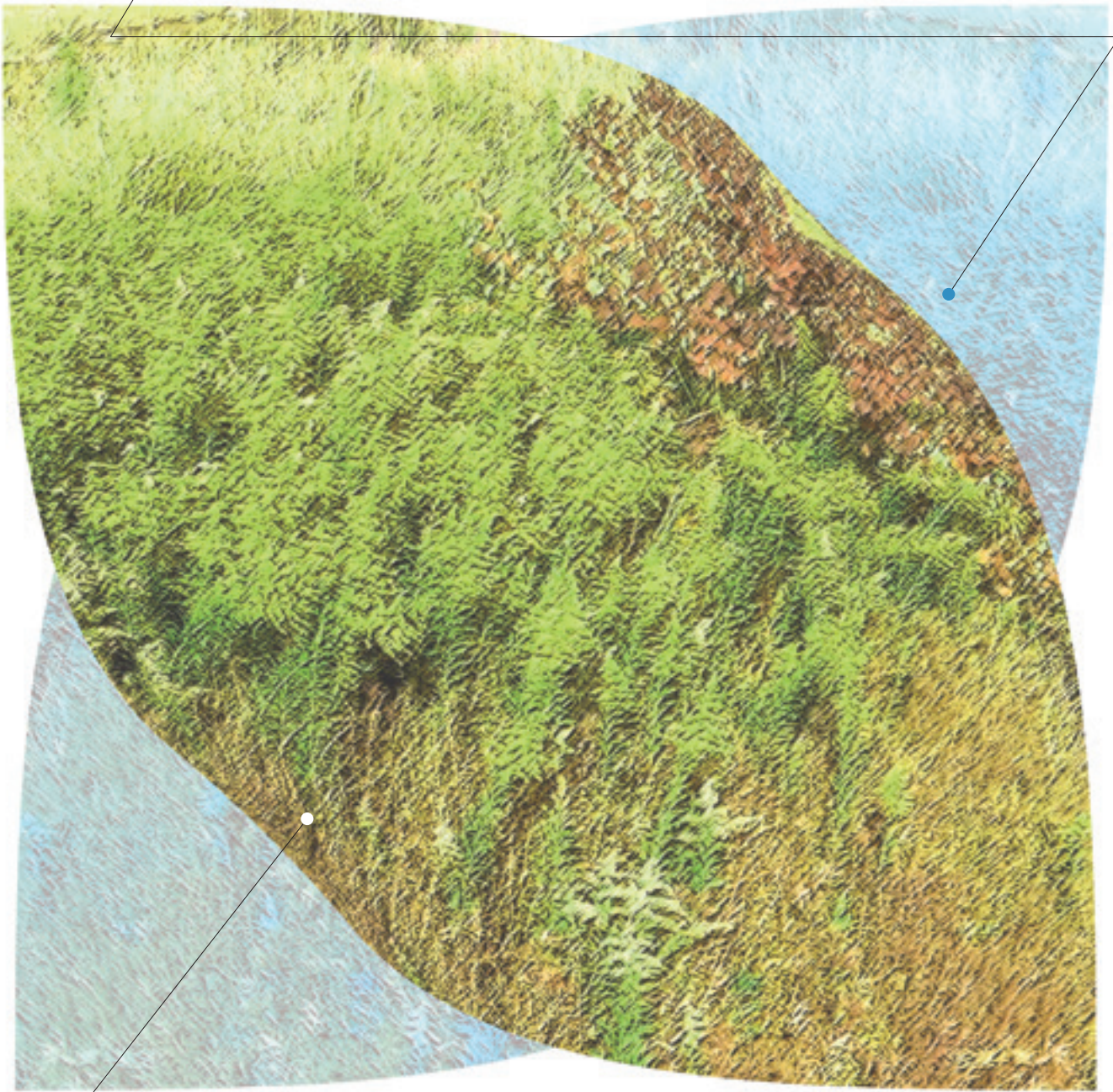
Vol.42

総人・人環フォーラム

HUMAN AND ENVIRONMENTAL FORUM

特集 幸せに生きる

青山拓央「幸せの二つの顔」 柴田悠「幸せに生きるために」



座談会 学術架橋力の養成に向けて—人間・環境学研究科再編のめざすもの
齋木 潤・立木秀樹・勝又直也・守田貴弘・森口由香・小松直樹

講演 谷口一美「人間のことば・機械のコトバ」

◎目次——総人・人環フォーラム第42号——

巻頭言

「あな」 酒井 敏 1

公開講座「幸せに生きる」

セッション1「幸せの二つの顔」 青山 拓央 2
 セッション2「幸せに生きるために」 柴田 悠 8

人間・環境学フォーラム

人間のことば・機械のコトバ 谷口 一美 15

座談会

学術架橋力の養成に向けて
 ——人間・環境学研究科再編のめざすもの
 齋木 潤・立木 秀樹・勝又 直也
 守田 貴弘・森口 由香・小松 直樹 20

2022年度 人間・環境学研究科報告

2022年度 人間・環境学研究科 現役生・修了生の受賞者一覧 33
 2022年度 人間・環境学研究科 教員の活躍一覧 34
 現役生・修了生 2022年度受賞研究から 35
 藤井 慧 Daniel Roy Pearce 山家 悠平 横井川 美佳 水野 純平
 鈴木 啓峻 張 詩雋 齋藤 駿介 椿本 純也 吉田 七瀬
 程 国慶 曹 偉傑 西野 優苒 孫田 佳奈

私の研究の原点と現在

私の歩みを振り返って... 西山 教行 49
 ピアノ音楽とパリ音楽院をめぐる 上田 泰史 51

京都大学 人と社会の未来研究院若手出版助成の成果 53

真鍋公希『円谷英二の卓越化 特撮の社会学』：中森弘樹
 和田萌『移民を排除する安全保障——フランスにおける「つくられた脅威」——』：池田亮
 開信介『久生十蘭作品研究 —〈霧〉と〈二重性〉』：佐々木幸喜
 衛藤恵理香『『常陸国風土記』の表現と方法 地名と歌謡』：佐野宏
 岡久太郎『文法と身体——曖昧な文を伝達するイントネーションとジェスチャー』：神原一帆
 中元洸太『トマス・リードの「常識」を読み解く——常識への二つの態度をめぐる』：山路麻衣
 山根直子『尾崎翠の詩学』：峯村至津子
 雑賀広海『混沌と遊戯の香港映画——作家性、産業、境界線』：鷺谷花

人環図書 —教員自らが語る新著— 61

感銘を受けた3点 67

表紙のことば

[カントリー型の草叢 grassy area]

草叢は多くの生きものを育て、季節ごとに色彩を変えながら複雑に密集し、生い茂る。時に湿り、乾燥し、過ぎ行く時間を数々の微生物と共に生きている。トリミングされた葉型のハードフレームの中にある〈質感〉こそは、失ってはならない地球の世紀そのもの、その生命のリアルをわたしたちは愛する。

倉本 修
くらもとしゅう
 プロフィール

東京生まれ、75年以降6千余冊の単行本を装幀。88年、装幀事務所を設立。造本装幀コンクール文芸部門などで多数受賞。独ライプチヒ「世界で最も美しい本展」などに出品。作品集『ミショー魔法の国にて』『一本の指もまた立っている』『Brim over again』『美しい動物園』『芸術のルール』ほか。



「あな」

酒井 敏

Satoshi SAKAI (京都大学名誉教授)

一昨年の秋、ChatGPT が公開され、大きな話題を呼びました。その当時、私は定年退職を目前に控えて研究室の片付けに追われ、それを使ってみる余裕がありませんでしたが、片付けが一段落した5月頃になって遅ればせながら、ちょっと使ってみました。数年前、画像認識の AI が話題になった時、学生と一緒に使ってみたのですが、さほど大きな驚きもなく「まあ、こんなもんか」と思った記憶があります。しかし、今回は衝撃が走りました。人間が書いた質問の文章を理解して、かなり自然な言葉で返答してくるのではないですか。その答えが正しいかどうかは別にして、人間との会話が成立しているという時点で、大きな驚きでした。それと同時に「これは困ったことになった」と思いました。

1991年の大学設置基準の大綱化に伴い、全国の大学の教養部が廃止されて30年以上経ちます。その間に大学も、そこに入学してくる学生もずいぶん変わりました。その変化を一言でいえば「真面目」になった、ということなのですが、別の言い方をすれば大学全体が「規格化」されてきたといってもいいのかもしれませんが。学生に規定通りの時間数の授業を受けさせ、客観的な基準で評価する。そして学生自身も、それに疑問を持たなくなってきました。本来、大学は新しい世界を切り開くことが使命のはずですが、この30年間の流れは、私には、その使命を放棄しようとしているようにさえ見えました。一方、入学してくる学生の変化は、大学以前の教育や社会全体の変化によるところが大きいのですが、最近の学生は押しなべて、良くも悪くも言われたことがちゃんとできる「良い子」になってきました。そこに、この AI の進歩なのです。AI は「規格化された真面目な知識」に関しては、人間よりはるかに得意なはずです。今の若者は、これから AI とともにどうやって生きていくんだろう？ この30年間、我々は一体何をしていたんだろう？ 私は大いに困惑しました。

谷川俊太郎の「あな」という絵本があります。主人公のひろし君が「日曜日の朝、なにもすることがなかったので、穴を掘り始めた」というところから始まります。穴を掘っていると、お母さんや友達など、いろんな人がやってきて「何をしているの？」「何にするの」と聞くのですが、ひろし君は「穴を掘っているのさ」とか「さあね」とか適当な答えをしながら掘り続けます。すると、土の中からもむしが出てきたり、上を見上げると、空がいつもより高く青く見えたりして、いつもとちょっと

違った体験をします。そして最後は「これは僕の穴だ」と思って、掘った穴を埋めてしまうのです。私がこの本を読むと「ひろし君、手に豆をつくりながらも、楽しそうだなあ」とほのほのとした気分になります。ところが、今の高校生や大学生の受け止めは全く違います。一ページ目の「なにもすることがなかったの、穴を掘り始めた」というところで「なぜ？」と止まってしまうのです。確かに、「暇だから穴を掘る」というのは理由になっていませんが、私には暇なときにどうでもいいことをするというのは、ごく自然な発想で、まったく違和感はありません。しかし、高校生200人に、この絵本を読んでみせたところ、「自分も穴を掘ってみたいと思う人」という声に反応して手が挙がったのは2人だけでした。

私は、ここ10年ほど大学生に対して「大学の成績は60点でよい」と言ってきました。そもそも、大学の成績は旧世代の評価です。今100点をとっても、30年後にどれだけの価値があるかわかりません。ただし60点は、明日を生きるために必要です。今の学生は30年後に直面する問題を解決しなければなりません。その答えは今、誰も知らないのです。今の知識が役に立たなくなった時に使える知識は、今、役に立たないものの中に入っている。それを見つけるためには、自分自身の本能に従って「穴」を掘ってみるしかありません。どこに穴を掘るべきか理屈はありません。本能としての感性だけが頼りです。成績の40点分は、その感性を磨くことに使ってほしいのです。

どうやら、今の若者のほとんどは自分で勝手に「穴」を掘ったことがないようです。それどころか、勝手に何かをすることに苦痛を感じる人もいます。しかし、それができないと、AI よりも安い労働力としての価値しかなくなってしまいます。そもそも、他人の指示ではなく、自分自身の本能に従って何かをやってみる、というのは生物として楽しいもののはずです。今、大学で教えるべきことは、その楽しさではないかという気がします。そして、これまで大量の規格品を作ってきた大学を、40点分は自分自身という唯一無二の芸術作品を作るアトリエとして再定義する必要があるのではないのでしょうか。もちろん、その芸術作品は、大学卒業時に完成しませんし、将来役に立つ保証もありません。それでも、それを作り続けることで、人生は確実に豊かになると思うのです。

セッション1 「幸せの二つの顔」

青山 拓央 | Takuo AOYAMA

青山 拓央（あおやま たくお）
1975年生まれ。人間・環境学研究科教授。専門は哲学。県立浦和高校、千葉大学文学部、日本学術振興会特別研究員、山口大学時間学研究所准教授等を経て現職。

◆主観的幸福と客観的幸福

この講演のタイトルにある通り、幸せには主観的な顔と客観的な顔の二つが存在します。そして、幸せや幸福といった概念の興味深く不思議なところは、その二つの顔の一方だけが本物であるとは言えない構造を持つことです。このことを見ていくうえで、まず、『幸福はなぜ哲学の問題になるのか』（太田出版）という拙著の前書きの一部を見てみましょう。

主観的幸福と客観的幸福の区別は「…」「充足」と「上昇」の区別に、部分的に対応しています。現在の環境に充足できる人は、たとえその環境に欠けたものがあったとしても、主観的な幸福感を得ることができるでしょう。他方、社会的な上昇を続ける人は、自分の環境を客観的なかたちでより良いものに変えていけるでしょう。これはちょうど、世界の見方を変える生き方と、世界の在り方を変える生き方の違いとして、理解することができます。（17頁-18頁）

「現在の環境に充足できる人」とは、与えられたそれなりの環境に対して自分はじゅうぶんに恵まれていると思ひ、満ち足りた気持ちで暮らしていける人です。他方、「社会的な上昇を続ける人」とは、出世をしたり、お金を儲けたり、より健康な身体を手に入れたり、といった仕方現状を改善していける人です。前者から後者を見れば、「あなたはいつでも何かに追われているようで、その上昇の欲求にはきりが無い。そうやって得られる幸福は、表面的で壊れやすいものに見える」と言いたくなる。しかし、後者から前者を見れば、「あなたの現状には不足があり、自分でもそれに気づいているのに気づかないふりをしているのではないか。満ち足りているのだと自分を騙すことで、社会的な成功のための原動力が奪われているのではないか」と言いたくなる。

主観的幸福と客観的幸福が対立する一つの例がここでは示されています。私のこの講演では別の例もいろいろと見ていきますが、そうすることで明らかにしたいのは、幸福に関して主観と客観がお互いに侵食し合う構造になっている——、強く言えば、そこには闘争性を持った運動があるということです。しかも、この運動には終わりが無い。どこかでその決着がついて、「はい、これが本当の幸福です」というかたちで話を収めることはできない。この運動の場

においてこそ、幸福という概念はとくにその意義を持つのです。

このことを確かめていくために、現代の哲学において代表的な——デレク・パーフィットの著書に由来する——幸福をめぐる三つの説をいまから紹介していきます。快楽説、欲求実現説、客観的リスト説、というのがそれぞれの説の呼び名です。正直に言うと、これらの説のどれか一つを擁護するような仕方で議論を進めることは、幸福とは何かを捉えるうえでの外れになると私は考えていますが、ならばなぜ、それらを紹介するのか？ それは、それぞれの説の長所と短所を比較検討していくことによって、幸福に関する主観と客観の闘争性が分かりやすく浮かび上がってくるからです。

◆幸福の「快楽説」

はじめに、快楽説について。この説によれば、快楽の多い人生こそが幸福な人生だとされます。ここで言う快楽には、身体的なものだけでなく精神的なものも含まれており、満ち足りた気持ちであることなども快楽の一種と見なされます。

快楽は主観的なものであり、何に対してどのくらい快楽を感じるかは人それぞれですから、快楽説によると、ある人が幸せであるかどうかに関して客観的な評価は関わってきません。ですから、たとえば、子どもがずっとスマートフォンでゲームをやっている強い快楽を得ている場合、「そんな快楽は低級だから、もっと高級な快楽を得るようにしたら、もっと幸せになれるよ」とは言えません。あるいは、ひとに意地悪をするのが大好きで、ひとに意地悪ばかりして強い快楽を得ている人物がいた場合、「それは邪悪な快楽であって、そんな生き方が幸福であるなんて認めない」と反発したくなるかもしれませんが、しかし、快楽説をとるならば、これも幸福と認めざるを得なくなります。

低級な快楽や邪悪な快楽のほか、「誘導された快楽」と呼べるものについても考えておきましょう。たとえば、外部の情報遮断された、独裁的な国家に生まれ育ったある人物の例。その国家では人権が大いに侵害されているのですが、そこで生まれ育ってきた人物はそのことを理解していません。そもそも人権という概念を学ぶ機会がなかったからです。このような状況で、その人物が、「自分はじゅうぶんに恵まれており、満ち足りた気持ちで暮らしている」と信じている場合、その人物が何に快楽を感じるかは情報統制によっていわば誘導されていることとなりますが、快

楽説においては、この人物は幸福だと見なされることになりそうです。

◆幸福の「欲求実現説」

次に、欲求実現説について。これは、自分が欲求した事態が実現することこそが幸福だとする説です。この説は快樂説を含んでいませんので、欲求が実現したときに快樂を得ている必要はありません。満足感も快樂の一種ですから、満足感を得ているかどうかは幸福であるかどうかに関係ないということです。

このことを強調する例として、死んだ後に欲求が実現する例を考えることができます。たとえば、有名な画家になりたがっていた人物が無名のままで死んだのだが、死んだ後にとっても有名な画家になった、という例。本人はすでに死んでいるので、有名になったことをもちろん知らず、満足感を得ることもありません。しかし、それでも欲求実現説によれば、この人物は幸せだと言えます。

ところで、この説にとって重要なのは、欲求した事態が本当に、いわば客観的に実現していなければならない、ということです。たとえば、ある人物がとても欲しかった有名な絵画を購入し、良い気分のまま一生を終えたが、その絵がじつは贋作であった場合。この場合には、欲求した事態が実現したと思いをしていただけなので、この説のもとでは幸せであるとは言えません。

欲求実現説についても、快樂説と同様に、客観的な評価が関わってこない点がしばしば問題視されます。どんなことに対して欲求を抱くかは主観的なことです。低級な欲求や、邪悪な欲求、そして誘導された欲求であっても、その欲求を本人が抱いてそれが実現したならば、この説のもとでは幸せと見なさざるを得ません。しかし、先述の例のように、ひとにとにかく意地悪をしたいという強い欲求を持っていて、それを実現している人物は、本当に幸せなのでしょうか？「それは本当には幸せではない」と言いたくなる人も多いのではないのでしょうか？

◆幸福の「客観的リスト説」

三つ目の説は、客観的リスト説です。この説によると、客観的な価値を持ったさまざまな項目によって幸福は形成されています。そして、「リスト説」と言われるだけあって、それらの項目のリストが存在すると考えられており、そこには、健康・愛情・知識・自由・達成……などの項目が入れられます。

この説には、良い面と悪い面があります。良い面は、リストの具体的な項目へと幸福をバラしていくことができますので、客観的な指標として役に立てやすいところです。たとえば、国民の健康状態について調査して、その結果をもとに社会政策を検討し、国民の幸福度を高めていくといったことがこの説のもとでは可能でしょう。こうした社会政策面に関しては、この後のセッション2のなかで詳しくお話をしてくださると思います。（なお、幸福について

のリストではなく不幸についてのリストを考えるなら、それはいま述べた意味合いにおいて、より役に立つ面があるかもしれません。国民の不幸の総量を減らすような社会政策をとることによって、です。）

他方で、客観的リスト説には大きな問題点もあります。おそらく、皆さんもそう思われたでしょうが、幸福についてのリストを作ると言っても、そのリストに何を入れるのかをめぐって意見の対立は避けられません。「リスト説」と言うだけでは絵に描いた餅であり、リストの中身を考えなくてはなりませんが、しかし、その中身について全体の意見を統一することは極めて難しい。特別な立場にある人がそのリストの項目を決めて国民の幸福度を調べるという場合、さきほど述べた良い面はあるものの、価値観の押し付けの問題や、パターンリズムと言われる問題が生じます。そこで採用される価値観はどうしても、多くの人が納得しやすい価値観になってしまうので、多数派の価値観を少数派に押し付けてしまうことになるのです。

◆主観と客観の闘争性

三つの説の紹介が終わりました。いま見た通り、快樂と欲求は主観の側から出発しています。何に対して快樂を感じたり欲求を抱いたりするかは、人それぞれです。しかし、低級な快樂や邪悪な欲求などの問題があったように、主観の側からだけで幸福が定められてしまうことには、多くの人からの抵抗があります。たとえば、「ひとを傷つけて喜んでばかりいる人物も、快樂説のもとでは幸福だ」と言われたとき、「それは本当の幸福ではない」と言い返したくなる気持ちを多くの人が抱く、ということです。こうして、快樂や欲求に対しても、客観的な価値評価がなされます。客観の側から主観の側への浸食がなされていくのです。私はさきほど、「快樂と欲求は主観の側から出発している」と言いましたが、これは単純化された言い方で、実際には、私が何に快樂を感じたり欲求を抱いたりするかは、私が幼少のころから今日に至るまで、客観的な価値評価の側からの影響を受け続けています。この意味でも、主観的幸福は客観的幸福の影響下にあるのです。

一方で、ここまでの話で「客観」と言われてきたものは、物理学等において見出されるような確固たる客観性——、たとえば元素の周期律が持っているような客観性とはずいぶん違います。それは結局のところ、公共性のことであり、主観の多数派性にすぎません。このことは、客観的リスト説における「客観」に関しても同様であり、あのリストにとっての客観性は、どこまでいっても本当は主観の寄せ集めでしかありません。そして、私の幸福にとっては、この私の主観こそがやはり特別な位置を占めているのであり、それゆえ、リストの何らかの項目について「客観的に価値がある」と言われても、私がまったくその項目に関心を抱けなかったとしたら、それが実際に私の幸福を形成できるのかどうかは疑わしい。こうして、客観的幸福なるものは、〈多数派としての主観〉の側からの浸食をつねに免れない

と同時に、〈この私の主観〉の側からの浸食も免れないものとなるのです。

私はこの講演の導入部分で、こんなふうに言いました。幸福に関しては、主観と客観がお互いに侵食し合う構造があり、そこには闘争性を持った運動がある、と。そして、この運動には終わりがなく、終わりのないその運動の場においてこそ、幸福という概念はとくに意義を持つ、と。私がなぜそう述べたのかといえば、幸福とは、私たちが人生を作っていくときに——、あるいは人生を振り返ったときに、主観と客観のある相互浸食を前にして、〈私はこのような相互浸食のかたちを一つの幸福と見なす〉と裁定したときにこそ、まさに生きた概念としての意義を持つてくるものだからです。こうした裁定は、異なる相互浸食のかたちを幸福と見なす観点からの反発を、可能性としてつねに待ち受けています。

さきほど、客観的リスト説のなかで健康という項目を挙げましたが、もし、健康の話をしたなら健康の話だけをすればよいのであって、あえて「幸福」などという言葉を持ち出す必要はありません。では、私たちは実際に、どんなときにわざわざ「幸福」という言葉を使って真面目に語り合うのでしょうか？ もし、皆さんのなかに最近、そうした会話をされたかたがいるなら、それはどんな場面においてだったのでしょうか。それはおそらく、主観と客観の闘争性を持った運動の場の一つだったでしょう。そこには、どの意見に対しても反発の生じ得る構造があり、「あなたの語っている幸福は、本当の幸福ではない」と言い返される余地が残ります。たとえ会話の参加者たちの意見がすべて一致していたとしても、その会話の背後には、「あなたが語っている幸福は、本当の幸福ではない」という声がつねに潜在しているのです。

さて、ここまでは現代哲学における三つの説を検討してきましたが、哲学者だけがいま見たような幸福の分析を行っているわけではありません。たとえば、「ポジティブ心理学」という分野で有名なマーティン・セリグマンという研究者は、次の(1)から(5)を幸福の構成要素として挙げています。(1) 快さや満足感、(2) 熱中した活動、(3) 良い人間関係、(4) 生きる意味、(5) 達成。セリグマンの挙げたこれらの要素を見ると、現代哲学における三つの説とかなり似た部分があることが分かります。そして、ここでも重要なのは、(1)から(5)の要素のなかに主観と客観とが入り混じっており、それゆえ、セリグマンの言う「幸福 (well-being)」についても、主観と客観との相互浸食の運動に目を向けなくてはならない、ということです。

◆ 〈共振〉という考え

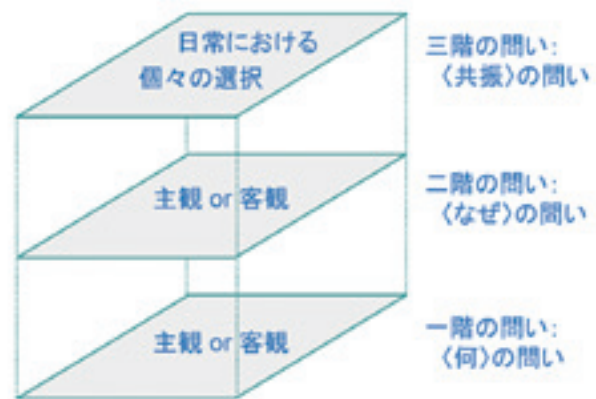
以上のお話から分かる通り、快樂説、欲求実現説、客観的リスト説のうちのどれが正しいかという論争に私は参入しません。代わりに、それぞれの説で述べられているさまざまな良さの〈共振〉と呼べるものについて説明してみます。

日常の小さな選択において、快樂、欲求実現、客観的リストに含まれるある項目の獲得(たとえば健康の増進)がいつに生じることは、じつは珍しくもなともありません。たとえば、朝食にパンを食べるだけでも、近所に散歩に出かけるだけでも、それらはしばしば、いつに生じます。私は以前、偶然的ではない仕方ですれらがいつに生じることを〈共振〉と呼びました(『幸福はなぜ哲学の問題になるのか』第六章)。限られた時間と資源のなかで〈共振〉を目指した選択をするための知性を人間は確かに持っており、この事実を無視した幸福論は頭でっかちなものになってしまいます。実際、三つの説のどれか一つだけに殉じて〈共振〉をまったく狙わない人になど、私は会ったことがありません。

いま、この部屋には、京都大学の学生のかたも居られるようですが、たとえば、京都大学に入ることを幸福の構成要素として挙げるとして、皆さんはなぜそれを選んだのでしょうか？ 喜びのために？ 目標実現のために？ 社会的な価値を得るために？ おそらく、答えはそれらのすべてを——そしてさらに多くのものを——〈共振〉させるためでしょう。

ここで、哲学者のロジャー・クリスプが提示した「枚举的質問」と「説明的質問」という区別を導入します。枚举的質問とは、「幸福の構成要素は何か」という質問であり、説明的質問とは、「あるものが幸福の構成要素だとされるのはなぜか」という質問です。この講演では、枚举的質問のほうを「〈何〉の問い」、説明的質問のほうを「〈なぜ〉の問い」と呼びかえうえで、それらを使って〈共振〉という私の考えをより明確化してみます。

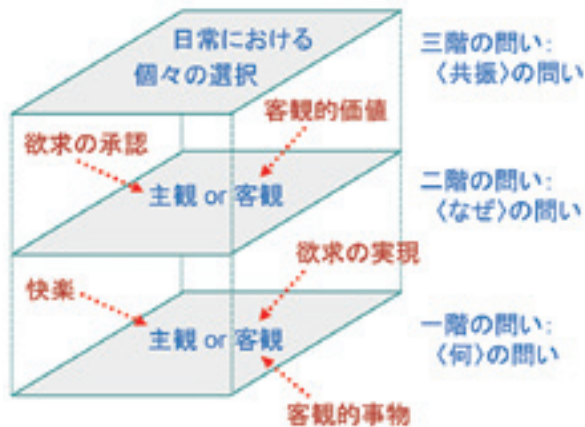
それでは、三階建ての建物になぞらえた、こんな図を描いてみましょう。



三つに分かれた階のうち、一階と二階にはそれぞれ、主観の領域と客観の領域があります。一階では〈何〉の問いが問われ、何らかのアイテムがそこに置かれるわけですが、二階では、一階に置かれた個別のアイテムに対して、〈なぜ〉の問いが問われます。

そして、最上階にあたる三階では、日常における私たち

の個々の選択がなされます。いま、この具体的な一度限りの場面で何を行なうかが選択されますが、私たちはまさにこの選択の際に〈共振〉の問いに答えなくてはなりません。これがどういう意味であるかは、次の図のように、一階と二階にいくつかの要素を配置していくと分かりやすくなります。



快樂説においては、一階に配置されるのはまさに快樂のみです。それは、一階の主観の領域に置かれます。これに対して〈なぜ〉の問いを二階から問うことができますが、それには少なくとも二通りの応答が可能でしょう。一つは、「人間についての客観的な事実として、一階に置かれるのは快樂のみであるから」という応答。もう一つは、「客観的な価値を持つものとして一階に置かれるのは、快樂のみであるから」というもの。これらの微妙な違いについてはこの講演では割愛しますが、いずれにせよ、二階の客観の領域にそれらの理由は置かれます。

次に、欲求実現説においては、欲求された事態の実現が一階の領域に置かれます。それは思い込みではなく、本当に実現していかなくてはならないので、基本的には客観の領域に置くことができるでしょう。重要なのは、「欲求の実現」に関してそれが一階に置かれたのは、その欲求が私自身の欲求として承認されたものであるからです。この図では、二階の主観の領域に「欲求の承認」と記すことで、そのことが表されています。

最後に、客観的リスト説を見ましょう。この説においてもやはり、二階の〈なぜ〉の問いが重要です。この問いに対して「それが客観的価値を持つからだ」と答えるのが、客観的リスト説の本質だからです。この図では、二階の客観の領域に「客観的価値」、一階の客観の領域に「客観的事物」と書くことで客観的リスト説の要点を示しましたが、専門的には、これらの表記や配置について細かな議論が可能です。

とはいえ、いまは完成品としてこの図を提示したいのではなく、〈共振〉という考えを説明するための手がかりとしてこの図を提示したのでした。私たちはこの図の三階において、日常生活での個々の選択を行ないます。その選択

は、日替わりであり、秒替わりであり、一つの学説につねに殉じたものである必要はありません。そして、これこそが大切なのですが、私たちはある一つの選択を実行するだけで、しばしば、一階から二階、そして三階へとつながる複数の経路を同時に成立させることができます。ある一つの行為選択によって、〈何〉と〈なぜ〉の問いに対し、偶然的にではなく複数の経路をたどる応答が同時になされること——、〈共振〉とはまさにこのことを意味します。

〈共振〉という考えは、あの三つの説のうちのいくつかを単純に合成したものではありません。たとえば、快樂と欲求実現の両方が得られたときに人間は幸福になる、といった、快樂説と欲求実現説のハイブリッド説があるのですが、私の示した〈共振〉説はそのようなものではありません。このことは、いま述べた、「ある一つの行為選択によって、〈何〉と〈なぜ〉の問いに対し、偶然的にではなく複数の経路をたどる応答が同時になされること」という説明からも、じゅうぶんに理解して頂けると思います。

◆普遍的な原則がないからこそ

幸福とは、たんなる人間の状態ではなく、人間の選択にも関わってくるものです。そして、人間は限られた人生の時間のなかで、限られた自分の持ちもの、自分に与えられたものを前にして、行為を選択して生きていかなければなりません。だからこそ、〈共振〉を狙う生物として人間は形作られてきたのです。

とはいえ、バランスの取れた〈共振〉をつねに狙えるわけではないことも人間の重要な事実であり、人生の時々々の選択において——、とりわけ大きな選択において、あるものに手を伸ばすことは、他の何かを諦めたり突っぱねたりすることを、すなわち〈共振〉の部分的な放棄を私たちに求めてきます。たとえば、やりたい仕事と家族の介護のそれぞれにどれだけの時間を割くか？ そのことで、〈共振〉のどの部分を削り取り、代わりにどの部分を維持するか？ こうした大きな選択は個人的で具体的な細部に満ちており、何らかの一般論によって対応することには限界があります。歳を取るごとに変化する個別的な状況を前にして、自分なりの〈共振〉のかたちをそのつど探っていくなくてはなりません。

これは結局、〈このような生き方をすれば幸せになれる〉といった普遍的な原則はおそらくない、ということです。しかし、そのような原則がないということの、いま述べたような「意味」を知っていることは価値のあることだと思います。そして、この普遍的な原則のなさは、私たちに不安をもたらす一方で、ある種の「豊かさ」と呼べるものも私たちにもたらしてくれるでしょう。このことについては、山口尚さんの著書『幸福と人生の意味の哲学』（トランスビュー）のなかに〈共振〉について書かれた一節がありますので、それを引用してみます。

快樂を得る「だけ」のためにパンを食べること、食欲

を満たす「だけ」のためにそれを食べること、客観的に良いとされている状態を得る「だけ」のためにそれを選ぶこと——こうした「だけ」はしばしば人生を貧しくし、そしてそれをこの意味で「不幸」にするでしょう。[…] 私は青山の言う「共振」を、固定的な「だけ」から離れて諸要素へ振れ動く広がりの中で生きることと理解します。そして彼の議論から《「だけ」に留まらない運動とそれによって得られる豊かさが幸福にとって重要だ》という見方を引き出したと考えています。(259-260頁)

ここでは、私がじゅうぶんに書き切れなかったことを見事に書いてくださっている。実際、山口さんのこの文章を読んで初めて、青山が〈共振〉について言っていたことの意味が分かった、と述べていた人もいます。

一つの価値基準に縛られないということは、普遍的な原則のなさによる不安を与える一方で、人生に豊かさを与えます。一つの価値基準、一つの「だけ」のために生きていくのではなく、多様な面を〈共振〉させながら、振れ動く広がりの中で生きていくこと——、それによって得られる豊かさは幸福にとって重要なものなのです。

◆終わりに

それでは、私の講演の、最後のスライドを見てください。

終わりに

- ・ 山口氏の言う《「だけ」に留まらない運動》の豊かさと、その背後に在る、別の〈運動〉の生々しさ。
- ・ 主観と客観が浸食し合う生々しい〈運動〉の場においてこそ、幸福はとくに語られる意味を持つ。
- ・ そして、それは語られるだけでなく、自分なりの共振のさせ方と共に人々に差し出される。

山口さんがおっしゃるように、「だけ」に留まらない運動、一つの価値基準に縛られることのない運動は、人生に豊かさをもたらします。しかし、思い出してください。今回のお話の中心的なテーマは、主観と客観の闘争性でした。この観点から捉え直してみると、山口さんの言う運動の豊かな側面の背後には、別の生々しい運動があることが分かります。それはまさに、先述した主観と客観の相互侵食の運動です。幸福という概念には、主観と客観のどちらの側からそれを捉えようとしても、必ずそこから逃れていく部分がある。闘争性を持ったこの運動こそが、ある人生の在り方を括り出し、それを幸福（あるいは不幸）として語ることに口先だけでない意義をもたらします。

ですから、スライドの最後の文章にあるように、幸福とはたんに語られるだけのものではありません。「幸福とはこういう概念でしょう、理屈で言えば、幸福とはこういうものでしょう」といった分析をして、それで済ますことはできない。生々しい運動の場において、ある人生の在り方を自分から相手に提示したり、相手から自分に提示されたりしながら、「そんなものは本当の幸福じゃない」、「いや、これもまた一つの幸福だ」といったやり取りが行なわれる。主観と客観のせめぎ合いのなかで、自分が実際にどのような〈共振〉を積み重ねてきたのかを振り返らざるを得なくなる——。

私がいま述べたのは、自分が立派に生きてみせなければ「幸福」を語れない、なんてことではありません。この講演をしている私だって、立派に生きて来られてはいません。むしろ、私には欠けたところが多くあり、ふらふらと生きて来たからこそ、ある時期から自分なりの〈共振〉のさせ方を意識するようになりました。能力や環境や運や……、デコボコのある与えられたものなかで、他のひとから見ればいびつであろう、自分なりの〈共振〉を探っていく。欠けたところのある自分にはこんな〈共振〉のさせ方しかできないが、これが私なりの幸福である——。こんなふうには、「幸福」という言葉はたんに語られるだけのものではなく、自分なりの〈共振〉のさせ方と共にひとに差し出されるものであって、さらに、そこには潜在的な反発がつねに待ち構えています。この構造があるからこそ、幸福という概念はじつに面白い、論じ合う価値のあるものとなっているのです。

討論

青山拓央教授の講演を受けて、討論者、司会を含めて会場で活発な討論がなされた。以下は編集部によるその要約である。

討論者のひとりで、地球科学、古生物学を専門とする石村豊穂准教授からは、経験が乏しい子どものときには一般的なリスト説が強くて、大人になるとそれが個性的なものに変わってゆくなど、年齢とともに「共振」も変化してゆくことがあるのか、また、講演では個人の幸福だけが論じられていたがコミュニティから国家にいたるまでの社会的な視野での幸福を考えるとどうなるのか、という質問がなされた。

これに対して講演者は、経験知のある親が子どもに幸福のあり方を押し付ける場合も主観（子ども）と客観（親）の闘争と捉えると分かりやすいが、「共振」は年齢とともに必ずしもよくなってゆくと限らないこと、また、幸福という概念には共通の価値観で家族、職場、コミュニティを束ねてゆく力があるが、そのなかで少数派が多数派の価値観によって浸食されてしまわないツールが必要だと答えた。

もうひとりの討論者、細胞生物学、植物形態学を専門とする幡野恭子助教からは、母親が不意に倒れ、母親の入院、リハビリという生活が続くなかで自分のなかの「幸福」の

イメージが大きく変わり、「共振」という考え方に強く共感したというコメントのあと、人間を超えて生きものの自体の「幸福」というものが考えられるのか、という質問がなされた。

これに対して講演者は、植物は難しいが哺乳類でも犬や猫になると幸福と不幸について考えられるのではないかとして、自宅で飼っている対照的な兄弟の黒猫と白猫について語った。いずれも野良猫だったのが保護猫として世話されたものだが、黒猫はいつも泰然として幸せそうだが、白猫は神経質でいつもびくびくしている。それでも、野良猫のときにはこの白猫の警戒心が生き延びるうえで大きく役立ったに違いない。この二匹の関係は人間の幸福についても象徴的に示しているのではないかと講演者は問いかけた。

さらに、有機化学を専門とする司会の廣戸聡准教授もまじえて、研究者としての生活と私生活における「幸福」、ワークライフバランスなどをめぐって議論が展開された。

会場のフロアからは、3階建ての図で1階が「なに」2階が「なぜ」となっていたが、逆に1階が「なぜ」2階が「なに」とは考えられないか、という質問があった。これに対して講演者は、時間的な順序で考えると1階が「なぜ」2階が「なに」とも思えるがあくまで概念的な構造として1階を「なに」2階を「なぜ」としていること、またクリストファー・ウッダートという研究者の分析を踏まえて図を構成していると答えた。

オンライン参加者からは、幸福の基準が揺れ動くことから生じる生きづらさをどう考えるか、という質問があった。これに対して講演者は、主観的な価値がぶつかり合って社会が維持されなくなるということではなく、必ず客観の側からも歯止めをかける構造になっていることの重要性をあらためて確認した。そのうえで、これまでは問題にならなかった価値選択も思わぬ形で現われる例として、子どもをつくるに伴う倫理的な悪の側面を指摘する、最近の「反出生主義」をめぐる議論を、講演者は最後に紹介した。



セッション2「幸せに生きるために」

柴田 悠 | Haruka SHIBATA

柴田 悠 (しばた はるか)
人間・環境学研究科教授。1978年東京都生まれ。
2011年京都大学大学院人間・環境学研究科修了。
専門は社会学。同志社大学准教授、立命館大学准
教授、京都大学准教授を経て2023年より現職。

◆「共振」というキーワード

みなさん、こんにちは。京都大学大学院人間・環境学研究科で社会学を研究しています柴田と申します。タイトルとして「幸せに生きるために」を使わせていただいています。先ほどの青山先生のご講演、とても感銘を受けまして、「共振」という非常に重要なキーワードをいただいたと思っています。

私自身も子どもを育てながら仕事をして、まさに日々なんとか共振しながら荒波を漕いでいます。たぶん誰もがそういった経験をしていると思います。先ほどの青山先生の共振のお話を私なりに咀嚼して振り返ってみますと、自分が置かれた状況はいろんな条件が絡み合っているいろいろな困難があるけれど、唯一性のある状況、いま自分しか体験していない状況である。その唯一性の状況の中でなんとかいろいろな条件を、バランスを取りながら共振していく。まさに唯一性のある生き方を試行錯誤しながら、共振というのはまさに自分の人生の唯一性、いまここでの自分の生の唯一性をそのまま引き受ける、体験する、そういう生き方なのだと思います。

その現実を無視しないように、それをそのまま引き受ける。あるいは唯一性をしっかり引き受けることで、逆にそれが唯一の人生、ほかでもない自分の人生を生きていることの実感につながるのではないかと。確かに日々、つらい面とか大変な面があるわけですが、唯一性を体験する、しっかり引き受けて体験していくことが、結果的には自分の、まさに唯一の人生を生きていく実感につながっていく。

それを幸せと呼ぶかどうかはまた別問題で、それを幸せと呼んでしまったら、それも幸せの一義的な定義になってしまうので、青山先生のお話からずれてしまうと思うのですが、幸せよりもっと人生において大事なものを、それを提示していただいた気がしました。

◆幸福をめぐる心理学と社会学

私自身はもう少しシンプルな話になってしまうと思います。100%ではないにせよ、多くの人にとって幸せに生きたい気持ちはあるのだらうと思います。しかし、幸せに生きるためにどのような知恵がサイエンスの中でこれまである程度明らかになっているのか。もちろん100パーセント確実な答えはありません。常にサイエンスは確率論的なもので、確率的に比較的確からしいことまでは言えますが、100パーセント確実というのはあり得ないわけで、それは

自然科学でも、われわれの社会科学でも同じだと思います。

ただ、こういう状況においては平均的に見るとこういう選択のほうが幸福感を高めるらしいという、確率論的な幸せのコツのようなものは、とりわけ心理学を中心に研究されています。私は社会学ですが、社会学においてもどうしたらより多くの方が幸せに生きられる社会を作れるのか、その確率論的な答えはある程度見えてきています。

ただし、これは青山先生のご講演にもあった非常に重要な視点ですが、あくまでそれは平均値、つまり多数派の答えであって、少数派の人はどうしてもその平均値から漏れてしまうということです。まず、そこに気をつけなければいけない。そこそが哲学、倫理学の手法だと青山先生はおっしゃられていて、まさにそうだと思います。

社会学の中には量的な社会学と質的な社会学があります。インタビューやフィールドワークをする質的な社会学はやはり少数派の人々、マイノリティの人々の生きる現実に焦点を当てて、それを明らかにしていくことで、少数派の人にとってもより生きやすい社会を作っていくことが大きな仕事です。私はどちらかという量的社会学のほうにおりまして、量的社会学ではアンケートデータを使って平均値に基づく計算をして、どうしても平均値寄りの仕事になってしまいます。

ただ、やはり社会学ですので、平均的な傾向にもいろいろな多様性がある。社会学や経済学では、それを「異質性」と呼びます。ヘテロジニティ (heterogeneity) と言いますが、異質性を明らかにしていって、こういった種類の場合にはこういう道が、確率論的により幸せに近づきやすいとか、そういう場合分けをして、その中の平均値を見つけ出す形で、なるべく多様な解、多様な答えを見出そうとしています。それでもやはり平均値に過ぎないのはまさにそのとおりで、その平均値から漏れてしまう少数派の人々にしっかり目を向けていく。それが質的社会学、あるいは人類学とか、究極的には倫理学や哲学の仕事になっていくのかなと思った次第です。

では、早速内容に入っていきます。

簡単に自己紹介しますと、社会学の分野でとりわけ幸福とかウェルビーイングの要因を統計的に研究しています。とりわけその社会的・政策的な要因を中心に研究してまいりました。なので政策、とりわけ子育て支援などの社会保障の効果についての研究をしています。その関係で日経新聞で、「幸せに生きるために」という連載を今年の1月にさせていただきます、これをきっかけに今回も研究科のほうか

からお声掛けをいただきました。今回はこの連載の中のポイントに加えて、別の知見もご紹介したいと思います。

まず、先ほどの多数派的な平均値の話にどうしてもなってしまうのですが、幸せというものの効果や秘訣が、とりわけ心理学の中である程度明らかになってきています。それをざっとご紹介したいと思います。

◆心理学の研究から

たとえ生活水準や所得などの状況が同じであっても、幸福感がより高い人は、その後の人生でいろいろな状況が良くなりやすいことが分かっています。例えば、他人に親切にする行動や、仕事の質や満足感、収入が上がっていく。収入は2割くらい上がるという研究もあります。さらに人間関係がより豊かになっていく。より健康になり寿命も延びるという研究もあります。

この幸福感は先ほどの青山先生のお話で言えば、主観的な自分の感覚ですね。主観的なものの見方で、自分がどれだけ幸福と感じているか。その自己申告の点数です。多くの場合、10点満点で計られたり、あるいはより細かく見る場合は数十個の質問に答えてその平均値から計算されたりしますが、基本的に全て主観的なものです。本人が幸福と思っているかどうかです。それによっていろいろな効果、副次的なメリットがあることが分かっています。

このようにすれば主観的幸福感が高まるということも、いろいろな調査や実験で分かっています。例えば一番簡単なもので言えば、味わって食べる。毎日、私たちは食べるわけですが、味わって食べる習慣がある人は幸福感が高い。これは学歴とは関係なく、味わって食べる習慣の高い人は幸福感が高い。また、経験を他者と味わうことで幸福感が上がる。

さらに、自然豊かな場所、例えば公園等で20分以上過ごすだけで幸福感が上がるという実験もあります。面白いのは、これは運動量とは関係ないですね。ただボーッとしているだけでもいい。自然の豊かな場所で20分以上いるだけで幸福感が上がるということが分かっています。あとは睡眠、もしくは休養ですね。

お金の使い方として、所有ではなく経験にお金を使うことのほうが、幸福感が高まる。これも実験で分かっています。また、体を動かす。有酸素運動はとりわけ効果が高いことが分かっています。さまざまな他人とおしゃべりや、そういう能動的な活動や外交的な行動。目標をもって熱心に行動する。自分の強みを生かす。楽しい記憶を思い出す。感謝の気持ちを表現するだけでも幸福度が上がるという実験もあります。

もう一つ、今回の私の話で特にポイントと思うのが、「幸福追求の落とし穴」です。つまり意識的に幸福感を高めようとすると逆に幸福感が下がってしまうことが、すでに心理学の実験等で明らかになっています。落とし穴を避けるにはどうしたらいいかも、最近の研究で明らかになっています。

落とし穴を避けるポイントは二つあります。一つは、他者の幸福も視野に入れることです。先ほどのディスカッションにおいても、個人の幸福だけでなくそれを支えている他の人々、あるいはコミュニティとの関係性の中での幸福、そのような他者との関わりがありました。やはり他者の幸福を視野に入れて初めて幸福が安定化しやすいことが分かっています。

もう一つは時間的な面ですね。中長期的な視点をもつことで幸福感が安定化しやすい。逆に短期的視点をもって短期的な幸福ばかりを追い求めてしまうと、一喜一憂してしまつて非常にストレスが上がってしまうことが分かっています。

つまり、他者の幸福を視野に入れること、そして中長期的視点をもつことが大事ということがポイントですので、参考になるのではないかと思います。もちろんこれも平均的な傾向ですので、あくまで参考程度ということにはなります。

◆社会学の視点で捉えた幸福

では、もう少し私の専門の社会学に近づきます。これは社会学の研究で分かっていることですが、どうしたら幸せな社会を作れるのかも、国際比較の研究等で明らかになっています。幸せな社会というのはより多くの人が幸せを感じている社会、より多くの人が幸せだと主観的に感じている社会です。

まずポイントの一つ目は、寛容さです。

先ほどのディスカッションでも少数派の人々を無視しないとか、それぞれ置かれている状況が個別で違うことだとか、そういう多様性のお話があったと思います。ちょっと通じるところがあるのですが、多様性に寛容であること、寛容さが高い社会、その国の人々が多様性に寛容になればなるほど、その後の人々の平均的な幸福感が上がっていく、という国際比較の研究結果があります。あとで詳しくデータをお見せしようと思います。

あともう一つ、これはまさに先ほどの共振の話と通じると思っっているのですが、「私生活と仕事の両立支援」という社会制度の充実ですね。企業の取り組みでもいいし、行政の施策でもいい。両方重要なんです。労働者一人ひとりの多様な私生活と仕事の両立です。先ほども介護と仕事の両立、育児と仕事の両立の難しさという話がありました。ライフ・ワーク・バランスという言葉もありますが、これがいまの社会では非常に多様で、流動性も増していて、人々の置かれている状況も多様です。なかなかすぐにはお互いに分かり合えない。両立を支援し支え合うのには非常に困難があるのですが、この支援が充実している社会であればあるほど幸福感が高いことが分かっています。これもあとでデータをご紹介します。

こういった点は、社会の運営、あるいは組織の運営のうえでの参考になるポイントかと思っています。

では、もう少し詳しいデータの話に入ります。まず、「幸

「幸福追求の落とし穴」について少し詳しく紹介します。まずは2011年に発表されたある実験です。

◆幸福追求の「落とし穴」

被験者をランダムに2つのグループに分けて、両方のグループに幸福感の差がないことをまず確認します。本当にランダムに分けられたグループです。そして、一方のグループのみに、「幸福感が高いと非常にメリットがある、収入が上がるとか人間関係が豊かになる」とかを教えます。するとそのグループの人たちには、幸せになりたいという動機づけが与えられます。その後にある映像を見せます。その映像は、ほーっと見れば楽しくなるような映像です。それなりに楽しい映像です。ただ、そんなに楽しくなるわけではありません。ちょっと楽しくなるくらいです。それを見せます。すると幸福感の重要性を教わったグループは、もう一方のグループよりも、幸福感が有意に低くなってしまった。幸福感が上がりにくかったということです。

なぜか。やはり幸福を得たいという動機づけが強すぎるがゆえに、そういう動画を見たときに幸福になろうと意識的に思ってしまうのですが、かえって幸福になりにくい。なぜこういうことが発生したかをいろいろ統計的に、ほかのデータで確認すると、失望感で完全に説明ができたそうです。失望感というのは、この映像にがっかりした、あるいはこの映像をもっと楽しめばよかったという失望感ですね。その映像は本当にささいな、ささやかな映像なので、そんなに幸せになるわけではないし、期待すればがっかりしてしまう。あるいはすぐ終わってしまうので、もう少し楽しめばよかったという後悔もあり得るような映像です。幸福になりたいというグループからはそのような失望感が生まれてしまう。その失望感によって幸福感がなかなか高まらなかったことが統計的に説明できたという研究です。

この研究を皮切りに、どうしたら幸福感が安定的に築かれやすいのかという研究がいくつか出てきます。2012年の発表の実験では、なぜ幸福感が下がるのか、別の説明も出てきています。それは孤独感です。先ほど失望感がありましたが、別の側面として孤独感も測定すると、幸福になりたいと動機づけられた人たちは孤独感が高まってしまうそうです。自分の幸福ばかりに焦点を当ててしまうので、他者とのつながり、いまいる友人とのつながり、家族とのつながりをどうしても忘れがちになってしまう。その結果、孤独感が強まってしまっていることが分かっています。

◆「落とし穴」を避ける2つのポイント

2016年には、「落とし穴の避け方」についての実験が発表されました。それは他人の幸福を視野に入れることです。グループを2つに分けて、一方のグループには、自分に親切な行為をしなさいと指示します。すると結果的にどうなったかということ、ストレス状態になってしまった。つまり自分に親切な行為、自分をより幸せにする行為をしよう、しようと思うわけです。でも、なかなかそんな簡単に

幸せになれるわけではない。4週間の実験だったのですが4週間の中には人生のいろいろなストレスやいろいろな出来事があります。それによって抑うつ的になってしまったり、気分が落ち込んでしまったりすることも当然ある。しかし、幸せになろうと動機づけられているので、抑うつを非常にプレッシャーに感じてしまう。それで結局ストレス状態になってしまふ。

他方のグループには、他者に親切な行為をしなさいという指示をします。他者というのは同居の家族でもいいし誰でもいいのですが、これを4週間続けると幸福感が高くなると共に、ストレス反応が減った。つまり自分のことはとりあえず置いておいて、他者に普段よりも親切にすることを週に1日だけ3つ行う。それを4週間続ける。するとそんなに無理がない。週に1日だけ3つ何かをする。それを4週間、無理なく続けるようにすると幸福感が上がり、ストレスが減る。自分だけにフォーカスするのではなく、他者が喜ぶ姿を見る、あるいは他者に自分が貢献している充実感ですね、そういったものから幸福感が高まったり、ストレスが減ったりする。

もう一つのポイントが中長期的視点です。これは実験ではなく最近の調査ですが、非常に短期的な視点をもっている人、各瞬間での幸福感を求める人、瞬間、瞬間での快楽を求めてしまう人は、抑うつやネガティブ感情を覚えやすく、自尊心も低い傾向が明らかになっています。なぜ、そういう関連が見られるかに関しては、抑うつを避けようとする傾向によってかなりのことが説明できたそうです。

つまり、各瞬間、その瞬間、瞬間で快楽を求めよう、幸福を求めようとしていると、ちょっとでも嫌なことがあったりすると、快楽が減ってしまったと思ってしまう。非常にそれがストレスになってしまう。抑うつを避けなくてはいけないというふうになるわけです。これが非常にプレッシャーになって、自尊心が下がってしまったり、ネガティブ感情を覚えやすくなってしまったりするそうです。

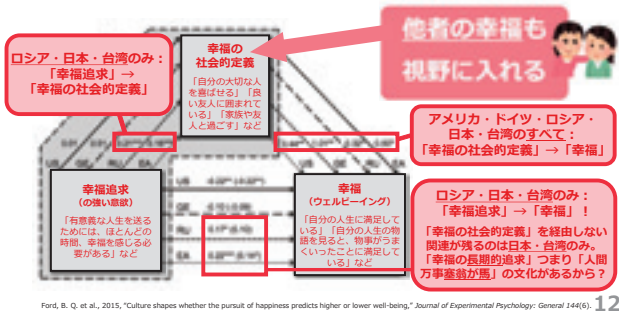
他方で、中長期的な視点をもつ。例えば1日全体で幸せになればいいとか、あるいは今後の幸福のために幸せになりそうな行動をしようというふうには、もう少し長い視野で見ている人。こういう人は抑うつやネガティブ感情を覚えにくく、自尊心や人生満足感も高いことが分かっているそうです。この関係は抑うつを回避する傾向とは関係がないということで、おそらく原因と結果が双方向的に関係していると思います。つまり自尊心や満足感が高い人は余裕があるので長期的な視野で生きやすいという、逆の因果関係もあると思います。長期的な視野と人生の満足感の高さ・自尊心の高さは両輪のように、互いを高め合う関係にあるようです。ですから、おそらく生き方として長期的な視野をもてるような状況になることが、重要なのではないかと見てとれます。

◆幸福の社会的定義の文化による差異

先ほどの他者の幸福を視野に入れるということは、理論

的に重要なのですが、その後の研究で、文化によって、あるいは国によって、この傾向が違うということが明らかになっています。これは京都大学の人と社会の未来研究院の内田由紀子先生たちのご研究です。いま内田先生は研究院院長をされていて人環の連携的な構成員でもあります。内田先生は日本を代表する文化心理学者ですが、内田先生らが行ったこのご研究は非常に興味深いものですので、ここでご紹介します（図版1）。

ポイント①：「落とし穴」の避け方



Ford, B. Q. et al., 2015, "Culture shapes whether the pursuit of happiness predicts higher or lower well-being," *Journal of Experimental Psychology: General* 144(6). 12

先ほど申しあげた、幸福追求が強すぎると幸福感が下がってしまうという落とし穴。実はこれまでの研究は、ほぼアメリカで行われた実験でした。そしてこの新たな研究でも、アメリカでは幸福追求と幸福感のあいだには負の相関がありました。幸福追求が強いと幸福感が低いという有意な関連がここでも確認できました。しかし実は、日本や台湾のような東アジアでは、この関係が負ではなく正であることが明らかになりました。つまり、幸福追求が強いと幸福感が高いという有意な関連が発見されました。ですので、実は日本では、幸福追求についてそんなに心配する必要はないのかもしれないのです。

日本人においては、そもそも幸せを求めるときに他者の幸福を視野に入れがち傾向があります。これを「幸福の社会的定義」といいますが、このような傾向が日本人や台湾の人には強く、幸せになろうと動機づけられると、自ずとデフォルト的に他者の幸福を視野に入れながら幸福を追求する。そういう文化、つまり集団主義的な文化がある。そういう中で幸福を追求すると、デフォルトとして他者の幸福が入っているので、結果的に幸福になりやすい。ですので、日本の場合は、幸福を追求する人は幸福感が高い傾向があり、なぜそうなのかは、「幸福の社会的定義」、つまり他者の幸福を視野に入れた幸福の追求のあり方で、かなり説明できる。そういう研究結果です。

さらに興味深いのは、幸福の社会的定義を経由したルートをコントロールして、ここで説明できる部分を除外しても、なお日本や台湾では、幸福追求と幸福感の有意な正の相関が残っている。これは面白い発見だと思うのですが、これはまだ論文では解釈されていませんし、その原因は明らかになっていません。

ここで、幸福の落とし穴を避けるもう一つのポイントがありました。それは何かと言いますと、中長期的な視野で

幸福を追求することでした。もしかすると日本や台湾のような東アジアでは、幸福追求のデフォルトとして、他者の幸福を視野に入れることと同時に、中長期的に幸福を追求することが、文化的なデフォルトになっているのではないかと。当然の文化的な前提として、「幸福というのは中長期的に求めるものだ」という視点や価値観がもしかするとあるのではないかと。そういう仮説が成り立ち得ると思います。もちろん検証されていないので分からないのですが。

例えば、これは私がすごく好きな言葉ですが、「人間万事塞翁が馬」という言葉がございます。iPS細胞の山中教授も好きな言葉だそうですけど、非常に含蓄のある言葉だと思います。幸せだなというような出来事が起こったら、それは不幸の始まりかもしれないし、不幸だと思う出来事が起こっても、それは幸せの種かもしれない。そういう中長期的に人生を見ようという視点です。この中国のことわざが普及している漢字文化圏、つまり日本や台湾といった文化圏においては、もしかすると、幸福追求を長期的に追求する文化があって、それゆえにこの他者を視野に入れた幸福追求だけでは説明できない、幸福追求と幸福の正の関係があるのではないかと。そういう仮説も成り立ちうると思います。これはまだまだこれから研究されるところだと思いますが、非常に面白いところかと思っています。

◆「生きがい」の重要性

あと、日経の連載では「生きがい」の話も書きましたので、少しだけご紹介いたします。

時間的な広がりや社会的な広がり、先ほどの2つのポイントを満たした幸福追求のあり方は、「ウェルビーイング」とか「ユエダイモニア」、「人生の目的」と言われていたりします。こういったより広い視野で幸福を追求する考え方をもっている人は、非常に健康であるということがさまざまな研究で分かっています。そういう人生の目的意識が高い人は、だいたい死亡リスク等が2割ほど下がるそうです。

この人生の目的というのは、日本語においては「生きがい」という言葉で表現されます。日本での調査でも、生きがいをもって生活している人は7年後までの健康リスクが有意に低い、つまり健康であることが追跡調査で分かっています。ですので、先ほどの2つのポイント、他者の幸福を視野に入れつつ中長期的に幸福を追求することを、日本語の一言で表現すると、「生きがいをもって生きる」ということなのかもしれない。自分一人だけのための生きがいというのは、ちょっと考えづらい。やはり他者との関係の中で、生きがいというものは意識される。

あと、生きがいは長期的なものですね。瞬間的な単純な感情ではありません。ですので生きがいを求めることが、やはり日本では当然の、よくある言葉として成立していますが、このような文化が健康や長期的幸福に結びつきやすいのかもしれない。

どういう人が生きがいをもっているのかも、調査で分かっています。現役世代においては、例えば男性の場合は

自営業の人、女性の場合は仕事をもっている人は生きがいをもっている確率が高い。あとはもちろんお金に余裕があったり、配偶者がいたりというような恵まれた状況にある人も生きがいが高いことが分かっています。

高齢者においては、男性の場合は趣味をもっているとか、社会活動を行っているとか、また女性の場合は、働いているとか、趣味があるとかです。ほかにも条件はありますが、このような人は生きがいをもっている確率が高いことが明らかになっています。生きがいを求める一つのポイントは、こういったところにヒントがあるのかもしれない。とりわけ社会的活動、趣味とか就業とか、そういったものがポイントと考えられます。つまり生きがいのためには「社会」が必要だということが示唆されると思います。

◆幸福度を高める「寛容化」

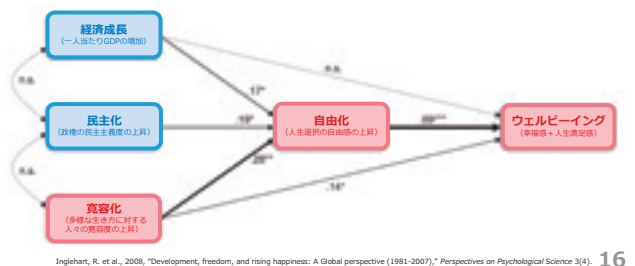
では、どのような社会が重要なのか。他者の幸福も視野に入れながら幸福を追求するのが生きがいになりやすいわけですが、その他者が不幸であれば、自分の幸福も追求できない。やはり自分の幸福追求は他者と一緒に幸福を感じ合うことですから、他者の幸福は非常に重要なわけで、結局、同じ社会を生きる人々の幸福が重要になると思います。

では、どうすれば幸せな社会が実現できるのか。これは社会学の領域になります。これまでは心理学の領域がメインでしたが、ここから社会学の研究を詳しくご紹介します。

先ほど最初に結論だけを紹介しました。一つ目のポイントが「寛容さ」ということです。これが、「寛容さが重要だ」ということの根拠になっているデータですが、ここに「寛容化」というのがあります。これは1981年～2007年までの、途上国も含めて世界55カ国のさまざまな多様な国々の人々のアンケートデータを大規模に分析した結果です(図版2)。

「幸せな社会」の条件①：「人々の寛容さ」

世界55カ国(先進諸国+途上諸国)の1981～2007年のデータ変動を分析



Inglehart, R. et al., 2008, "Development, freedom, and rising happiness: A Global perspective (1981-2007)," Perspectives on Psychological Science 3(4), 16

26年間のなかで、やはりさまざまな変化が生じます。一つは経済成長ですね。もう一つは民主化。そしてもう一つが寛容化で、より多様な生き方に人々が寛容になっていく。少数派の人々、先ほど青山先生のお話にあったような少数派の人々に対しても、寛容になっていく流れがあります。リベラル化と言ってもいいかもしれません。この3つの要素によって、人々の自由の感覚、自分の人生を自由に選択できる、この人生を自由に選べるという感覚が高まっ

ていっています。その背景としてこの3つの要因があるのですね。

自由の感覚が高まると、その結果として人々の幸福感や人生満足度が高まっていく傾向があります。この数字を見ていきますと、とりわけ幸福感や人生満足度と関連が強いのが、寛容化なのです。もちろん経済成長、つまり生活が豊かになったり、民主化されて人々の願いが叶いやすくなったりも重要ですが、それ以上の影響力をもつのがこの寛容化です。寛容になると人々は、少数派の人々も含めて、より自由な人生を生きられるようになって、それによって幸福感が高まる。このルートが一番太いルートであることが分かった。さらにこの寛容化には、自由化を経由しない独自のルートがあることも分かりました。

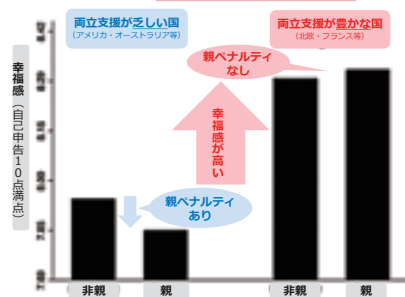
総合的に見ると、寛容化が幸福感や人生満足度を高める効果は、経済成長や民主化の効果の2倍以上もある、という計算結果になります。もちろん経済成長、民主化も重要ですが、寛容化はその2倍以上の効果でウェルビーイングを高めるといことが、平均的な傾向としては見られるということです。

もちろんこれはあくまで平均的な傾向ではありますが、寛容化は少数派の人々が生きやすくなるということですので、必ずしも少数派の人々が平均的な傾向によって阻害されるわけではない。少数派の人々と両立しうる傾向としては、実は寛容化が重要ではないかと思われるところです。

◆両立支援の必要性

もう一つのポイント、両立支援というポイントを先ほどご紹介しました。データで簡単にご紹介します。こういうデータがあります。これも国際比較の研究ですが、この両立支援の充実度は、例えば、有給休暇を年間で何日取得できるのかということ。また、フレックスタイム制、つまり労働時間は変わらないけれども始業時間と終業時間を自由にスライドできる仕組みを、何%の人が利用しているのかということ。さらに、育児休業を何カ月取得できるのかということ。こういった指標で計算されています(図版3)。

「幸せな社会」の条件②：「私生活と仕事の両立支援」



Glass, J. et al., 2016, "Parenthood and happiness: Effects of work-family reconciliation policies in 22 OECD countries," American Journal of Sociology 122(3), 18

そのような両立支援が充実した社会は、たとえば北欧諸国やフランスなどです。両立支援が乏しい国は、アメリカやオーストラリアなどです。この研究では残念ながら日本が入っていませんが、とりあえず先進諸国の傾向が分かり

ます。

縦軸が主観的な幸福感、10点満点の幸福感です。あなたはどのくらい幸せですか、とても不幸なら0点、とても幸福なら10点として、何点が最も近いのかというアンケート項目です。横軸に親と非親というふうに書いてあります。親は「子どもと同居している人」、非親は「子どもと同居していない人」です。

まずポイントは、両立支援が豊かな国は、親も非親もともに、他の国よりも幸福感が有意に高いことです。これはやはり多様な私生活が実現しやすい。先ほどの共振ですね。おそらくこの両立支援が充実している社会は、多様な私生活を守る社会です。多様な生き方を守りながら働く。資本主義社会では労働が必須になりますが、労働と多様な生活を両立しやすい、そういう社会はおそらく共振しやすい社会なのかと思います。バランスがとりやすい社会は幸福感が高いと社会学的には解釈されます。

逆に、両立支援が乏しい国では、親も非親もともに、他の国よりも幸福感が低い。

さらにそのように両立支援が乏しい国のなかで、親と非親とを比べますと、親のほうが有意に幸福感が低い結果が出ています。子どもがいる人のほうが幸福感が低くなってしまっているんですね。この育児に伴う幸福感の低下を「親ペナルティ」と言います。

そして実は、日本での調査結果では、似たようなことが女性だけで言えます。つまり日本では、育児は女性が担う傾向がまだに強く、最近のデータでも日本の有配偶女性、結婚している女性を子どもが「いる人」と「いない人」で比べると、子どものいる人のほうが幸福感が有意に低いことが分かっています。つまり、「親ペナルティ」が日本では女性だけで見られるわけです。このように両立支援が乏しい、育児と仕事が両立しにくい社会では、親や子どもがいることによって、残念なことに幸福感が下がってしまう傾向がある。

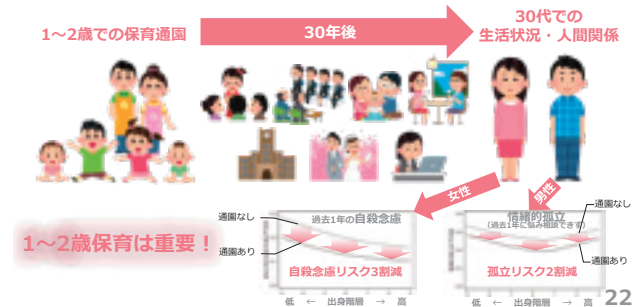
両立支援が充実した北欧やフランスではそのような親ペナルティがありません。先進国では少子化が進んでいますので、子どもをもっている人はマイノリティですが、少子化が進んでいる先進国において、マイノリティである子持ちの人々は、両立支援が乏しいと不幸になりやすい面があります。しかし、先進国においても、両立支援が充実していると子持ちでも不幸にならない、ということが平均的には言えるという研究結果です。

以上、幸福についてお話してきました。

残りのスライドは補足的な参考資料です。私自身いまだういった研究をしているかというと、保育の効果の研究を進めています。まだ確立された研究ではなくて、途中経過的ですが、いまのところ見えている傾向として1～2歳のときに保育園に通っていた人は30代、大人になったときにどういう傾向があるかということ、女性においては自殺念慮つまり自殺願望のリスクが低い傾向が見られ、男性においては孤立のリスクが低い傾向が見られます。おそらく1

～2歳での社会的な経験、ほかの子どもたちや保育士さん、つまり親以外の人との社会的な経験が、その後の成人期の社会的な状況にポジティブな影響を与えている可能性がある、そのことを示唆している研究です（図版4）。

（参考）柴田の研究【概要】



先ほどの両立支援に少し通じる場所ですが、単純に親が働きやすいだけでなく、子どもにとってもどうなのか。子どもの幸せにつながるのかどうかはすごく大事だと思います。もし、両立支援や保育が子どもの幸せにつながらないのであれば、いろいろ改善しなければいけないのですが、日本での保育の効果の研究結果を見ると、どうやら明らかにマイナスというわけではなさそうです。むしろプラスになる面があるらしいことがいまのところ見えてきています。ただ、まだ不完全な研究ですので、進行中の研究として少しご紹介をいたしました。

これでお話を終わりたいと思います。ご清聴ありがとうございました。

討論

柴田悠教授の講演を受けて、会場では活発な討論がなされた。以下は編集部によるその要約である。

討論者で、数学を専門としている角大輝教授からは、味わって食べるのが幸福とつながるという結果や自然の豊かな場所で過ごす幸福感が増すということは、植物園が好きな自分の実感からもそれなりに納得できることだが、それがきちんとした数値に基づいた研究として地道になされていることに感銘を受けた、というコメントがあった。

これに対して講演者は、味わって食べることと幸福のつながりは調査の段階なのでそれほど因果関係を明らかにするには至っていないが、自然の豊かな場所で過ごす幸福感が増すというのはきちんとした実験による結果なのでかなり因果関係を示す形にまでなっていると答え、生物や植物の多様性にふれることがもたらす幸福には身体と自然の関係が重要な要素となっているようだ、と述べた。

もうひとりの討論者で、インド独立運動史などを専門としているバッテ・バッラヴィ講師からは、ヨガにおいて食生活を大事にする「アハーラ」という考え方があることを紹介したうえで、動物の世界における幸福についての調査もなされていると聞いているが、という問いかけがあった。

これに対して講演者は、動物への倫理的配慮を強くもと

めるピーター・シンガーの思想にふれながら、AIが人間とのコミュニケーションにおいて果たす役割にも言及し、身体をもつ動物と身体をもたないAIとの関係で人間の幸福感がどう変化してゆくかはとても興味深いテーマだと語った。

その後、あらためて「寛容化」と幸福の関係、また講演者が現在研究中の1、2歳保育がその後にあたえる影響について、さらにはAIの積極的な活用法をめぐるやり取りが続いた。

会場のフロアからは、幸福はいかにも不安定なものだという印象を受けたが時間的にも社会的にも安定した幸福はどのようなものと考えられるか、という質問があった。これに対して講演者は、資本主義社会においては他人をどうしても自分の競争相手として見てしまう。だからこそ他人の幸福を視野に入れて中長期的な幸福を追求することが有効ではないかとあらためて答えた。

オンライン参加者からは、インターネット上に不寛容で攻撃的な言葉が出回っていることをどう考えるか、また、社会において所得格差、性別などをつうじて個人の幸福を阻む要因があることをどう受けとめるか、という問いかけがあった。これに対して講演者は、現実的にも比喩的にも顔の見えないインターネットでは攻撃性が増すいっぽう、インターネットではマイノリティ同士がつながりやすい面もあるので、その両面を見てゆく必要があること、また、個人の幸福を阻む要因については、例えば外国人に対する差別意識に関しては、職業訓練など就労支援の充実した国では差別意識が低い結果が出ていることを指摘して、政策をつうじて克服し得るものもあることを示唆した。



人間のことば・機械のコトバ

谷口 一美 (たにくち かずみ)
(人間・環境学研究科言語科学講座教授)

谷口 一美 | kazumi TANIGUCHI

近年、自然な会話を巧みに繰り出す人工知能 (AI) や、性能が飛躍的に向上しつつある機械翻訳が注目され、私たちの生活を変容させつつある。「言語」は私たち人間の知性の最大の特徴であるが、機械も私たちの言語にかなり近似した言語を産出することができるようになってきている。このように言語を操る機械の存在は、私たちにとって脅威となるのだろうか？本稿では、人間言語の特性として特に意味の理解・解釈の側面に焦点を当て、機械の言語にとっての課題や限界は何か、著者の専門である認知言語学の知見をまじえて述べていきたい。

1. 類像性：記号と現実との対応

2023年4月1日、「ンチップンリプ」なる商品が、Twitter (現在の X) に登場した。これはエイプリルフールにプッチンプリン公式アカウントが発表した架空の商品であり、現実のプッチンプリンのプリン本体とカラメルを逆転させたものである。

ここで興味深いのは、「ンチップ」「ンリプ」という文字列が「プッチン」「プリン」の逆順であることにいったん気付けば、それがたとえ現実には存在しなくても、どのようなものであるかを私たちはそれなりに想像し、推測することができるということである。記号列の配置は世界のあり方 (あるいは私たちの世界の認識のあり方) を反映しており、「ンチップンリプ」のような文字の逆転は、現実のプッチンプリンに生じている何らかの逆転に相応したものではないかと、私たちは推測するのである。

こうした記号列と指示対象との対応づけは「類像性」(iconicity) と呼ばれており、記号の配置や順序自体が意味的に動機づけられたものであるとみなされている。例えば「金銀銅」「松竹梅」は階級の上下と対応した順になっており、カエサルの「来た、見た、勝った (Veni, vidi, vici)」はそれらの行為の生じた時間的順序に対応している¹。また、「阪神 vs. 広島」と「広島 vs. 阪神」も伝える情報は微妙に異なり (「阪神 vs. 広島」は、阪神甲子園球場がホームの試合であるか、阪神ファンによる描写と解釈されやすい)、重要性や関心の程度と順序が相関する傾向もある²。

では、生成 AI は「ンチップンリプ」を理解できるだろうか？ ChatGPT に「ンチップンリプ」および (「プッチンプリン」全体を逆順にした) 「ンリプンチップ」が何であるかを尋ねても回答は得られない。「ある食べ物の名前を逆から読んだものです」というヒントを出すと、

ChatGPT は「ポテトチップスを逆から読んだものです」と回答した (ちなみに、私たちは逆順から正順へと変換する際に、「チッ」のように逆順では「チ」に後続していた促音 (っ) を「プ」の方に付け替え、「プッ」と読み直せるということもわかる。機械は「チッ」「プッ」という文字列自体は扱えても、促音だけを分離させることが難しいため、「チップ」というチャンクが残り「ポテトチップス」という回答が生じたのかも知れない。) さらに、「ンリプンチップはプッチンプリンを逆から読んだものです。どのような食べ物だと思いますか」と ChatGPT に尋ねても、「誤解があります。ンリプンチップはポテトチップスを逆から読んだものです。」という回答となった。

生成 AI が「ンチップンリプ」を理解しないのは、それが AI の学習データに存在しないことが最大の理由であるが、文字列を逆から読むといったメタ言語的な操作についても AI には限界があることもわかる。仮に逆から読むことに成功したとしても、類像性によってそれを世界と対応づけて意味を推測することはできるだろうか？このようにして機械の挙動と比べると、私たち人間が言語を使用する際にどのような認知的機能を用いているのかが浮かび上がってくるのである。

2. 自然言語処理

ChatGPT や機械翻訳 (DeepL など) の生み出す言語表現は現在、驚くほど自然なものになっている。機械翻訳の歴史は第二次世界大戦後に始まり、当初は対象言語間での変換規則を機械に学習させるものであった。例えば英語の主語・動詞・目的語の語順を、日本語では主語・目的語・動詞の語順に入れ替える、といったような規則である。しかし、シンプルな規則だけで翻訳した言語表現は、その文脈や意味の整合性を確認しないため、大部分は不自然で理解不能なものにとどまっていた。この状況を改善したのが、1990年代に始まった統計翻訳であり、大量の対訳データを機械に学習させることでより自然な翻訳表現を産出できるようになった。さらに機械翻訳の精度を飛躍的に向上させたのが、2014年頃から始まった「ニューラル翻訳」である。これは、人間の神経 (ニューロン) の相互作用になぞらえて情報の伝達や方向性をモデル化した「ニューラル・ネットワーク」に基づき、膨大なデータを機械に深層学習させるものである。生成 AI もニューラル・ネットワークを利用し、事前学習した膨大な言語データとパラメータをもつ「大規模言語モデル」(Large Language Model :

LLM)によってパターンを学習している。これによって、機械は以前より文脈をふまえた適切な表現を産出することができるようになったのである。なお、こうした機械の言語モデルが開発・発展してきたのは、自然言語処理(Natural Language Processing: NLP)と呼ばれる情報工学の分野である。

言語哲学者であるジョン・サールは、「中国語の部屋」として知られる思考実験を行った。部屋の中にいる人は中国語をまったく理解しないが、部屋にはマニュアルが置かれており、そこには特定の中国語の文字列に対し何を返したらよいかが列挙されている。部屋の外から差し込まれた中国語で書かれたメッセージを中の人が受け取り、マニュアルにしたがってその返答を書き、外の人に渡す。このとき、外の人の中の人「中国語を理解している」と思うだろうが、実際にはマニュアルに書かれたことを実行しているだけであり、理解はしていない。機械翻訳も同様で、機械はインプットに対して自然なアウトプットを返すものの、それらの言語を「理解」はしていないのではないか、という問題がある。もし生成AIが言語の意味を理解しているとしても、膨大なデータから統計的に学習した結果としての理解であり、(先の「ンチップンリップ」で示したように)私たち人間の言語での理解の方法とは異なるものである。

3. 機械翻訳

外国語を難なく即時に理解できるようになりたい—これは長年にわたる人間の普遍的な願望であり、ドラえものの「ほんやくコンニャク」は筆者の子供時代には遠い夢の道具だった。しかし今、「ほんやくコンニャク」はほぼ現実のものになったといえるほど、機械翻訳の性能は著しく向上している。その一方で、機械の翻訳が常に完璧というわけではない。

現在のところ機械翻訳にはどのような限界があるだろうか。具体的な例を見てみよう。以下は、令和5年2月26日実施の本学入学試験の英語科目で出題された、和文英訳の問題である。

人間、損得勘定で動くところくなことがない。あとで見返りがあるだろうと便宜をはかっても、恩恵を受けた方はコロッと忘れていくものだ。その一方で、善意で助けた相手がずっと感謝していて、こちらが本当に困ったときに恩に報いてくれることもある。「情けは人のためならず」というが、まさに人の世の真理を突いた言葉である。

これをDeepLで翻訳すると、以下のような英文となった(なお翻訳は入学試験実施当日に行ったものである)。

People are not good when they act on the basis of profit and loss. Even if you offer a favor in the hope that you will get something in return later, the

recipient of the favor will forget all about it. On the other hand, there are times when the person you have helped out of the goodness of your heart is grateful and will return the favor when you are truly in need. It is said that “mercy is good for no one.” which is a true statement of the human world.

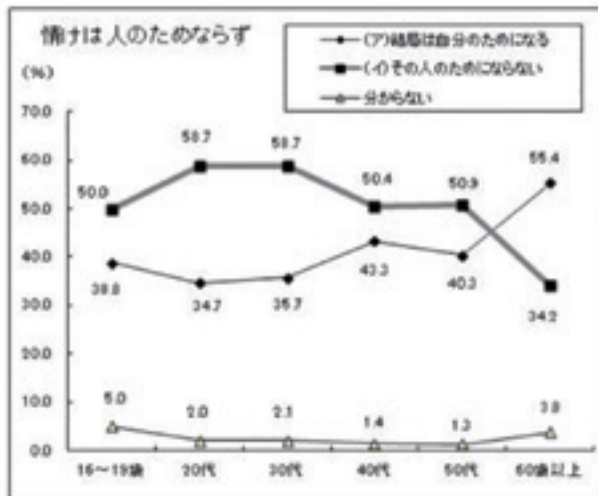
一般的にみて日本語の文意を自然な英語で表現しているが、下線部の2箇所翻訳に問題が生じている。1つは冒頭の「人間、損得勘定で動くところくなことがない」の翻訳、“People are not good when they act on the basis of profit and loss”であるが、そもそも元の日本語の表現自体が特異である。文頭の「人間」は、「人間は」「人間が」のように助詞を伴っているわけではないため、「人間」が後続部分に対してどのような文法関係を担うのかは明らかではない。DeepLの翻訳では「ろくなことがない」という述部に対する主語とされ、“People are not good”となっているが、果たして元の文意が訳出されているだろうか？直観的に、文頭の「人間」は人間に関する一般論的な命題を導いていると思われるが、「人間」を他の名詞に置き換えて類似した表現にしてみても、「?日本人、働きすぎはよくない」「?猫、気が向いたら飼い主に甘える」のように不自然さがある。このように、「人間」は文頭に置かれたときに特有の振る舞いをするのがわかるが、こうした「人間」の用法は、辞書での「人間」という語の定義として掲載されているわけではない。私たちの実際の言語知識には、語の辞書的な意味とSOVのような抽象的な文法規則だけでなく、「人間、……」構文と呼べるような具体的な構文の知識も含まれていることがわかる。語彙と文法規則の性質をどちらも併せ持つ「人間、……」構文のパターンとその意味的な機能は、私たちが実際の言語使用からボトムアップで獲得したものであるが、こうした種類の言語知識に機械翻訳はどれだけ対応できるだろうか？

また、先の入試問題のDeepLによる翻訳でもう1つの問題が、「情けは人のためならず」の訳出である。このことわざは「人に情けをかけるのは自分のためにもなる」という肯定的解釈と「情けをかけると人のためにならない」という否定的解釈が見られ、曖昧性をもつ。今回の入試問題では、このことわざの直後の文脈から前者の肯定的解釈であることが明らかであるが、DeepLでは“Mercy is good for no one”(情けは誰のためにもならない)と、後者の否定的解釈で訳出されているようである。

このように2通りの解釈をもつ表現の意味を理解する場合、私たちは文脈を広く参照し、どちらの解釈が適切であるかを判断することができるが、機械翻訳ではそのような文脈参照による曖昧性の解消に限界があることがわかる。同様に、統語的曖昧性と呼ばれる現象の解釈も機械翻訳は苦手である。例えば“The police hit the man with a stick.”という文の構造は2通り考えられ、“with a stick”がhitを修飾すると解釈したら「警官が男性を杖でぶった」、

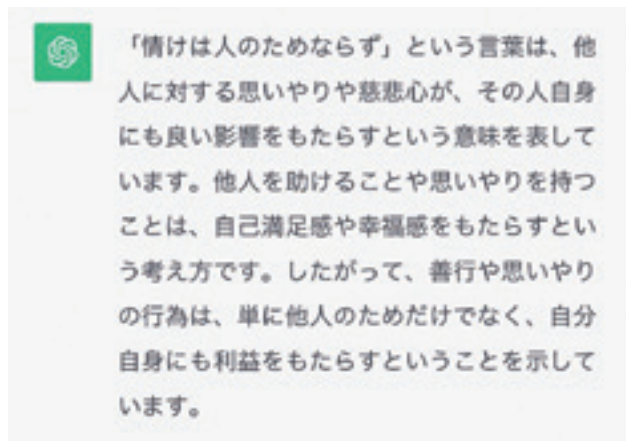
the man を修飾すると解釈したら「警官が杖を持った男性をぶった」という意味になる。どちらがこの文の意図する意味かを判断するには文脈の参照が不可欠であるが、機械翻訳にとってはそうした判断が難しいのである。

なお、「情けは人のためならず」は肯定的解釈が本来の意味であったとされるが、図1の調査が示すように、現在では高年齢層を除き、(イ)の否定的解釈がむしろ優勢である。



【図1】文化庁（2012年）

https://www.bunka.go.jp/pr/publish/bunkachou_geppou/2012_03/series_08/series_08.html



【図2】

「情けは人のためならず」の解釈を ChatGPT に尋ねたところ、図2のように、おおむね肯定的解釈に合致する回答が得られた。しかし、図1の調査が示すように、現状では否定的解釈が優勢となっており、このことわざ自体の意味が変化しつつある。このような変化に機械の言語がどれだけ対応できるかという点も課題であり、機械に学習させるデータの更新速度に依存すると考えられる。（なお、ChatGPT が事前学習しているのは Web データや書籍、学術論文などであり、ChatGPT 自身の回答によると 2023 年 12 月時点で 2022 年 1 月までのデータを学習しているとのことであり、情報としては約 2 年のギャップがある。）

4. ことわざの解釈と写像

複数の解釈ができることわざや慣用句は「情けは人のためならず」だけではない。実際に、ことわざの多くは文字通りの意味ではなく、現実の様々な状況に適用可能な内容を伝達することができる。例えば「猿も木から落ちる」「弘法も筆の誤り」は、文字通りにみれば猿や弘法大師についての描写であるが、私たちがこれらをことわざとして使用するとき、「得意とすることでも失敗することがある」という、抽象性が一段階高い意味を抽出し、人間全般に対して適用する。このようにことわざが喚起する抽象性の高い意味を、私たちはさまざまな状況に対応づけて利用しているのである。

ここで「転石苔むさず (A rolling stone gathers no moss)」ということわざを取り上げてみよう。このことわざは、文字通りに見れば「石についての描写」であるが、私たちはその描写を比喩的に、人生の特定の側面や状況に対応づけて理解している。「転がる石」に対応するのは「転職を繰り返す」「パートナーを次々変える」といったように、安定しない・流動的な状況に対して広く適用することができる。では、石につく「苔」は何に対応し、「苔をつけない」ことはどのように解釈されるだろうか。「転職を繰り返す」状況に対して適用する場合、このことわざは「転職を繰り返すと、経験が蓄積されずスキルが身につかない」という否定的解釈と、「転職することで、古い慣習に縛られず、常に清新である」という肯定的解釈をもつ。（元の英語のことわざはイギリス発祥であり、本来は否定的解釈の方で使われていたが、後にアメリカでこのことわざが使用されるにつれ肯定的解釈が生じたと言われている。）いずれの解釈でも、「苔」は「長い年月をかけて形成されるもの」であることは共通しているが、苔を纏った石が肯定的解釈では歴史や伝統の象徴であり望ましいものと見られる一方、否定的解釈では古さの象徴であり忌避すべきものと見られていることがわかる。

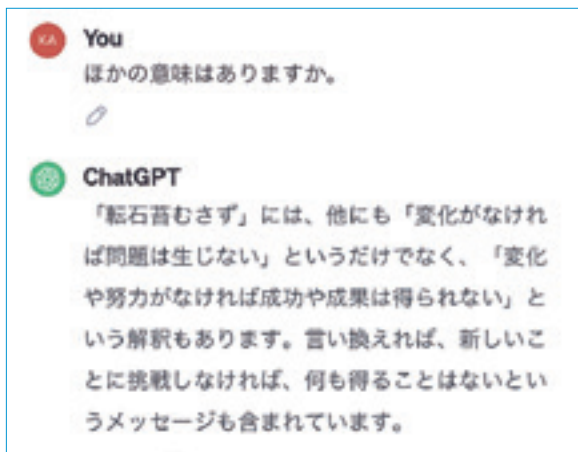
このように、「転石苔むさず」のことわざの解釈の際に生じている写像（対応づけ）は複合的である。「転がる石」が想起させる流動性に加え、「苔」に関する背景の知識や評価的な価値づけが、写像の選択を決定づける。そのような価値づけは社会・文化によっても、また個人によっても異なるものであり、同じ個人であっても時と状況によって変動し得る。「転石苔むさず」は複数の解釈を生むという点で曖昧 (ambiguous) であると言えるが、その曖昧性を私たちは柔軟に利用しているのである。

では「転石苔むさず」の意味を ChatGPT はどのように回答するだろうか。はじめにこのことわざだけを提示し、その意味を尋ねたところ、「物事が変わらなければ、問題が生じない」という回答 (図3) や、「変化や努力がなければ成功や成果は得られない」といった回答 (図4) が得られた。後者はやや肯定的解釈に近い意味合いも感じられ

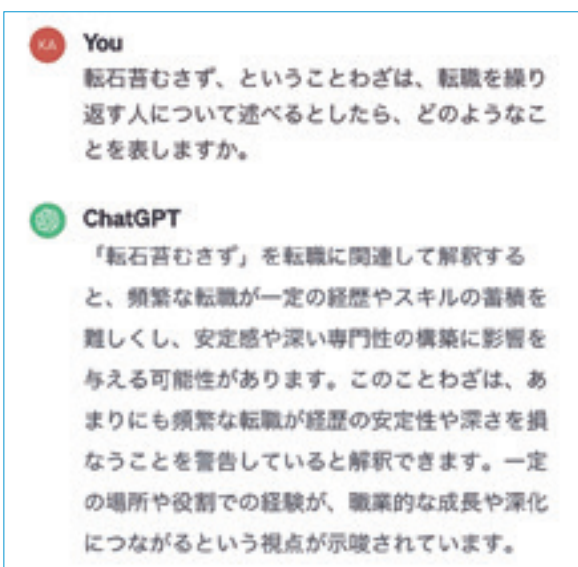
るものの、実際にこのことわざが言わんとすることからは外れている。そこで「転職を繰り返す人について述べる場合、このことわざはどのようなことを表すか」のように対象を限定すると、はじめに否定的解釈に該当する回答（図5）が得られた。次に肯定的解釈についても尋ねると、おおむね適切な回答（図6）が得られた。



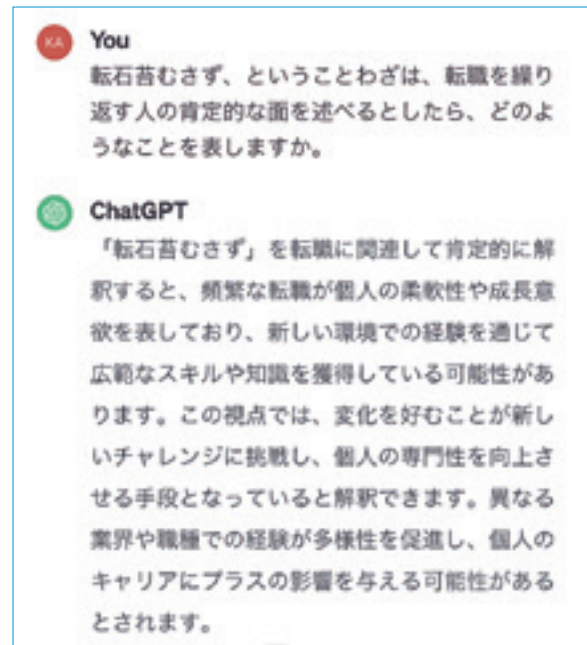
【図3】



【図4】



【図5】



【図6】

このようにプロンプト（AIへの指示）に工夫を施せば「転石苔むさず」の解釈を引き出すことはできるが、このことわざが否定的解釈と肯定的解釈の2通りの解釈をもつことを使用者側があらかじめ知っていなければ、どちらか一方の解釈が提示されて終了となってしまいうだろう。また、このことわざを現実のどのような状況に対して使うか一すなわち、「転がる石」を何に対応づけるかも使用者側で特定する必要がある点にも注目したい。そうした状況の特定のない図3・図4の場合、「転がる」という表現から「変化」がキーワードとして選び出されてはいるようであるが、それが何の変化を指すのかは漠然としている。また、「苔」は図4の肯定的解釈では「成功・成果」に対応づけられているが、「苔」から私たちが想起する「長い年月をかけて身につけるもの」という意味合いからすると、やや違和感を覚えるものになっている。私たちは、「転石」が「転職を繰り返す」ことを指すのが典型的とはいえ、それに限らず「転居を繰り返す」「パートナーを次々変える」など、類似した他の状況に対しても柔軟に適用し、それぞれに応じて「苔」の解釈も得ることができる。このように、ことわざが何を表すかの理解のプロセスは、私たち人間とAIとは異なることがわかる³⁾。

5. おわりに

以上、自然な言語を操る生成AIや機械翻訳であっても、特に言語の意味理解においては人間とは異なる機序が見られることを本稿では述べてきた。

これらのテクノロジーは、膨大なデータがあれば言語の深層学習が可能であることを示している。こどもが実際に言語を獲得するにも豊富なインプットを受け取る必要があるが、機械の深層学習ほどのデータ量を必要としているわけではない。人間とAIの相違は、人間の言語が学習デー

タのみに基づくのでないことを示唆している。本稿で見たような意味理解を支える認知的操作（写像や類像性による推論など）や広範な背景知識があつてこそ、人間は現在のように言語を使用できるのであると筆者は考える。これらの認知的操作に相当するようなメカニズムをAIに実装することができるかどうか、究極的な課題だろう。

「言語学者は生成AIに否定的である」と言われるが、むしろ生成AIは人間言語の本質に迫る機会を与えてくれており、理論言語学の発展を促すものである。私たちは言語によって、文字通りの情報交換だけを行っているわけではない。表現がダイレクトには意味していないものを推測し理解するという、非常に繊細な営みを日々行っている。「機械まかせ」ではなく、自分の「ことば」でなくては伝わらないことや理解できないことは、まだまだ残されているのだ。

注

1. Jakobson, Roman (1965) Quest for the essence of language. *Diogenes* 13 (51), 21-37.
2. そのほか、語の配列や順序の類像性については Haiman, John (1983) Iconic and economic motivation. *Language* 59 (4), 781-819. を参照のこと。
3. ことわざにおける写像については、鈴木宏昭 (2020) 『類似と思考 改訂版』（ちくま学芸文庫、筑摩書房）を参照のこと。

*本原稿は、令和5年4月7日（金）に、京都大学人間・環境学研究科において開催された人間・環境学フォーラム、新入生歓迎講演会にもとづいて、講演者の谷口一美先生にあらためて執筆いただいたものです。

学術架橋力の養成に向けて ——人間・環境学研究科再編のめざすもの



齋木潤



勝又直也



森口由香



立木秀樹



守田貴弘



小松直樹

執行部から：齋木潤（副研究科長）

講座主任から：立木秀樹・勝又直也・守田貴弘・
森口由香・小松直樹

編集委員から：木下千花・田口かおり

司会：小木曾哲・細見和之

細見和之：本日はお集まりいただき、ありがとうございます。人間・環境学研究科が今年度から再編され、3つの専攻、14講座だったのが1専攻、10講座になりました。その再編の意図、目的、あるいは具体的にどういった再編になっているか、そのあたりを再編の中心になられた齋木先生にお話しただいて、それから出席いただいている各講座の先生方に「越境する学知」を一つのキーワードにして、自分自身で研究されてきたこと、あるいは指導されている学生でどんなことが考えられるか、今後の研究を含めてお話ししていただければと思います。10講座にもかかわらず、今回、奇数講座の先生方に来ていただいているのは、学部の再編が来年度なされますので、その時には偶数講座の先生方にお声がけして、お



細見 和之

話ししていただこうかと思っているからです。

それではまず、齋木先生のほうからこの再編のあり方、意図、目的などお話ししていただけますでしょうか。

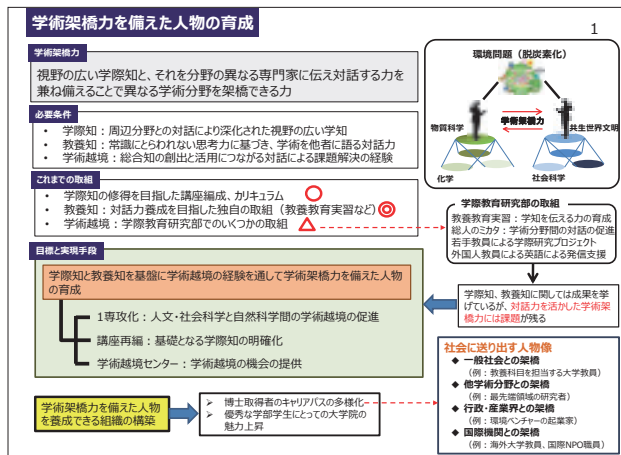
◆「学術架橋力」の養成のための2つの柱

齋木潤：齋木でございます。この再編をいろいろ担当してきたものとして、今日は10分ということで概要を手短にお話しします。再編の作業をしてきた過程での基本的なコンセプトと、それを踏まえてどういう枠組みを作ってきたかをお話ししたいと思います。結局、われわれ執行部で作ってきたことは枠組みを作る作業で、その中で実際にどういう研究活動を展開するかは、これからそれぞれの教員の方々がいろいろと工夫して頑張ってくださいということですね。後半はそういう話になるのかと勝手にちょっと期待しています。

いまお見せしているスライドは設置審で文科省と交渉したときに使ったスライドから取ってきたものです。一番上の2つのチェックマークが具体的にどういった組織再編をしたかを示しています。



齋木 潤



3専攻14講座を1専攻10講座に1本化する。それが一つと、もう一つは「学術越境センター」を作る。今回の再編はこの2本立てをやっているというのが私自身の理解です。その下の部分がおそらく再編のコンセプトを一番コンパクトに表現している図だろうと思います。

今回再編して学術越境センターを作ったり、パンフレットに「軽やかに越境します」というキャッチフレーズを作ったりで、「学術越境」がクローズアップされていますが、学術越境はあくまで目的を達成する一つの手段であって、それ自体は目的ではないとわれわれは考えてきました。大きな目的としては学術架橋力があって、これはあんまりキャッチーな言葉じゃないので最近使っていないのですが、この養成を一つの目的にしています。学術架橋力は、ここにちょっと書いてあるように、異なる学術分野、あるいは学術分野と産官学、あるいは日本の学術と海外の学術、そういう異質なものを橋渡しする力です。

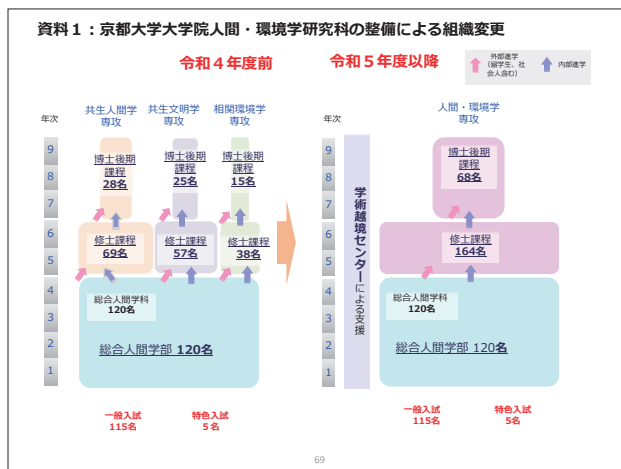
人間・環境学研究科は設立以来25年、30年近く学際を掲げてきたけれど、実際のところ学術分野を融合する学際を実現するのは非常に難しい。それがわれわれの議論の出発点でした。やはり一つの学術分野をきちんと修めた上で、その専門しかできない人物ではなくて、ほかの分野と話し合って相互理解ができる、そういう力をつけることが一番重要だろうとわれわれは考えて、学術架橋力を一つの目標に決めました。

その目標に向けて3つが必要だと考えました。一つは「教養知」。教養知は、基本的には専門知を共有しない他者に対して専門的な知識を伝えることができる、そういう知です。もう一つが「学際知」。学際知は、平たく言えば専門知ですけど、狭い専門知ではなくてもう少し幅の広い意味であって「学際知」という言葉をここでは使っています。それに加えて、実際に学術越境の経験があって初めて学術架橋力が養成できるとわれわれは考えています。

それを組織再編にどう結び付けていくと考えたかをこのスライドで少し説明させていただきます。学術架橋力を一つのゴールにしたときに、それに必要な条件が学際知、教

養知、学術越境の3つ。これに対して今までの取り組みがどうであったかを評価してみると、学際知については、非常に狭い専門だけではなく専門をまたぐような講座編成とカリキュラムを作ってきたことで丸。教養知はもちろん、教養を旗頭にずっとやってきた部局ですし、最近では教養教育実習、あるいは「研究を他者に語る」など、いろんな取り組みをしている。3つ目の学術越境はどうだろうと考えたとき、学際教育研究部でいろんな取り組みがあったのですが、なかなか組織だった取り組みになっていない。

この3つがうまく機能するために何が必要かを考えて、「1専攻化する」、「講座を再編する」、「学術越境センターを作る」という3つの柱を立てました。これによって学術架橋力を備えた人物を養成することで、結果として博士取得者のキャリアパスを多様化し、学部生にとってうちの大学院がより魅力的なものになることを目指そうというのが今回の再編の骨子です。



実際どう再編されたかを簡単に説明しますと、これは3専攻を1専攻化したということで、絵で描くとこうなります。一つ大事なことは、専攻は例えば文科省的に非常に重要な単位になっていて、専攻の定員を動かすとすといちいち文科省にお伺いを立てなきゃいけない。10講座を1専

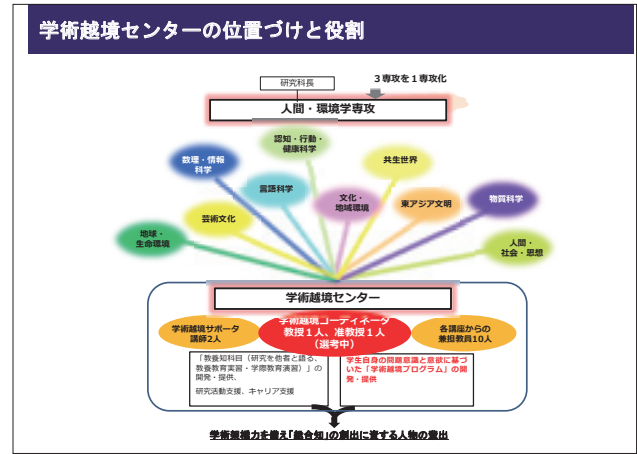


攻化すると、講座の中で教員の定員を少し変えようというときに、研究科内の措置としてフリーにできる。だから、組織を将来、柔軟に動かすことができる体制になったことが一番重要なことかと私自身は思っています。講座としてはこの10講座になりました。大学のカリキュラムを見ていただくと、先ほどの3つの必要条件をきちんと反映したのになっていて、「教養知科目」、「学際知科目」、「学術越境科目」という3つの柱を立てて、カリキュラム上でも担保していく、そういう構造を作っています。



それから2つ目の柱である「学術越境センター」です。これは昨年度の概算要求のときに使った図を少し拡大したのですが、人間・環境学専攻と学術越境センターの関係をコンセプトとして表す構図です。要は学術越境として、例えば講座をまたぐ連携とか共同研究とかを促進するときに、10講座を作るだけだとその講座の中で閉じてしまう危険性があるので、それを避けるために講座間のいろいろな連携を促進する。それが学術越境センターの重要なミッションの一つになっています。

センターとしては大きく二つの機能があって、一つはこの左側、すでにやっている教養教育実習、学際研究演習、あるいはこれから作る「研究を他者に語る」などを開発したり提供したりするという部分。もう一つはこの学術越境



プログラム。これは希望する意欲のある学生にいろいろなサポートをする。そういうプログラムを作って研究科の中、あるいは研究科と外の世界とのいろいろな連携を促進することを目指しています。

学術越境センターはいま整備をしているところですが、これは昨年度教授会でも使った資料の一部です。組織としては先ほどのサポート部門が左側、全体の教養教育実習とかをやる部分です。それから学術越境プログラムを動かしていく部門があって、いまのところ人環から各講座1人ずつの兼任教員、それから若手重点戦略定員2名、それから何名かの専任教員に入っていただく体制になっています。まだ専任教員が決まっていないので、本格的な始動はおそらく来年度以降になると思います。

時間が過ぎましたので、とりあえずここまでにさせていただきます。要は、組織として設置審あるいは概算要求でやってきたことは、あくまでもそのコンセプトを実現するための枠組みを作る作業で、これからそれがどうやって実体化されていくかです。これからの先生方の教育研究に期待しています。

細見：齋木先生、ありがとうございます。越境する学知がよく口にされていますが、齋木先生からすると、越境する学知は目的ではなくて、学術架橋力を育成していく、そういうものを持った人材を育てていくことを最終目標に置いているということでした。そのあたりも含めて、これからそれぞれ議論していただければと思います。

私自身はドイツ思想が研究対象ですが、いろいろなことがあって、いま一番時間を使っているのはヘブライ語とポーランド語の勉強です。ドイツ思想を研究してなぜヘブライ語、ポーランド語を勉強しないといけないのか、そこにもやはり越境があったわけですが、それぞれの分野でも同じようなことがあるのではないかと思います。それでは第1講座の立木先生からお話いただけますか。



◆総人・人環の伝統としての越境性

立木秀樹：私は自分の専門をあまり意識しないで、自分が知りたいと思ったことがあるとそれについて考える、そんな感じでずっと研究してきました。自分の中では本当に越境ばかりやっている気持ちでいるのですが、はたから見ると数学と情報というすごく狭い枠組みの中でばかり研究しているとしか見えないでしょうし、ここの部局が目指している越境はもうちょっと違う越境なんだろうと思っています。



立木 秀樹

ここの部局の中で分野を越えた交流では、私はシェルピンスキー四面体に関していろんな活動をやっていて、酒井先生がフラクタル日よけを作られた。その関係は一つの大きな成功例ではないかなと思います。正方形の影を作る、シェルピンスキー四面体というフラクタル立体があって、これは面白いとあっていろいろなオブジェを作って、教育だとかアウトリーチとかの活動をしていたのですが、それを見て酒井先生が、このフラクタルで日よけを作るというアイデアを思いつかれて、製品化までしてしまった。

私は日よけがとてもポピュラーになっていくのを見ている中で、逆に、純粋に数学的に定義されたシェルピンスキー四面体と、それに関連したフラクタルだったら、どういう方向から光が当たったときに面積のある正の影を持つのか、そういうことが気になって研究を始めて、それを特定する結果を出すことができました。そして、その結果を説明するためのフラクタルの展示台を酒井先生に作ってもらって、アウトリーチに活用しています。こういうことはまさに、多様な研究をしている研究者が一緒にいる人環という組織だから成し得た結果だと思っています。ただ、注意してほしいのは、酒井先生と私は共同で研究を行ったわけではないのです。ここまで分野が違うと研究の目的も手法もそれに必要な知識も全て違います。そこをまたいでまで手を出せるほど研究は甘くはないと思っています。

齋木先生がおっしゃっていたような、ここが目指している越境はおそらくまた違って、複数の分野をまたいで学際的な共同研究を行うことができるような、そういう越境。まさにそういう越境ができる学術架橋力というものに身に付けさせる。そういうことだと理解しています。それは複数の分野の専門家が協調して行えばできるという簡単なものでないのは明らかで、学術的な研究をするには幅広い知識と興味、それにそれを共同研究に繋げるための、本当の学術架橋力ですね。それを身に付ける必要があるだろうと私は思っています。

私の研究そのものは、数学とか情報という分野でかなり固定されていますが、研究室ではかなり自由に学生に研究

させていて、卒業生の中には、機械学習とかコンピュータビジョンに関する手法を身に付けた上でさまざまな分野に越境して応用するような共同研究を数多く手がけている人がいます。そういう人たちは、学生の頃から幅広い分野に興味を持っていろんな先生の研究室に出入りしていました。自由な雰囲気の中で幅広い分野の学問に接して、自分の専門だけではなく興味を持ったことを深く勉強して、他の分野の先生や学生と交流を深めてきた。そういうことが彼らの今につながっているのだと思います。

総人、人環はそのような学生がもともと志向して来る場所であるし、今までも本人にやる気があればそういう能力をどんどん高める環境があったわけですが、今回の改組でその枠組みがしっかりできれば、さらに高められていくんじゃないかと思っています。

細見：どうもありがとうございました。酒井先生のフラクタル日よけの話がありましたが、私の場合定年退職したら本が図書館に入っているくらいですけど、酒井先生の場合は定年退職された後、フラクタル日よけがそのままありますね。続きましてそれでは第3講座の勝又先生、お願いできますか。

◆ピユート学衰退の原因

勝又直也：私は個人的なエピソードを一つお話しすることにさせていただきます。個人的な話、しかも学問的な研究の話なので細かいことになりますが、それを通して学術越境を考えるヒントになればいいという意味でお話しさせていただきます。

私自身、東京大学文学部を卒業した後、ヘブライ語をとにかくやりたかった。それで、1994年の初めから2003年の終わりまで約10年間、本場のイスラエル、エルサレムのヘブライ大学に留学し



勝又 直也

ました。現地で、古代から現代までさまざまな文学を学んで、その中で中世の文学に興味を持って、特にシナゴークでユダヤ人がお祈りするときに歌った典礼詩「ピユート」というのに魅力を感じました。

簡単に理由を言うと、一つはやはりこのピユートはまだまだ発展途上の分野でやるべきことが山ほどあった。ほとんどのテキストが写本に残っているままですので、それを自分で解読して、校訂版を作って発表していくことができる。そういう研究の必要性、将来性があるって、研究者を必要としている分野だというのが一つ。もう一つは、中世ではヘブライ語は話されていませんでしたから、ピユートの言語は非常に技巧的、人工的でとても難しいのです。なの



で、現代のイスラエル人にも分かりません。中世のヘブライ語をやれば、留学生であっても現代のイスラエルの学生に比べて不利にならないんじゃないか、ということもあってこれを選びました。

それで直感的にピユートをやろうと思ったのですが、当時のヘブライ大学を中心とするピユート研究では、二つの大きな学派があった。ここがポイントですが、一つの学派は多数派でしたが、その学派のアプローチは、ピユートというものをそれ自体として研究する。つまり、ほかの要因に依存することなく、ピユートがそれ自体で存在意義を持っていて、生きもののようにそれだけで発展していくと考えて、そういう閉ざされた、自己完結したテキストとして研究すべきだというのが第一の研究学派でした。

実際何をやるのかというと、やはり結局はピユートの形態です。1連に何行あるかとか長さはどうかとか韻律のパターンはどうかとか、そういうふうにして構造を分析して、時代や地域ごとの特徴を明らかにする。そういうことを明らかにすれば、逆に新しいテキストが発見されたときにも形態的な特徴を元にして、時代や地域を特定できる。一見とても科学的で、自然科学のようにピユートのテキストを分析できる。だからほかの要因を見る必要がないとする学派、これが多数派でした。

もう一つのピユートの学派はそれに比べるとすごくプリミティブですが、そういう一つの方法論で行くのじゃなくて、とにかくあらゆるヒントを使ってより開かれた存在としてピユートを捉える。つまり、実際にユダヤ人がどういう時代に生きていたのか、歴史的背景を見たり、当時のユダヤ人のものの考え方とか信じ方、信仰とかも参考にしてゆく。あるいは周辺文化です。キリスト教世界はどうだったのか。イスラム世界はどうだったのか。そこでの視点と比較することを試みる。プリミティブだけどそういう形であらゆる情報を使ってピユートを理解しようとする。

内的側面と外的側面の両方があるとすればもちろん両方見るべきで、どちらの学派もまったくほかの側面を見ていないと言ったら言い過ぎですが、明らかにどちらをより重視するかをめぐって2つの学派に分かれていた。先ほど言ったように第1の学派が圧倒的で、多数の研究者はそちらに所属して、私は第2の学派に非常に共感を持って、そちらの学派に所属して研究していました。これが30年前の話です。

その後の途中の変化、紆余曲折は全部端折ります。30年後の今どうなったか。結局、いまのピユート学の中で第1の学派が圧倒的に力を持っているのは変わりません。でも、30年間のあいだの大きな変化として私が感じているのは、同じユダヤ学の中でもほかの研究分野、関連分野、歴史とか思想とか言語とか、あるいはユダヤ以外のキリスト教、イスラム、そのほかの関係分野から、いまはもうピユート研究自体に関心を持ってもらえなくなったということです。

彼らからすると、あいつら自分たちの中に閉じこもって、ほかの研究分野はいらぬというスタンスで詩の形態を研究していると見える。じゃあ、勝手にやってよということで、ピユート学自体が関心を持たれなくなった。

もう一つの変化はそれに伴って、こういう学問をやろうという若い優秀な研究者も来なくなりました。なので、ピユート学自体の優秀な研究者の数も減ってしまって、要するに、非常に悲しいことですが、ピユートという研究分野自体が衰退してしまっている。私自身はピユートは、言語、思想、歴史、宗教、いろいろなことを学べるすごく面白いテキストだと思うのだけど、これまでの研究者のアプローチのせいでそういった魅力が伝わらなくなってしまったという側面があるんじゃないか。

以上、私の実体験なのですが、何が言いたいかというと、学術越境は、あたかもまずは自分の専門をしっかりやった後、プラスアルファでほかの分野を見ましようよという、何か余裕があることのように見えますが、そうではないということです。むしろ日頃からそういうことをやっておかないと、自分の専門分野自体が衰退する。自分の専門分野をしっかりやるためにも日頃から学術越境は当然やるべきだというヒントとしてこの話をしました。

細見：ありがとうございます。勝又先生の画面の後ろは写本ですね。

勝又：ええ、これはヘブライ語のゲニザ写本です。これを読むためにあらゆる関連分野を総動員するという、それがポイントです。

細見：続きまして、第5講座の守田先生になりますね。お願いします。

◆言語学と認知言語学の境界で

守田貴弘：私の研究の柱は言語学で、一応フランス語が専門ということではあるのですが、フランス語学会に行けばあいつはフランス語学の人間じゃないと言われ、認知言語学会に行けばあいつはフランス語をやっているから認知言語学者じゃないと思われる、立場がはっきりしない、もう本当にフラフラした状態でずっといままでやってきています。



守田 貴弘

もともとは日本語教育が専門だった人間が、言語学のほうに傾いていってフランス語をやるようになって、いまとなってはフランス語すらどうでもいいみたいな感じです。研究対象としてはフランス語を選んでいながら日本語もや



りますし、英語も触るし、触れる言語があれば何でもやるみたいな感じで、個別言語にこだわって何かやる気がない。越境をキーワードにしたときに一番近いのはやっぱり哲学と心理学に重なることをやっているという自覚はあります。

心理学の人から見れば、実験の手法として全然不十分な、厳密さに欠けることもやっているのですが、言語を研究する上では非常に面白いことがあって、それが哲学的な面白い問題にも結びついていく。それで、いま現在一番夢中になっているのは、こういう言い方をすると馬鹿みたいですけど「行く」とか「来る」とかです。「来る」というときには話し手のところに向かった移動が起こって、「行く」というときには話し手から離れるか、話し手のところとは無関係な移動をするのが普通ですが、必ずしもそうじゃないことが結構ある。話し手のほうに向かっているんじゃないけれど「来る」という動詞を使うのがあって、それがどうやら言語によって違うというのが最近見えてきているのです。

そこから何につながっていくかということ、話し手にとって「ここ」とはどこなのかということです。話し手の存在している場所が「ここ」と言えば簡単でいい。心理学にも関係しているビューラーという人であれば「オリゴ」という概念を使って、「話し手、いま、ここ」みたいな感じが全ての基準になって世界を把握するという考え方をするのが一般的ではあるのですが、結局「ここ」ってどこかというのがはっきりしない。実は、いろんな要因で「ここ」が広がったり縮まったり、別の場所に移動したりということが起こっていて、それがしかも話す言語によって違う、そんな可能性が見えてきている。そうなると、言語学で受け入れられるので、そこを発表の場としているわけですが、「何をやっているんだ」と問われてカテゴライズされる必要もないし、自分からカテゴライズしようとしもない、そんな感じの人間に、学部の頃から数えて25年ぐらいかけてなってしまった。越境というのが最初の立木先生のお話からずっと続いていて、別分野の人と共同研究となると、本当に難しいのだろうかと、非常にカロリーの高いことなのだろうというのは重々承知しています。学位を取って日本に帰ってきて、最初に働いたのが東大の、UTCP、University of Tokyo Center for Philosophy（共生のための国際哲学研究センター）という組織で働いていた時に、そのカロリーの高いことを散々やらされた経験があります。あれと同等のことを今、専任の教員の立場になってやりなさいと言われると、さすがに無理です。授業を持っていない状態で自由にやらせてもらえたからこそ、文学の人、哲学の人、社会学の人とかと、あれこれと言い合いながら一つのシンポジウムなりができていましたが、今やれと言われると相当しんどい話だというイメージを持っています。だからやりたくないというわけではなくて、少しずつでもできるようになればいいかなとは思っています。

講座の話を少しすると、理論言語学のプロパーとなるといま1人不在、藤田耕司先生の後が不在になっていますが、認知言語学の人と生成文法の人と、あとよく分からない僕みたいな実験をやりながら認知言語学っぽくもあるけれど別の方向から言語を見ているタイプの人間がいて、ずいぶん講座の中で刺激を受けています。修論の公聴会、博論の公聴会するときなんか、ほかの先生のコメントがあまりにも自分の見えているものと違う角度から出てくるので、非常に面白い刺激を受ける体験をしています。学生たちが同じように思ってくれていればいいのですが、実際にはまだまだがんばらないといけないところもあるかと思っています。

最後、閉じこもっていたらピユートの研究が廃れたという勝又先生のお話がありました。僕が初めて日本フランス語学会に入った時には、純粹にフランス語学という感じでやっていました。いまでも編集委員として残って活動しているのですが、やっぱり閉じこもっていて、フランス人がフランス語で書いた文献しか読まない、英語で書かれている言語学の理論なんて一切参照しませんというスタイルの人が多々いた。こちらも見事に廃れている。もうアクティブな会員が非常に少ない。年に7回開催していた例会が今は4回ぐらいしか開催できないし、しかも発表する人間が見つからないところまで廃れ切っている。

日本言語学会とか、日本認知言語学会とか、もうちょっと大きなところがそこまで廃れているかということ、そういうわけではない。周辺分野の研究成果を取り入れながら、フランス語にこだわることなく別の言語にも目配りするのはやりやすい。そういう越境であれば非常にやりやすいところがある。そういうことを積極的にやっけないとたぶん生き残っていけないし、別の分野の人に面白いと思ってもらえるような研究がなかなかしづらい状況になってきているというふうには思っています。

細見：ありがとうございます。われわれ、お互いにどんな研究をしているのか、知らないところがありますね。新しく着任される先生については教授会である程度分かるのですが、同時に着任したり、すでに着任したりしている先生方の研究はなかなか分からない。そういう点でもこの場でお話が聞けていいなと思います。それでは森口先生お願いできますか。画面共有しながらですね。

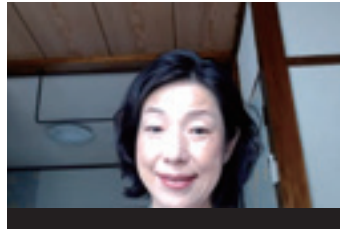
◆実現した共同研究の試み

森口由香：私は第7講座でアメリカ史、アメリカ研究が専門ですが、修士課程の時はアメリカの大学で外交史の先生に師事し、博士課程のときには文化史の先生に師事したので、もともとハイブリッドで育ってきたという背景があります。別に越境的なことをやろうと思ってやったわけではないのですが、ここ数年取り組んできたプロジェクトがたまたま色々なチャンスに恵まれて、かなり越境的なプロ



ジェクトになったので、そのことを今日ご紹介しようと思いました。

異分野の人どうしが共同研究をやらうとするときに、共通した問題関心と、分野をまたぐ難しさを乗り越えてでも一緒にやっという意欲と良好な人間関係、そしてそのための研究費がそろっていないと、なかなか難しいという感想を持ちました。



森口 由希

幸運にもそうした条件がそろった帰結が、昨年、京都大学出版会から出しましたこの共著書です。日本人、中国人、台湾人、韓国人、アメリカ人の研究者が共著者になっていますが、元来は韓国史、中国史、台湾史、アメリカ史などの各国史や地域研究、科学技術史、メディア・ジャーナリズム史などをやっている人たちです。こういう普段は別々の国、学会で活動している人たちが、一緒に何かやってみようということになり、学術越境的なプロジェクトができたのです。

『文化冷戦と知の展開 アメリカの戦略・アジアの論理』
(森口由希、川島真、小林聡明編著、京都大学学術出版会、2022年)

英語版:インディアナ大学出版会(米国)、中国語版:麦田出版(台湾)、韓国語版(準備中)

日本人、中国人、台湾人、韓国人、アメリカ人による、各国史・地域研究・科学技術史・ジャーナリズム史の学術越境的なプロジェクト

<経緯>

- ・ 2017~2020年度、科研(基盤B)「冷戦期東アジアの科学技術広報外交に関する国際比較研究」
- ・ 2019~2020年度、京都大学「知の経緯」融合チーム研究プログラム(SPIRITS)
- ・ 2020年度、「人文・社会科学未来形の発信」出版助成⇒中国語校閲費用
- ・ 2020年1月:執筆者全員による京都大学での合宿ワークショップ
- この直後、コロナ禍による調査・移動の困難

↓

国際的・分野越境的なグループだからこそ可視化されたもの

香港、台湾、日本、韓国、アメリカの経験(冷戦下の知の構築)の類似性と相違

その経緯を言いますと、2017年から2020年に私が代表者を務めた科研の基盤研究Bに所属していた日本人研究者が中心になり、緩やかなネットワークができていった。みんな冷戦期の学術の発展や、アメリカによる資金援助、それから資金援助に伴うアジアへの介入に共通の関心があり、京都大学のSPIRITSという学内競争的資金をいただき、このプロジェクトが発足しました。

2020年には、最終的に、日本語、英語、中国語の3か国語で共著書を出版しようということになりました。韓国語版もいま準備中です。中国語版では、「人文社会科学未来形の発信」の出版助成もいただきました。

とても重要だったのが2020年の1月、まさに、ダイヤモンドプリンセス号の事件が起きた月でしたが、執筆者全員が京都大学に集まって、たいへん楽しく有意義な合宿ワークショップを行いました。それぞれ母国語は違うのですが、英語でコミュニケーションして問題関心を共有したことがとても大きくて、これで本を出版しようという機運ができた感じです。

<p>【第Ⅰ部 地域研究】</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 川島真「冷戦下台湾の中国研究とアメリカン・フォード財団による中央研究院近代史研究所支援」 2. ミリアム・キングズバーク・カディア「冷戦中の協働—1945-1960年のアメリカにおける日本学」 3. 藤岡真樹「1960年代の日米間における『近代化』論争—箱根会議における価値体系と歴史認識をめぐる断層」 4. 小林聡明「朝鮮に関する知の形成とマツケン夫妻—太平洋戦争前後アメリカの学術界と政策立案集団との関係を中心に」 <p>Key Note 1 中生勝美「オーラル・ヒストリーとアーカイブによる学知の戦後史」</p>	<p>【第Ⅱ部 科学技術】</p> <ol style="list-style-type: none"> 5. 佐藤悠子「中国の原子力研究の萌芽—内戦と冷戦の間で」 6. 森口(土屋)由希「ミシガン記念フェニックス・プロジェクトと台湾—アメリカの公立大学による対外原子力技術援助」 7. 友次晋介「黄昏の帝国の科学知—脱植民地化時代における生態系調査の科学政治」 8. 文曉龍「冷戦空間の再発見—非武装地帯(DMZ)における生態系調査の科学政治」 9. ジェームズ・リン「開発の殉教者—台湾の農業開発とベトナム共和国、1959~1975年」 <p>Key Note 2 ヒロミズ「視点としての技術協力—帝国アジアと冷戦アジア」</p>
---	--

国際的で分野越境的なグループだからこそ得られた知見があったということが、今日の私の話の中心です。それぞれの事例研究は、香港、台湾、日本、韓国、アメリカという異なる地域、そしてジャーナリズム、地域研究、科学技術という異なる専門知を研究対象としています。しかし、それを横並びに並べてみると、いままで気が付かなかったような類似性が見えてきたり、類似性の中にも差異が見えてきたりして、とても面白かった。

共著書は、第一部地域研究、第二部科学技術、第三部ジャーナリズムと3部構成になっていて、それぞれケーススタディが収められています。異分野の方による論文を少し無理して一緒にしたので、色々欠点もあります。例えば、地域を横に並べて比較するだけで精一杯となり、戦前から継続性という縦のラインの分析が足りないというコメントも書評会などでいただきましたが、曲がりなりにもこういう本ができました。

通常は異なる国や学会で活動している研究者たちによる越境的な研究によって可視化した共通点と相違点を、パワーポイントにもまとめました。例えば、アジア財団はCIAのフロント組織、一方ロックフェラー財団は純粋な民間財団ですが、そういったアメリカの政府系、あるいは民間の組織が、同じような援助を日本、香港、韓国、台湾に行っていた。そのやり方がとても似ていることが、横並びにしてみても初めて実証的に手に取るように見えました。

また現地知識人が、必ずしも共犯関係だけではなく、抵抗したりクリエイティブに受け取ったりしていた、その行為主体性にも共通点と相違点がありました。

<p>【第Ⅲ部 ジャーナリズム】</p> <ol style="list-style-type: none"> 10. 藍適齊「米援、台湾のジャーナリズム教育、そして中国系ジャーナリストのトランスナショナル・ネットワーク」 11. 張標「冷戦期香港のジャーナリズム・コミュニケーション教育の形成とアメリカ」 12. 車載永「冷戦期米国の教育交流プログラムと韓国ジャーナリズムのアメリカ化」 13. 小林聡明「GHQ占領期日本人ジャーナリストのアメリカ招聘プログラム—ロックフェラー財団・コロンビア大学・民間情報教育局」 <p>Key Note 3 許麗「専門知としての対民活動(Civic Action)—米軍から韓国軍への連鎖」</p>	<p>通常は別の異なる国/学会で活動する研究者たちによる「越境的研究」が可視化した共通点と相違</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆ 「アジア財団」や「ロックフェラー財団」などアメリカの政府および民間組織による資金援助(およびそれに伴う様々な程度のカン) ◆ 現地知識人のエージェンシー(行為主体性) ◆ 冷戦の論理と地域特有の論理(たとえば国家分断、どこに「帰国」するか等) ◆ 知識や技術の属人性 ◆ 大国⇒小国だけではなく(小国⇒大国へ)の影響力(安全保障や軍事面では見えないパワー) <p>多方向的なネットワークング</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆ 例として台湾の研究者の京都への招聘、新たなテーマでの研究会の発足など。
---	--



それから冷戦の論理、すなわち東西イデオロギー対立が一方ではあるのですが、それぞれの地域には当然ながら地域の論理、例えば分断国家の論理や、海外で教育を受けた知的エリートがどこに帰国するかという問題があったりするわけです。知識や技術は究極的には人の頭脳の中に宿っているので、その人たちが国際移動すると、知識や技術があっちこっちに動いてしまう。安全保障面だけで外交を見ていると、大国の力は圧倒的ですが、知識の構築の分野を見ていると大国から小国へという方向性だけではなく、小国から大国へ影響が及んでいたり、いろいろなベクトルが見えてきた。

越境的研究のもう一つの成果は、人的なネットワークです。例えば台湾と日本の研究者や、韓国と日本の研究者による新たな研究プロジェクトの発足など、いろいろな方向に発展していきました。越境的な研究から面白いものが見えてきたという、私の個人的な体験でした。

細見：ありがとうございます。森口先生には具体的な研究にそくしてお話いただきました。韓国、中国、台湾、アメリカ、そういういろんな人との国際的な研究の中で見えてくるものの豊かさですね。それでは、最後になりますけれど、小松先生、お願いできますか。

◆「ヘテロジニアス」をキーワードとして

小松直樹：いま、森口先生のお話してとても印象的だったのが、越境には2つの意味があるということです。一つは国を越えるということ、もう一つは分野を越えるということです。われわれも2つの越境をとっても重要視していて、一つはいろいろな国のいろいろな人たちを集めること、そしていわゆる学術の越境。この2つを研究室の中で実現しようと思ってやっています。

ケミストリーの用語で、ホモジニアスという言葉とヘテロジニアスという言葉があります。たぶん、英語が分かっている人はだいたいの意味合いが分かると思います。われわれみ



小松 直樹

たいなケミストリーの中でも有機化学はホモジニアスなほうを学問的に目指す人が多いのですが、私自身は反対にヘテロジニアスを一つのキーワードとして研究室の運営なり研究の進め方なりをやっています。

一つ目のヘテロジニアスは先ほど言いましたようにいろいろな国の人たちを集めることで、われわれのところは日本人がほとんど来ない状況になっていますので、やはり人を集めて研究を進めるには、どうしても目が海外に向かざるを得ない。そういう中で魅力的な研究を発信して、いろ

んな国から問い合わせが来る形でいい研究をする。「あ、ここはいろいろな人たちがいるから行ってみよう」と思うような状況を作っていく。中国人が圧倒的に多いのですが、いま、南アフリカからいわゆるダークカラーの人が初めてわれわれの研究室に来て、4カ月滞在することになっています。彼はポストクのレベルですが、招聘研究員とか、海外の准教授クラス、あるいは若い助教クラスの人たちにも来ていただいて、最大2年から数カ月というようなスパンで滞在してもらっています。もちろん企業の人たちもいま、1人、2人いますし、それからもちろん学生もいろいろな国から来ています。そういう人的なヘテロジェニシティ、ヘテロジニアスな環境、一つはそれが非常に重要かと思っています。

それから、研究においては、やはりケミストリーが中心になりますが、十数年、あるいは数十年前から、ケミストリーだけをやっていてもやはりどこかで行き詰まるだろうと考えて、ケミストリーをいろいろな分野に生かしていく研究に、比較的早い段階から足を踏み出してきました。

そのキーワードとなるのはやっぱりマテリアル。今回のわれわれの講座の名前も物質科学です。物質というのは非常に多様です。われわれの講座の紹介文にもあるのですが、例えばみなさんがご存じの地球温暖化の二酸化炭素、あるいは水素社会の水素。ああいう小さい分子もいわゆる物質になります。それから非常に大きい例えばDNA、ああいう生体高分子とか、それからわれわれはナノ粒子を扱っていますが、金属酸化物など、いろいろなナノ粒子があります。十数ナノの小さいものから百ナノを超えるような非常に大きいものまで、多様な物質が物質科学には含まれる。

そこにはいろいろな側面があります。二酸化炭素と言えばキーワードとしてみなさんはやはり環境を思い浮かべると思いますし、水素と来るとエネルギー。ナノ粒子はいろいろな使われ方がされていますが、われわれはナノ粒子を医療に使うことを目指しています。ナノ粒子を医療に使うのでも、スッと適用できるのではなくて、いろいろな機能化が必要になる。ナノ粒子を作った上で、そこに機能を付与していく。そこはケミストリーが活躍する場になります。さらに、そこで終わりではなくて、われわれはマウスとか細胞とかを使って、それを評価しなきゃいけない。評価になると、今度は生物学、あるいは医学になる。

これはわれわれの研究室のコンセプトですが、できるだけわれわれの中でできることは全部やる。そうすると教育的に学生がいろいろなことを学べる。ですから、越境した学生をどんどん輩出できるという意味で、われわれの中でできるだけやろうというのを考え方として持っています。ただ、場所とかいろいろなテクニカルな話で、やはり自分のところでは限界がある場合は、外に持って行って評価をしてもらう。そのときもできるだけ学生と一緒に行って実地で学ぶ。



それからナノ粒子を評価する、マテリアルを評価する場面ではやはり若干フィジクスが必要です。物理的な学問の学びも必要になる。われわれ自身がそういう形で、ヘテロジェニアスというキーワードのもと、人的なヘテロジェニシティとサイエンスにおけるヘテロジェニシティ、そういうところを重視して進めています。物質科学講座全体で見るとやはり多様です。いろいろな先生方がおられます。それぞれの構成員はそれぞれの多様性を持って研究を進めています。残念ながら、本当に越境した研究をしている人は、非常に限られている気がします。そのあたりは残念ですが、教授、准教授として独立してやられているので、そこに踏み込んでいくことはなかなかできない。やはり周りが魅力的な研究をして、コラボレーションしたいと思う研究をしていく、あるいはそういう場を作っていくことが大事だと思います。

あと一つは大事なのはやはり人事だと思います。そういうことができる人を採用していくことが、研究科のコンセプトを外に発信していく上で大事ではないかと私は思っています。たぶん、小木曾先生の第10講座でも同じ感じかという気がしています。個人的な話と講座の話と、研究科への提言です。

細見：越境にヘテロジェニアスという言葉、発想を改めて重ねていただきました。ありがとうございます。齋木先生、いまの各講座の先生方のお話し聞かれてどんなことを思われましたでしょうか。

◆「学術越境センター」のめざすもの

齋木：まず、予想どおりというか、みなさん、とても面白いなと思って聞いていました。同時に思ったのは、これだけ面白い研究している人がいることを、学生が知る機会をどうやって作るかです。それはこの再編をやっているときにずっと考えていたことで、それぞれの先生が面白い研究をやっていることを、その先生の指導学生は知っているけれど、ちょっと離れると、その先生が何をやっているか全く知らない。それがたぶんいまの現状で、そこを何とかできないかが、一つ考えていたことです。センターを作った際にもそういうことができる仕掛けができないか、ずっと考えていました。

守田先生がおっしゃったように、いろいろ興味があって共同研究をやりたいのだけれど、授業もあってガチでやるのはしんどい。それはおっしゃるとおりで、重々承知しています。一つ僕らが考えていたのは、学生さんのほうに主体となって動いてもらう仕掛けを作れないかということでした。教員が一生懸命声かけてやろうよと言ってやるのだけれど、基本的にはしんどくなって続かない。学生がいろいろなところに行って話を聞いたり、何かヒントを得るような機会を作るとか、そういうことができると、思いもよ

らない発想とかコラボレーションが生まれるかもしれない。僕らみたいな頭の固くなった年寄りよりも若い人たちがそういうことをしていくことで、新しい可能性、方向、アイデアを見つけることができるのではないかと。どうしたらそれができるか、実はまだ妙案はないのですが。

もちろん人環の教員全員がこの学術越境に100%参画することはまったく想定していなくて、教員それぞれがやりたいことを好きにやってもらうのが基本です。それをいかに活かしていけるか、それが枠組み作り、組織作りとして考えていることです。それぞれのお話に対する反応ではなくて、大雑把な印象のお答えになって恐縮ですが、まずはそんなことを感じました。

細見：それぞれの教員は越境を含めていろいろ面白い研究をしているけれど、なかなかそれが学生に伝わっていないという問題と、学生のほうがいろんなものに興味を持って積極的に各学問の学術架橋の場を作っていくことができないかというお話でした。

齋木：付け加えて、最初に立木先生がおっしゃっていたように、基本的にそういう興味の広い学生が多い。特に総人の学生はそうだと思うのですが、彼らがいろいろなことをやりたいと思って入ってくるのをいかにそのまま伸ばしてあげる仕組みを作れるかを、これから僕らは考えていかなければいけないのではないかと思います。

人環はそういう大学院だから、ときどき外から受けてくる学生には、人環は心理学だけではなくいろんな違う分野も勉強できる大学院だからうちを受けたのですという人も結構います。そういう人たちが基本的に集っている大学院であり学部なので、それをいかに伸ばしてゆくか。同時に入ってはみたけど、ほかの先生が何をやっているのか、自分の研究室以外の研究は何も分からないまま修士が終わりましたというアンケート結果が毎年あるのも事実で、それは非常に気になっているところです。それに対しては僕らが大きな負担をかけなくてもできる仕掛けは何か考えられるのではないかと考えています。

細見：小木曾先生、ここからちょっとテーマを絞って議論をしたいのですが。

◆専門性と越境性、どちらを優先するか？

小木曾哲：みなさんのお話を伺って非常に感銘を受けました。議論をしたいポイントはいくらかもあるのですが、時間もないのでちょっと一つに絞ってみたい。一番私の心に刺さって、苦笑いせざるを得なかったのは、ピユートの分野ばかり自閉的にやっていた研究が衰退してしまったという勝又先生のお話でした。私の専門分野周辺でも似たようなことが起こっています。例えば私が学生だった80～

90年代までだと、地球科学の場合、それぞれの専門家がその専門分野だけやっていてハッピーだった。90年代以降はあっという間にそうじゃなくなっています。例えば私



小木曾 哲

は岩石学を研究していますが、岩石学ばかりやっていると、それだけでは若者を引き付けられなくなっていった。地球科学の中でも越境的でいろんな分野にまたがる研究は人を引き付けている。ただし、自分が学生だった頃を思い浮かべると、やはりどこかに足場を置いて何かの専門を身に付けることから始めなければいけない。自分がどこにも足場を置いていなかったら、越境もできないと思うのです。

ある程度専門性を身に付けた私たちが越境するのは比較的やりやすい。人環だとなおさらそうだと思うのですが、これから何かを学ぼうとしている院生がいきなり越境はやはりできない。各分野の、そこでの学問的手法を身に付けつつも、興味対象は広いからいろんなことをやりたいというときに、どうしたらいいのか。これはなかなか難問だと思います。齋木先生の最初のお話にあった、予測できないことばかり起こる未来の中で課題解決力を持った人材を出すというところに焦点を当てると、まさに学術架橋力が必要ですが、架橋するにしたって、両側にちゃんと橋脚がないといけない。学生を育てるという視点で見た場合、専門性を身につけつつ越境することを学生にどうやって実行させるのか、これはかなり難しい問題だと思っています。その点について、どなたでも結構ですので、何かご意見がありましたら。

◆学生の研究につき合うという姿勢

小松：先ほども言いましたように、ケミストリーはある程度土台ですが、われわれはヘテロジニアスな研究、マテリアルを中心にいろいろな側面の研究をしているので、どっちかという生物のほうが得意な人たちも入ってくる。医療分野に興味を持っている人は生物専門の人です。この前学位を取った Yajuan Zou という学生がいました。彼女はたんぱく質を扱っていて、私がやってきたケミストリーとは違う分野の人です。そういう中で研究室での教育もあるのですが、彼女はたんぱく質、私はケミストリー、有機化学で、物質、材料に根差したもののなので、私は教育できない。それぞれの人が興味を持つ分野で成長してもらう。その場を与える。もちろん私からいろいろ議論を吹っ掛けることはあります。でも結局は自分で専門を決めて学んでくれということです。ですから、私から専門を押し付けることはない。昔みたいにトップダウンで先生が上から教えるという時代ではない。われわれはその場を与えて、その場の中から自分で専門を見つけて自分で成長していってもら

う。そういうことかなと私なんかは思っています。

小木曾：たんぱく質を研究しているその学生さんは自力で、小松先生に頼らずに、たんぱく質の専門家のところに行って自力で学んでくる、ということですか。

小松：彼女の専門性を生かしながら学際的なところで研究は成り立つということです。彼女はドクターから来た人なので、もうある程度の専門を持っていて、それを横に展開していく。ある程度専門性を持った人がわれわれのところに来て、違う領域にどんどん展開して広げていってもらうという形です。

われわれのところには学部生は来ないでせいぜい修士から。修士からの人はわれわれの専門分野、ケミストリー、あるいはマテリアルサイエンスを専門として学んでいく。博士から来た人は自分の専門性を持っていて、それとわれわれにもともとあるものを融合していってもらって、自分の専門領域を広げていく。そんな感じですね。

小木曾：ほかの先生方、いかがでしょうか。成功例みたいなもの、あるいは失敗例でもいいのですけれど。

立木：私も小松先生と同じような意見をもっています。学生は真剣です。新しい研究分野、これから研究者としてやっていける楽しい分野、研究者になれる分野を学生は探します。私が「例えば」と提供したものと全然違うものに向かう。「そうじゃなくてこういうことを自分はやったほうが良いと思う」と、真剣に言って、ちゃんと自分でそういう専門家になった学生もいます。そういう場合に学生に任せる。学生が本当に興味を持っていることを伸ばせる場。齋木先生もそういうことをおっしゃっていましたが、そういうことができる場所は重要だろうと思います。

そのためにわれわれに何ができるのか、非常に難しいですが、学生につき合うしかないのではないかと。学生はほかの先生だとかいろんなところで仕入れてきた話をしてくれます。結構文系的なことに興味を持っている学生もいたりして、一緒にディスカッションしています。

いま、研究のリソースはたくさんあります、ネットの上でも。YouTubeでもいろいろなビデオがありますし、いろいろな人にも聞きやすくなっています。だからどういう分野に興味を持てばいいのかをかぎつける能力を含めて、学生に実地に能力を身に付けさせる、そういう場になればいいんじゃないか。特に総人はという面もあるんですけど、そう思っています。

小木曾：どうもありがとうございます。ただ、私が常々思っているのは、時間が足りない、ということです。例えば自分の専門分野の手法の中にも、架橋や越境する際に他



分野にとって有用なものもあると思うんですが、それを他分野の学生が身に付けるにはやはり相当な勉強が必要で、それをやっている余裕はない。それで結局、自分の専門しかやらずに出てしまうことになるのです。

何でも自力で頑張るスーパーマンみたいな学生はいいのですが、人環の標準的な能力の学生だとやはり専門だけで終わってしまう。学生にとって人環という場を生かしていないような気がする。例えば文系のある分野では、ある言語をひたすら学ばなきゃいけないという面もありますね。相当大変な作業だと思いますが、その上でやりたいことをやろうと思ったら時間切れということがあるかと思うのですけれど、いかがでしょうか。

細見：僕自身ヘブライ語をやっている、ヘブライ語を自分の学問に生かせるところまではなかなかいけない。ポーランド語はなおさらそうです。それでもそういう複数言語がないとどうしようもない研究をやっています。学生が複数言語をちゃんと学ぶのはなかなか大変です。勝又先生、どうですか。

勝又：理系と文系と違うのかもしれませんが。理系だとどうしても最低限、その分野で習得しないと話にならないことがあると思うのです。でも文系の場合、言語は自分でもできますし、カリキュラムとしてどうしても修得しておかないといけないものは比較的少ないのかと思います。どうなのでしょう。

小木曾：学問の特性次第という部分もあるでしょうか。

◆走りながら身に付ける

森口：私の研究室は外部からの進学者のみです。内部進学者が1人もいなくて、全員他大学、あるいは他学部からの進学者なのですが、体系的にアメリカ史あるいは文化史、外交史の基礎を学んだことがないのに、アメリカとほかの国との関係を論じるのは、やっぱりちょっと難しいと感じています。それで、私も彼らに基礎的なことを勉強してきたから来てほしいと思っているし、学生たちの間にも、もう少し体系的に例えばアメリカ史を学ぶ場が欲しいという意見がありますが、残念ながらそういう場がない。

私は語学の担当教員なので、英語を他学部の学生に教えていて、アメリカ史を教える場がないのが、学生にとっても私にとっても悩みですけど、結局、解決方法はなくて、私が学生に言っているのは、「走りながら勉強しなさい」ということです。まず基礎を押さえてから面白いことをやろうなんて思っていたら、基礎を押さえるだけで終わってしまう。新しいイノベティブなことをやりつつ、必要な基礎知識をどんどん貪欲に吸収していくしかない、と日頃から言っています。

細見：確かに、走りながら身に付けていく。それしかないかもしれないですね。

小木曾：最近世の中も例えば生成 AI とかでいきなり変わりだして、その対応力を身に付けてから、なんて言っている場合じゃない。常にそういうことが世の中で起こるので、走りながら研究していく能力を身に付ける、ということでしょうか。

細見：小松先生の言い方ですと、走れるグラウンドを用意しておくという感じですね。

小松：われわれはサポーターとして環境はちゃんと与える。われわれだったら分析機器とかいろいろなものも含めて、ちゃんと必要な環境を与える。それを作るのに十分なお金を取ってくる。でも、プレーヤーはみんななので、ここで頑張ってくださいと言う。もちろん伴走しながらアドバイスは与えるけれど、自分のこれからの専門分野も含めて、そこはもう自分で学んでくださいというスタンスですね。

細見：編集委員で参加いただいている先生から、感想なり質問なり、出していただければと思います。木下先生、いかがでしょうか。

◆「学術越境センター」に期待するもの

木下千花：みなさまのお話を伺って、研究内容についても普段はなかなか知ることができないことを、とても面白く伺いました。私自身は映画という分野自体が総合芸術であって、また研究分野としての歴史が浅いので、越境し他分野から学ぶのは、ほぼデフォルトです。学生には常に哲学、地域研究とか、いろいろ勉強しに行くように、あの先生にお話を聞きに行きなさいということは常に言っています。

この機会に改めて伺いたいのは、学術越境センターの役割です。人環に来るタイプの先生だと、共通教育も教えていて、自分のことだけやって



木下 千花

るなどか、自分の分野だけに閉じこもりなさいと学生におっしゃる方って、あんまりいないと思います。そういう価値観は共有されているんじゃないかと思います。

その中で、この学術越境センターが具体的にどういう役割を果たしてゆくのか。守田先生がおっしゃるように、UTCP みたいなセンターはポストクの頃にはいいけれど、専任教員になってから駆り出されるのはたいへんです。京都大学だと例えば文系なら人文科学研究所がそのような役



割を担っている部分もあって、理系でもいろいろありますね。そうしたなかでこの越境センターがとりわけどういう役割を果たすのかについて、齋木先生からすでにお話しいただいていることもずいぶんあると思うのですが、研究自体の時間をあまりに費やすことなく、かつ横に広がっていく土壌を、とくに学生に対してどのように開くことができるのか、改めてお話を伺えればと思います。

細見：時間が押していますので、先に田口先生からも質問なり感想なり出していただけますか。

田口かおり：今日はありがとうございました。木下先生もおっしゃっていましたが、とくに私はこの4月に着任したばかりですので、それぞれの先生のご専門、最近の出版物、プロジェクトなどを伺う機会がなかったので、非常に面白く拝聴しました。

細見先生が守田先生のお話しを受けて言われたように、それぞれの先生がいまどういう研究をなさっておられて、そこにどういった課題があるのかを学生に教える機会がない。



田口かおり

まず教員である自分自身が、先生方のご専門をしっかり存じ上げていないので、学生に対して、じゃあこういうアプローチはどうだろうか、この先生のところに行ってみたらとか、まだ言える基盤ができていない。それが私の課題でもあります。そういう機会が今後できていくのであれば、例えば共有するトピックで先生方何人かで座談するカジュアルな場とか、そういうのがあると広く視野が設けられ、共同で研究していく可能性が見えてくるのかなという感想を持ちました。

私自身の研究は芸術作品の保存修復ですが、まさに領域横断的な分野でもあって、文系理系の枠組みでくくり切れないところがあります。作品を見るのにも、科学的に見る、物理的に見る、美術史的に見るといったさまざまな手法がありますが、いままでの勤め先では学内で協力いただける先生を自分で探してこなくてはいけなかった。あるいは、協力いただける院生にお声がけをして、それがかなりの労力になっていました。

例えばX線CTを撮影できる機材を持っている先生を探さないといけないとか、作品の裏にある作家の署名が画家本人によるものなのかどうかを特定するために、他学部の先生に筆跡鑑定のプログラムを応用していただく必要がありました。現代美術の技法を調査するとなれば、「ミクストメディア」としか表記されていない材料について、具体的に何でできているのかを調べなくてはならない。そうになると、組成については有機化学の先生にサンプルをお届

けて突き止めていただく必要がある。美術館で作品を点検していて、作品に付着した虫の卵が見つかった場合には、これが何の虫の卵かをすぐに調べないといけない。そのためには昆虫学をご専門とする先生を探さないといけない。そういうときに必死で検索し、どの先生にお尋ねしたらいいか、まずは学内で探すということをおこなった。大掛かりな調査になると、美術館、大学、企業間での契約を締結するとか、作品の取り扱いについての機密事項を調整するとか、デリケートな部分にかなりの時間と労力を割かれてきました。

学術越境センターの役割についての問いかけが木下先生からありましたが、個人的にはそういうデリケートな部分、法的な部分であるとか、契約書の締結であるとか、こんなプロジェクトの発案が何々先生からあるのだけど、学内でこういう人はいないだろうかとか、人材についてのマッチングをする可能性があればすごくありがたいと感じました。

保存修復においては保存科学の分野からのアプローチもとても大切ですので、科学を専門とする先生、理系の先生方と文系の先生方と、うまくミックスアップしたような、そんなプロジェクトが組んでいければと思ったりもしました。

細見：木下先生、田口先生の場合は、ある種の総合知なしにはできない学問分野だということが改めてよく分かりました。木下先生、田口先生からも越境センターの役割についての問いかけがありましたので、最後にそのことを含めて齋木先生に場を締めていただく言葉を頂けますでしょうか。

齋木：越境センターをどうやって作ろうか、日々模索しているところで、お二人にご指摘していただいたことは大事です。特に田口先生にご指摘していただいたことですが、もちろん京大の中に全学組織でそういうマッチングしようとしている組織がいろいろあって、センターとしてはそういうところとうまくつないでいくことがこれからの仕事の一つになるだろうと思っています。

例えばKURA（京都大学学術研究展開センター）もそうですけれどURA（リサーチ・アドミニストレーター）の組織とどう連携していくか。また、例えば人文研とかそれ以外のところと、もちろん教員個人でつなぐことは今までもやってきましたが、それ以外に部局レベルで、それを窓口にしたり、インターフェイスとして使ったりということは一つの機能としては考えています。

それから、教員が忙しすぎるということでしたが、センターとして教員に鞭打って一生懸命越境的な研究をなさうというつもりはありません。学術越境プログラムを出してくださいという要請と矛盾するようですが、もしやりたいことがあればセンターとしていろいろサポートしますと



ということです。さっきも話しましたがいかに先生方のやられていることをみんなで共有できる仕掛けを作って、私はこんなことをやりたいという希望を誰かほかの先生につながり、例えば田口先生がやりたいことを小松先生が聞いて、それだったらうちのラボでもできるとか、あるいはうちのラボの知り合いでこういう人がいるとか、そういうネットワークをうまくやれる仕掛けを、これから考えていこうと今日聞いていて思いました。

お互いにこんなことをやっているとか、こんなことがもてきたらうれしいとかということ共有できるようなネットワーク。全学でそういうことをやっている組織、学際融合センターとかあるのですが、全学でそれをやると規模が大きすぎてあまり機能しない気がします。もしかすると人環ぐらいの規模でやると意外とお互いにニーズを共有して知り合いを通じていろいろなネットワークが新しく作られたりとか、今日聞いていて改めて思いました。それはまた検討させていただきたいと思います。

細見：学術越境のために全く新しいことを一から始めるというより、それぞれがすでに行っていることを大事にしながら、その必要に応じて、越境センターとも結びついていくということかと思いました。

齋木：そうですね。それをサポートできるような形を取りたい。ぜひいろいろお困りのことをお聞かせいただいて、何かできないか考えさせていただきたいと思っています。

細見：それでは、いま1時間半を少し過ぎていますが、このあたりで締めさせていただきます。本日はありがとうございました。

*本座談会は、2023年9月14日（木）にオンラインにて開催した際のテープ起こしを各発言者に確認・修正いただいたものである。

2022年度 人間・環境学研究科受賞者一覧

*学年等は受賞時のものものであり、旧専攻での分類としています。

現役生・修了生の活躍

共生人間学専攻

藤井 慧（博士1年）情報処理学会令和4年第48回ゲーム情報学研究会若手奨励賞「ゲーム AI の局所戦略の SHAP による説明」

Daniel Roy Pearce（令和4年3月23日博士学位取得。現職、四天王寺大学教育学部講師）日本言語政策学会、2021年度学会賞優秀論文賞「小学校の外国語指導助手（ALT）はモノリンガルか—単一言語教育に従う複言語話者の位相—」

山家 悠平（博士後期課程2013年7月23日修了現 人間・環境学研究科 人文学連携研究者）集英出版四賞2022年度第35回小説すばる新人賞「楊花の歌」（ペンネーム青波杏）

横井川 美佳（博士3年）日本応用心理学会第88回大会若手会員研究奨励賞「発達に支援が必要な子どもたちとのポジティブな経験の重要性」

水野 純平（特定研究員）第16回日本作業療法研究学会学術大会優秀発表賞「記憶された文脈情報が文脈提示のない課題時の注意機能に与える影響」

共生文明学専攻

鈴木 啓峻（2019年3月博士後期課程研究指導認定退学。現職、大阪大学講師）第62回ドイツ語学文学振興会奨励賞「ドミトリー・メレシコフスキーを読むトーマス・マン——「第三の国」における「エロスの禁欲」の位相をめぐって」

楊 慧京（博士3年）2022年度（第17回）漢検漢字文化研究奨励賞佳作「貝原益軒『千字類合』の字体規範」

張 詩雋（令和3年11月24日博士学位取得。現職、国立民族学博物館外来研究員）第17回日本文化人類学会奨励賞「神仏の肖像——チベット・タンカの制作と崇拜について」

齋藤 駿介（博士2年）IPHS Prizes and Awards 2022: East Asia Planning History Prize（国際都市計画史学会、2022年東アジア都市計画史賞）「The disposition of building evacuation sites and war-damage reconstruction in Sendai -The projects and the relationships among public entities for the conversion of evacuation sites into urban planning sites. Japan

Architectural Review 4(1): 129-143, 2021.」（仙台における建物疎開跡地処理と戦災復興—疎開跡地の都市計画用地への転用をめぐる各事業の特徴と主体間の関係—）

関連環境学専攻

椿本 純也（修士2年）第41回 光がかかわる触媒化学シンポジウム優秀ポスター賞「Ni@SiO₂コアシェル触媒を用いた光熱変換型メタンドライリフォーミング」

吉田 七瀬（修士2年）第68回有機金属化学討論会ポスター賞「イリジウム錯体触媒を用いたアルコール類のメチルアミノ化ならびにジメチルアミノ化反応」

程 国慶（博士3年）第63回フラーレン・ナノチューブ・グラフェン総合シンポジウム若手奨励賞「Interlocking of SWNTs with Metal-Tethered Tetragonal Nanobrackets to Enrich a Few Hundredths of Nanometer Range in Their Diameters」

曹 偉傑（博士1年）The Electrochemistry Society 242nd ECM Meeting, Student Poster Awards, Third place（アメリカ電気化学学会学生ポスター発表賞）「Operando X-Ray Absorption Spectroscopic Study on Influence of Specific Adsorption of Sulfo Group in Perfluorosulfonic Acid Ionomer Towards ORR Activity of Pt/C Catalyst」(触媒である Pt 表面に特異吸着したスルホ基をオペランド X 線吸収分光法を用いることで初めて捉えた報告)

西野 優汰（修士1年）OKCAT (Osaka-Kansai International Symposium on Catalysis) 2022 Outstanding Research Award「Controllable Product Selectivity by Light Position in Photothermal Steam Reforming of Methane」

于 佳欣（修士1年）2022年日本植物分類学会第21回大会ポスター発表賞「MIG-seq による日本産スミレ属タチツボスミレ亜節植物の系統関係の推定」

孫田 佳奈（博士3年）2022年日本植物分類学会第21回大会口頭発表賞「多様な表現型を示すダイモンジソウの系統進化史」

増田 和俊（博士1年）森林遺伝育種学会第11回大会学生発表最優秀賞「海洋島で雌雄異株化したムラサキシキブ属はどのような性決定ゲノム基盤を獲得したのか？」

教員の活躍

共生人間学専攻

TAJAN, Nicolas Pierre (特定准教授) CIPPA (精神分析家、個人臨床論文部門) 第1回ジュヌヴィエーヴ・ハーグ賞「2歳から6歳までの自閉症児の精神分析的・総合的治療に関する研究」

江川 達郎 (助教) 日本宇宙航空環境医学会2021年度研究奨励賞「Involvement of receptor for advanced glycation end products in microgravity-induced skeletal muscle atrophy in mice」(微小重力環境下の筋萎縮進行における終末糖化産物受容体の関与)

齋木 潤 (教授)、上田 祥行、中山 真孝、阿部 修士、内田 由紀子 (以上は人と社会の未来研究院所属教員) 2022年日本心理学会第86回大会特別優秀発表賞『「こころ」の概念に関する多国間調査 — 「こころワールドマップ」の作成に向けて』

堀口 大樹 (准教授) 感謝状 (ダツェ・トレイヤ=マスイー駐日ラトビア共和国大使より)「ラトビアと日本の関係促進に対する多大な貢献を評価」

共生文明学専攻

徳永 悠 (准教授) アメリカ歴史学会太平洋岸支部 (The Pacific Coast Branch of the American Historical Association) 最優秀論文賞 Louis Knott Koontz Memorial Award アメリカ歴史学会 太平洋岸支部 (The Pacific Coast Branch of the American Historical Association) 若手優秀論文賞 W. Turrentine Jackson (Article) Prize 「Japanese Farmers, Mexican Workers, and the Making of Transpacific Borderlands.」

※徳永先生の受賞は2021年度のものですが、前号で記載漏れとなりました。お詫びとともに今号に掲載させていただきます。

桂山 康司 (教授) 第34回国際ホプキンス学会ジェラード・マンリー・ホプキンス賞 (The Gerard Manley Hopkins Award 2022) イギリス詩人ジェラード・マンリー・ホプキンス (1844-89) に関する優れた研究報告 (「脚韻の技法とホプキンス」) や日本文化の紹介などを通じて学会の発展に貢献した。

情報処理学会令和4年第48回ゲーム情報学研究会若手奨励賞

ゲーム AI の局所戦略の SHAP による説明

藤井 慧

Satoru FUJII

人間・環境学研究科数理科学講座立木研究室博士後期課程 2 年生

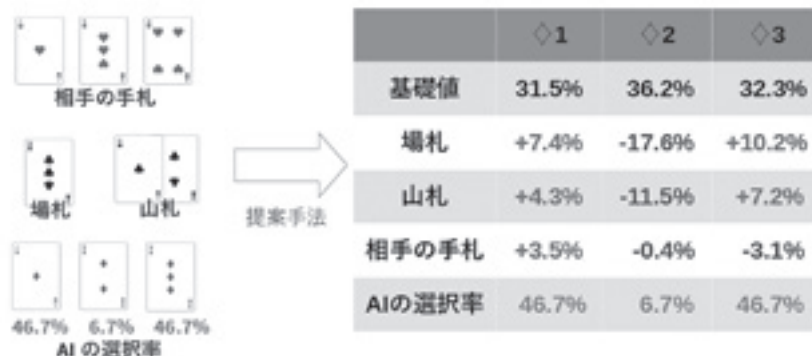
近年の AI 技術の進歩の速度は凄まじく、ほんの少し前には不可能とすら思えた事の多くが簡単に実現可能になってきました。ここ 1 年程度だけを眺めても、ChatGPT や画像生成 AI が登場し、社会に大きな影響を与えています。

こういった AI を適切に活用していくことで、人間社会の更なる発展を目指したいところです。ここで、実際に AI を大規模に導入するとなった際には、AI の思考や出力がいったい何を根拠としていて、どのように行われているかについての説明が求められることが多々あります。AI に重要な仕事を任せるためには、その AI が信用できることが必要不可欠だからです。また、高精度な AI がどのように推論を行っているかを知ることによって、様々な事象への我々の理解が深まっていくことも期待できます。あるいは、AI の判断過程が可視化されることによって、AI の検証や改善が容易になることも考えられます。このように AI に解釈可能性を付与する、あるいは解釈可能性を前提として AI を設計するといった研究は、“XAI (eXplainable AI)” のキーワードの下で近年になって盛んに研究され始めています。ここで紹介する私の研究も、この流れに位置付けられるものです。

既に多くのタイプのゲームで、人間のトッププロを上回るほどの強力な AI が登場しています。近年ではこれを受け、将棋などで見られるように、人間のプロプレイヤーが AI との対戦を通じて自身の実力向上を図ることも増えてきました。しかし、こういった AI は自身の戦略を説明することを前提に設計されておらず、人間は AI の戦略を「見て盗む」よう試みるのが精一杯です。

私の受賞研究は、ゲーム AI の着手がゲーム局面のどの情報に着目して行われているかについて、いくつかの条件を満たす数値化を行って出力する説明手法を提案したものです。より具体的には、学習済みの AI を対象にして「様々な情報が入力値として利用できなくなっていくとき、AI の出力がどのように変化していくか」を計算することで説明を実現させています。提案手法を用いてゲーム AI の着手に説明を加えることによって、こういった AI から学ぶ行為を飛躍的に容易にすることができると期待しています。

「ゲーム」という言葉を使うと、いわゆるデジタルゲームやボードゲームのような娯楽のためのゲームだけが頭に思い浮かぶかもしれませんが。実際そういったゲームも研究対象として非常に興味深いですし、学習や実験が容易なのもあって、多くのゲーム AI の研究がそれらを題材にしているのも事実です。しかし、ゲームとして定式化できる事象は、必ずしもこういったものに限りません。企業間対立、国家間の争い、生物種の生存競争のように、複数の主体が相互に影響し合う様々な実世界の状況がゲームとして定式化できます。これとは用いる理論が少し異なりますが、1 人の主体が意思決定を繰り返し行っていくような状況も、1 人デジタルゲームなどと同様の問題設定だとみなすことができます。こういった実世界の問題に広く応用できる可能性を常に秘めているのが、ゲーム研究の大きな魅力の一つだと思います。



日本語政策学会優秀論文賞

小学校の外国語指導助手 (ALT) はモノリンガルか — 単一言語教育に従う複言語話者の位相 —

ピアース・ダニエル ロイ

Daniel Roy PEARCE

四天王寺大学教育学部講師

21 世紀の外国語教育は変化期にある。従来の日本の外国語教育は、海外の文献を読むための読解が中心であった。その中で言語のモデルは、いわゆる「ネイティブ (=母語話者)」の使用する言語であった。しかし、20 世紀末にグローバル化が意識され始め、コミュニケーションのための口頭能力が重視されるようになり、「ネイティブ」をモデルにすることが疑問視され始めた。

「ネイティブ」とは、対象言語の「標準語」しか話さないモノリンガル (=単一言語話者) という意味で用いられてきたが、グローバル時代の外国語のモデルとして不十分である。なぜなら、例えば日本の英語学習者が想定するコミュニケーションの相手は、多くの場合、英語母語話者ではない。そのような相手とコミュニケーションをうまく図るには、言語の表面的要素である語彙と文法だけでは足りない。少なくとも、英語変種の発音の違いや、相手の文化的背景に対するある程度の知識 (=メタ言語知識と呼ばれる、言語・文化についての知識) も必要になる。文部科学省もこのことを、

外国語の背景にある文化に対する理解を深め、他者に配慮しながら [...] コミュニケーションを図ろうとする態度を養う。(文部科学省, 2017: 156)

として、外国語科の目標の一つに挙げている。

実のところ、多くの教育実践者が、英語のみではなく、「複言語教育」のアプローチを採用し始めている。複言語教育は、特定言語の習得だけでなく言語そのものについて学ぶこと、つまり、(特定の言語習得をも支える) メタ言語知識の育成も重要視される。言語の観察・比較を通して、個々の言語機能に対して仮説を立て検証するのが一つの学習形態である。このような活動に複数の言語変種を取り入れることが多い。

複言語教育の観点から行った本研究の動機は極めて単純だった。複言語教育に貢献できる貴重な存在として、すでに外国語教室にいる外国語指導助手 (Assistant Language Teachers: ALTs) の存在を真に示すことであった。ALT はもともと英語圏のみから招聘されたが、小学校への外国語の導入に伴った需要向上により、現在は言語・文化的に多様な集団になっている。しかし、今までの ALT 研究はその豊富な言語・文化的知識をないがしろにしてきた。そこで、まず、ALT の言語文化的背景を外国語教育に活か

すのに、その背景を知る必要があると考え、「① ALT の使用できる言語を把握すること②複数言語能力を持つ ALT の指導経験と教育的信念を知ること」の二つの目的で 181 名の ALT にアンケート調査を行った。結果、6 割近くの ALT が複数言語を使用できることが判明した (図 1)。バイリンガル研究から、2 言語以上使用できる人が世界の過半数を占めていることが知られているため、調査結果は意外ではなかった。

しかし、これらの言語を教室で使用しているかという設問には、8 割近くが「全く使わない」か「ほとんど使わない」、「あまり使わない」

と回答している。また、インタビュー調査から、自ら英語以外の言語能力を隠す ALT もいることが判明した。これは、英語の口頭能力のみが重視されてきた結果と思われる。一方、他の回答者からは、

大事なのは、[複数の言語と文化を使用しながら] 言語を学ぶための方法を教えることだと思います。[...] 好奇心を育むべきで、言語習得のスキルを育むべきなのである。

というように、複言語教育の趣旨にも合った「メタ言語知識」の育成の観点からより積極的に複数言語・文化を教室活動に取り入れたいという声もあがっていた。本研究はあくまでも、ALT の複言語を活かす教育への第一歩であり、その実現方法を探るのが次の課題と思われる。

著者は現職で、教員養成課程の学生とともに、複言語教育と ALT との実践について色々な教育アプローチを考えている (例えば、大山他, 2022)。今後も、多様な背景を持つ話者とコミュニケーションが取れる生徒を育成すべく、次世代を担う将来の教員とともにより多くの言語・文化に開かれた教育実践へ貢献をしていきたい。

参考文献

大山万容、ピアース・ダニエル ロイ、北野ゆき、藤田恵美子 (2022) 「食育と外国語教育をつなぐ給食プロジェクト」『複言語・多言語教育研究』9, 17-32.

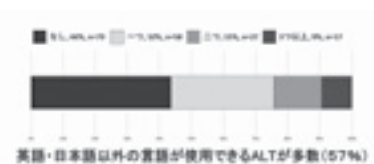


図 1 ALT の使用できる言語

第35回小説すばる新人賞

『楊花の歌』（青波杏）

山家 悠平

Yuhei YAMBE

人間・環境学研究所人文学連携研究者、女性史研究家、小説家

女性史と小説の会うところ

今回、第35回小説すばる新人賞を受賞した『楊花の歌』（青波杏名義）という小説は、日本軍占領下の福建省廈門で起こった日本人諜報員暗殺事件をモチーフとしている。その事件のことは、廈門の繁華街を歩いているときに現地の友人が教えてくれた。廈門での生活と執筆に至る経緯は『生き延びるための女性史——遊廓に響く〈声〉をたどって』（青土社、2023年）に書いたもので、そちらを見ていただくとして、ここでは女性史研究が作品の構想と具体的にどのようにかかわったのか、ということについて書いてみたい。

暗殺に成功し、台湾に逃げ延びてのちに自叙伝を書いた暗殺者のほかにも、現場の状況からもうひとり暗殺者がいたらしく友人からきいたとき、直感的にもうひとは女性なのではないか、と思った。わたしは遊廓の労働運動を研究してきたが、多くの女性たちは新聞に取り上げられる一瞬を除いて名前が記録されることがない。それは元娼妓に対する差別の問題と、そもそも家長制のなかで公的領域での活動を著しく制限されていた女性たちが公文書等の史料に痕跡を残すことがきわめて稀であるということにも起因している。自叙伝を書くという形で歴史の表舞台に出ることがかなわなかった（あるいは望まなかった）女性の暗殺者のイメージがぼんやりと浮かんできた。

その想像がさらに広がったのは、やはり友人から、暗殺にむけての情報収集の中心的な舞台として「蝴蝶ダンスホール」という名前をきいたときである。ダンスホールがあった思明南路周辺は当時の日本人街の中心地であり、そこでは日本語を話す女給たちが働いていたという。日本各地のカフェやダンスホール（ときには遊廓）を転々とするなかで、植民地支配の最前線に流れ着いた女性たちが働いていたのかもしれない。1926年に名古屋中村遊廓から逃走した松村喬子による小説『地獄の反逆者』（琥珀書房より近日初公刊予定）には、日本国内の遊廓で借金を踏み倒して台湾の遊廓で働いていた新高という娼妓が登場する。名前も残っていない暗殺者と、ダンスホールの女給というふたつのイメージが重なって本作の主人公リリーが生まれしてきた。

裕福な家庭に生まれたりリリーは高等女学校まで通うが大恐慌のあおりで家が没落し、松島遊廓に入る。そこで出会っ

た「先生」と呼ばれるエスペランティストが特高警察に捕まったことから、「先生」との約束をはたすべく、託された機密書類を持って遊廓を逃走し、最終的に中国に落ち延びて、そこで抗日スパイとして諜報活動を始める。廈門における暗殺事件の実行者としてヤンファという女性を紹介され、その女性とのかかわりのなかで植民地支配の現実や自分自身の過去とも出会い直していくというのが作品のあらすじである。

ずっと前から、遊廓を生きた女性たちがその後どのような道をたどったのかということが気になっていた。どんな仕事につき、どんなひとに出会い、どのように遊廓にいた、という過去と対峙していたのか。小説であるので、多分にも劇的な「その後」になったことは否めないが、作品のなかで、常にリリーの感情が連れ戻されるひとつの地点として遊廓はある。まわりに伝えることもできず、理解されることもないだろうという思いを抱きながら、それでもリリーはそこで出会った優しい女性たちの記憶もまた否定することなく生きる。そのリアリティには、前述の松村喬子や同時期に吉原遊廓から逃走した森光子といった当事者が描く娼妓たちの姿が反映されている。

美しい花々が香る亜熱帯の廈門。過去の過酷な経験で傷を負っていても、出会い、言葉を交わしあうことで再生していくことができる——そのような人間に対する静かな信頼のような思いが『楊花の歌』には込められている。それは、わたしが女性史でさまざまな女性たちの言葉にふれるなかで学んだことでもある。物語を通してその言葉がいまの時間に響いていけば研究者としても小説家としても、それほど幸せなことではない。



青波杏『楊花の歌』集英社（2023）

日本応用心理学会2021年度若手会員研究奨励賞

発達に支援が必要な子どもたちの ポジティブな経験の重要性

横井川 美佳

Mika YOKOIGAWA

人間・環境学研究科博士後期課程3年

日本学術振興会特別研究員 DC2 (2023年9月30日まで)

私は大学院での研究の傍ら、発達に支援が必要な子どもたちが通う児童発達支援事業所で勤務してきました。子どもたちは、たっぷり遊びを楽しむ中で、気持ちがあふれる貴重な瞬間を見せてくれます。そんな瞬間に出会うたびに、支援する私たち大人も「よし、次もがんばろう」というエネルギーをもらっています。

発達に支援が必要な子どもたちにどんな声かけをすればよいか、どんなアプローチが効果的かなど、さまざまな取り組みが試みられてきました。基礎的な研究の分野では、今まで「できなかったこと」を「できるように」といった願いをもとに、子どもたちの行動をよりよい方向に変えていく研究や、保護者や支援者の困り感の改善についての研究が多くなされています。そのような研究の成果を実践の中で生かしてきた一方で、子どもたちと日々関わっていると「何かができるようになったわけではないけど、変わってきたな」といった確かな手ごたえを感じることがあります。結果や尺度には表れない、子どもたちと関わる大人が、関わりの瞬間瞬間に感じるポジティブな経験が、子どもたちの発達を支えていくために重要なのではないかと考え、今回の研究に取り組みました。

本研究では、保護者と支援者を対象として質問紙調査を行いました。そのうち支援者を対象とした調査の結果を、2022年9月17日～18日に京都工芸繊維大学で開催された日本応用心理学会第88回大会で発表しました。保育施設・療育施設の職員139名の方々の協力を得て、「発達に支援が必要な子どもたちへの支援において、ポジティブな経験のエピソードを3つ教えてください」という問いに対して自由記述で回答してもらいました。支援者が実感してきた貴重なポジティブ経験の内容として、「子どもたちの成長や発達の実現」、「関わる大人自身の保育や療育の力の熟達化」、さらに「関わる大人と子どもたちとの温かな関係性の構築」、こうしたことの大切さを記述してくださっていました。子どもたち自身が「思い」や「願い」を率直に発信し、保育者・支援者がそのメッセージを受けとめて子ども理解を深めること、そしてそれが可能となるような温かな関係性を培っていくことが重要だと考えられます。

保護者の方々にも協力を得て、同じように「子育ての中でのポジティブな経験」を質問紙で伺ってみました。そ

の内容は、2023年8月26日～27日に亜細亜大学で開催された日本応用心理学会第89回大会でお伝えしてきました。自分自身の子育てが「うまくいっている」と感じることはあまりない、と答えた保護者の方々では、子どもたちの運動能力や気持ちの切り替えなど行動面での変化を自分にとっての「ポジティブな経験」として評価されており、その一方で、子育てが「うまくいっている」と実感しているの方々では、子どもが自分の気持ちや思いを言葉や振る舞いで表現してくれたことが、ポジティブなエピソードとして記述されていました。子育てが「うまくいっている」と実感できるためには、子どもたちの「できなかったこと」が「できるようになった」という行動変容を評価するのではなく、子どもたち自身が感じているうれしい気持ちや、「〇〇したい」という思いが表出され、それを保護者が自分自身の喜びとして受けとめられるようになることが重要となりそうです。

今回のアンケート調査では、「自分のふだんの支援を振り返ることができてよかった」、「日々悩みもあるが、ポジティブなこともたくさんあるんだなと感じた」といったポジティブな感想をいただきました。Yes - Noや数字で答えたりするだけでなく、自分自身の言葉で、ポジティブな経験を自由に振り返ること自体に大きな意味があるのかもしれない。

人間・環境学研究科は、多様な学問分野を意識的に越境し、「教養知」と「学際知」をしっかりと育てていくことによって、実社会の様々な困難な問題の解決に新たな視点から取り組んできました。私自身、基礎的な理論研究だけでなく保育・療育の現場で子どもたちを支える実践的な研究を志すことができました。これからも、基礎と応用をつなぐことができる研究をしていきたいと思えます。

第16回日本作業療法研究学会学術大会優秀発表賞

「記憶された文脈情報が文脈提示のない課題時の注意機能に与える影響」

水野 純平

Junpei MIZUNO

情報通信研究機構脳情報通信融合研究センター 研究員

我々は外界から膨大な量の情報を受け取っていますが、認知処理資源には限りがあるため、入力された情報をすべて処理することは不可能です。そのため我々は目標とする行動に関連する対象に焦点を当て、それ以外の対象を抑制することを行っています。このように情報を取捨選択し、必要なものを優先的に処理する認知過程のことを視覚的注意と呼びます。視覚的注意には、刺激の顕著性や課題要求の他、過去の経験が影響を与えることが知られています。この過去の経験が視覚的注意に影響を与える例として、「文脈手がかり効果」といわれる現象があります。実験参加者に妨害刺激の中から標的を探す視覚探索課題を行わせた際、実験参加者は標的と妨害刺激の空間的な位置（文脈）の連合を学習します。再び文脈のある配列が呈示されると、文脈を手がかりとして、標的位置へ注意が誘導され、探索が効率化することが知られています（Chun & Jiang, 1998）。

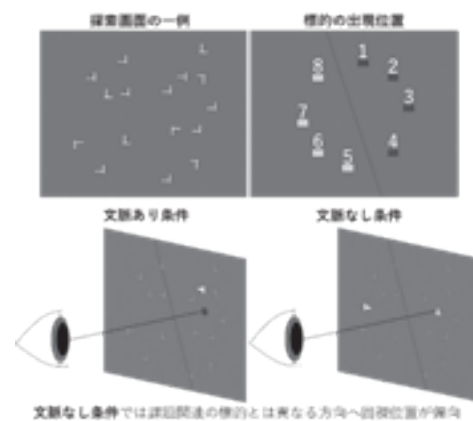
従来、この文脈手がかりによる注意の誘導は、リアクティブな制御の結果であると解釈されてきました。つまり、文脈を知覚してはじめて注意が誘導される受動的な視覚制御であるといわれています。加えて、文脈がない配列を見た時や文脈が呈示される前には注意の誘導は起きないことが暗黙の裡に仮定されています。しかし、我々が視覚探索を行う際に、リアクティブな制御のみが関与しているのでしょうか。課題達成のためには、課題要求に適した行動をたえず調整するプロアクティブな制御が必要です。そこで私の研究では、この文脈手がかり効果における注意の誘導にプロアクティブな視覚制御が関与するかを、眼球運動を解析することによって検討しました。

実験では、50 名の実験参加者に 1 個の標的（90, 270° に傾いた T の文字）と 15 個の妨害刺激（0, 90, 180, 270° に傾いた L の文字）から構成された視覚探索課題を行わせました。実験参加者には、標的を見つけ素早く正確に標的をクリックするように指示しました。課題は 2 つの条件が設定され、配列が繰り返される条件（文脈あり条件）では、ディスプレイ上の右側の 4 つの位置のどれか一つに標的が出現した時に、毎試行同じ妨害刺激の配列を呈示します。実験参加者はこの妨害刺激の配列と標的位置の連合関係を学習します。一方、配列が毎試行ランダムな条件（文脈なし条件）では、ディスプレイの左側の 4 つの位置のどれか一つに標的が出現した時に、毎試行ランダムな妨害刺激の

配列が提示されました。したがって実験参加者は文脈なし条件では連合関係を学習することは困難になります。各箇所に標的が出現する確率は均一に設定されました。

実験参加者は、文脈あり条件において文脈なし条件と比較し、反応時間が有意に低下し、探索の効率化を示しました。これは、文脈手がかり効果を再現したことを意味します。眼球運動の結果を解析すると、従来、注意の誘導は起きないとされてきた文脈なし条件において、課題提示後の最初の固視位置が文脈と連合した標的方向へ偏向していました。また探索画面が呈示される前から固視位置が文脈と連合した標的方向へ偏向していました。実験参加者は探索画面が呈示される前に文脈があるかどうかを知ることができません。したがって、これらの結果は、文脈を知覚する前から積極的に文脈と連合した標的側へ注意を向けていたことを示唆しています。

文脈なし条件の標的は文脈あり条件の標的とは探索画面を縦に 2 分する線を跨ぎ対側に位置したため、文脈なし条件時に文脈と連合した標的方向へ注意を向けることは非適応的です。それにもかからず、我々は文脈がない場合でも、文脈の記憶にもとづいて積極的に目を動かしていることを示唆しています。本研究は文脈手がかりの実験で解釈されてきた従来の理論的枠組みにプロアクティブな注意制御の関与を示唆する新たな洞察を提供します。



第62回 ドイツ語学文学振興会奨励賞

ドミトリー・メレシコフスキーを読むトーマス・マン ——「第三の国」における「エロスの禁欲」の位相をめぐって

鈴木 啓峻

Keishun SUZUKI

大阪大学人文学研究科言語文化学専攻講師

「第三の国」と聞くと、多くの人々はナチスの「第三帝国」を思い出すかもしれない。確かにナチス第三帝国はよく知られた「第三の国」であるが、この言葉自体はそれ以前から、キリスト教世界の終末論思想の中で長い歴史を持つ。それは12世紀イタリアの修道僧フィオーレのヨアキムが、歴史を三つの発展段階として捉える中で、その最終段階を表す言葉として用いたことに始まる。ヨハネ黙示録を現実の歴史の中に落とし込むヨアキム主義の思想は、ヨーロッパ史上の様々な危機において、終末への不安と救済への希望を込めて度々呼び出されてきた。1920年代におけるドイツの小説家トーマス・マンによる、ロシアの終末論思想家ドミトリー・メレシコフスキー受容の次第も、以上のような「第三の国」言説のひとつのヴァリエーションである。

「第三の国」における「三」という数字は、先に述べた通り、歴史過程における「第三段階」という意味に加えて、相対立するふたつの要素を第三項が止揚するという弁証法的なニュアンスを持つ。マンが受容したメレシコフスキーにおいて重要になるのは、むしろ後者の方である。ではそこで対立する二つの項とは何か。それは少し奇異に聞こえるかもしれないが、「性愛／生殖」と「禁欲」の対立である。この対立が重要なのは、これらが黙示録的な世界観構造における「人類の終焉」と「永遠」のイメージに深く関わっているからである。すなわち、現世において寿命から逃れられない人類は、生殖により子孫をもうけることで有限性を乗り越え存続することができている。しかし、終末の到来の後「神の国」が実現すれば、もはや人類は子孫をつくる必要がなくなり、性愛と生殖から解放された「個」が「不死」を享受する段階に至る。他方、キリスト教世界の伝統では、「禁欲」——「神との結婚」により肉欲を断つことで宗教的な救済を求める慣行——が聖職者によって行われて来たが、メレシコフスキーは「聖と俗」を分かちこの対立を独自の方法で止揚する「エロスの禁欲」——性愛のエネルギーの高揚を認めながら性交は否定する——によって、不死の世界が到来すると説いた。

現代の目から見ると、これはかなり荒唐無稽な幻想のように思われるであろう。しかし彼らの生きたのが、「結婚」（「生殖」の社会的器）を基底とする「市民家族」とその集合体である「市民社会」が激しい動揺に見舞われた時代で

あったことを考え合わせれば、それを共同体の危機意識の反映と見ることができる。市民家族の「没落」を描いたマンの処女長篇『ブッデンブローク家の人々』も、「私は先祖の中に生き、やがては子孫の中に生き続けるであろう」という家族主義的な確信の喪失と、同性愛的エロスで結ばれた芸術家共同体の様相を描く作品であった。マンにおいては、『ヴェニスに死す』などに代表される通り「市民」と「芸術家」という対立が「異性愛」と「同性愛」の対立と重なり、これら二つの間で引き裂かれるというテーマが繰り返し現れる。マン自身「同性愛」というタブーへの憧憬を胸に抱きながら、実生活では市民的領域にとどまり続け、そのことから生まれる禁欲的なエネルギーを芸術創造に活かした。従って、敗戦によりドイツが未曾有の危機を迎えたヴァイマル時代前期において、思想的革新と新しい共同体の模索に乗り出したマンが、メレシコフスキーの終末論思想に接近したことは驚くにあたらない。両者ともに「デカダンス」の時代を生き、芸術と政治と宗教が入り乱れる混沌の中から、「新しい人間」の到来を幻視しようとしたからである。もっとも、メレシコフスキーの思想が神秘性に極めて深く浸されていたのに対し、マンの文学があくまで「芸術」と「人間性」の領域に留まろうとしたという差異は強調しなくてはならない。

さて、我々が生きる時代も「家族」パラダイムの失効が叫ばれて久しい。「性愛」という極めてプライベートな自己決定に委ねられるべき事柄と、人口問題など得てして「共同体」的文脈で語られる「生殖」の問題が様々な局面で緊張関係に持ち込まれるのは、「個」と「共同体」の緊張を生み出す不安の性格が、百年前とあまり変わらないことの証左なのかもしれない。

日本文化人類学会研究奨励賞

「神仏の肖像—チベット・タンカの制作と崇拝について」

張 詩雋

Zhang, Shijun

北京大学社会学部 PD 研究員

2022年2月28日、朝の8時ごろ、一本の電話が朝寝坊をした私のところにかかってきた。相手は当時神戸大学の教授を務め、アポリジニ社会を研究する人類学者の窪田幸子先生だった。ちょうど先日日本文化人類学会の次世代育成セミナーに申し込み、窪田先生に論文の草稿を提出したところだった。この電話は改訂についての話かと想像していたところ、「今年、日本文化人類学会の研究奨励賞を貴方に授与することを決めました」と聞いた。思わず「へっ」という言葉が口から出た。「本当ですか？」と繰り返して確認した。目がまだ完全に覚めていなくて頭がぼんやりとしていた私は、「ありがとうございます！」としか言えなかった。電話を切ってしばらく気持ちは昂っていた。まだ夢か現実かがかわからないまま、夢のような嬉しいお知らせを聞いた。

日本文化人類学会の研究奨励賞は、日本国内の若手人類学者を対象とし、年に一度、1名に与えられる。人類学界以外の人にとってはあまり知られていないかもしれないが、2011年から京大で人類学を学び始めた私にとっては、親しみもあり重みもある、光栄な賞だ。奨励賞は私の受賞年まで16回授与されている。歴代の受賞者のなかには、現在京都大学の石井美保先生や岡山大学の松村圭一郎先生、また金沢大学の田村うらら先生など、人環出身の先輩たちの名もある。毎年、日本文化人類学会の研究大会の一環として授賞式は行われる。若手に研究奨励賞を与えてから、文化人類学の発展に著しく貢献した先生に学会賞を与える。まるでリレーのような授賞式は、日本文化人類学界の伝統を感じさせる。

受賞論文の「神仏の肖像—チベット・タンカの制作と崇拝について」は『文化人類学』(85巻4号)に掲載され、英語版はWorld Council of Anthropological Associationsのオンライン誌*Déjà lu*にでも見られる。

チベット・タンカはチベット文化圏で広く制作される宗教絵画だ。2012年、チベット自治区の首都、ラサ市で行われた予備調査で私ははじめてタンカのことを知った。それから徐々にタンカの研究をし始め、受賞の年までちょうど10年となった。この論文以外、*Travelling Thangka Painter* (2022年*Japanese Review of Cultural Anthropology* 22巻1号掲載)や「チベット・タンカの変貌」(2018年『コンタクト・ゾーン』10号掲載)なども出版した。2022年に提出した博士論文『宗教美術の身体美学』もタンカについての民族誌だった。

タンカ研究に取り組んできた時間は短くないとはいえ、多数の優れた若手研究者から私の研究が受賞したことに驚喜を覚えた。学会のホームページに掲載した受賞理由によれば、私の研究が評価されたのは、次の3点の理由がある。

まず、民族誌的な記述と哲学的な発想の接合。拙作の論文はタンカを「神仏の肖像」として捉える。美学や哲学において、肖像は主体の隠喩として解釈されてきたが、タンカは神仏という不在の存在の肖像であることから、作成という行為が模倣と同一化の実践となっていくという議論を展開した。これはまた民族誌的記述によって裏打ちされている。

つぎに、日常生活への視点。宗教美術の視点でタンカを考察する先行研究は、タンカ作成における様式美(可量性)の重要性をしばしば指摘する。ただ、現地調査を重んじる人類学は、むしろタンカ作成という芸術実践の背景となる日常生活に注目する傾向にある。わたしの研究は、マリノフスキの概念を借りて、その「不可量」の日常がいかにしてタンカの美と魅力を支えるかを明らかにしようとしていた。

さらに人類学的な理論への関心。人類学的な理論はよく難しいと言われる。わたしの研究で引用するイギリスの人類学者、アルフレッド・ジェルもそうだった。ただ、難しくても理論と対話する試みは大事だったかもしれない。受賞理由に「ジェルのエージェンシー論を援用しながら…(それをさらに深め前進させるものとして評価できる)」とあるのを見たとき、英日、英中、日中辞書を引きながら*Art and Agency* (Gell 1998)を読んだ自分が報われたと感じた。

以上がわたしの受賞についてのささやかな感想である。最後にこの場を借りて改めて自分の研究を支えて下さった田中雅一先生、岩谷彩子先生、石井美保先生、風間計博先生および京大人環のみなさんに感謝を申し上げたい。ありがとうございました。

IPHS Prizes and Awards 2022: East Asia Planning History Prize

The disposition of building evacuation sites and war-damage reconstruction in Sendai: The projects and the relationships among public entities for the conversion of evacuation sites into urban planning sites (*JAPAN ARCHITECTURAL REVIEW* 4(1), 2021)

齋藤 駿介

Shunsuke SAITO

人間・環境学研究科博士後期課程 3 年／東急株式会社

近代日本の都市は地震・津波・水害・大火などさまざまな災害による被害を経験するとともに、復興の過程でその姿を大きく変貌させてきました。中でも、第 2 次世界大戦中の戦災は同時期に全国的かつ壊滅的な被害を受けたうえに、戦後の復興都市計画によって都市基盤の整備が大々的に進行したという二重の意味で、現在に至る近現代日本の都市空間に多大な影響を及ぼしたといえます。

ここで、「都市の戦災被害」と聞くとどのような光景を思い浮かべるでしょうか？多くの方は東京大空襲をはじめとした焼夷弾による都市空襲や広島・長崎への原爆投下などの米軍都市空襲によって焼け野原とされた都市を想起するのではないのでしょうか。

しかし、戦時期日本における都市破壊は米軍空襲だけではありません。当時の日本で都市計画を担当していた内務省や空襲対策を担当していた防空総本部は、都市空襲による火災被害の軽減を目的に密集市街地の建築物を強制的に撤去して空地を造成する建物疎開を実施しました。建物疎開は都市空襲による甚大な被害を前に関心を寄せられることは少ないですが、全国の 279～281 都市で約 61 万戸もの建物が破壊されたことを踏まえると看過できない出来事です。さらに、疎開跡地は戦災復興の際に街路や広場などに転用され、現代の都市空間にも影響を及ぼし続けています（京都の中心市街地で例外的に広幅員である御池通・五条通・堀川通は疎開跡地を戦後に転用して整備された）。

以上の都市史・都市計画史上の重要性を踏まえて、本論文では宮城県仙台市を対象として戦時期に実施された建物疎開と戦後復興期の都市計画との関係を考察しました。先行研究では疎開跡地の都市計画転用の過程や事業化に至らなかった計画の有無などは明らかにされていませんでした。その背景には戦後の公文書の焼却処分や散逸の影響がありましたが、本論文では公文書や議会議事録、新聞などの網羅的な史料調査によって、疎開跡地の都市計画用地への転用及び計画段階での頓挫に至る過程を解明して、戦時期から戦後復興期日本における都市空間変容の特徴に関して以下の 3 点を指摘しました。

第 1 に、疎開跡地の都市計画転用を企図していたのは内務省だけではなくたことです。従来は都市計画・建物疎開を所管していた内務省が戦災復興都市計画の推進のため

に転用を計画したとされていましたが、鉄道用地の確保や防火の観点から運輸省や警視庁消防部も疎開跡地の転用を目論んでおり、実際に仙台では鉄道沿線の街路への転用計画として影響を及ぼしていました。

第 2 に、疎開跡地の都市計画転用には複数の事業が活用され、事業や地域の性格によって実現の可否が左右されていたことです。仙台では空襲焼失区域内では戦災復興都市計画事業の一環として、郊外では疎開跡地処理連絡街路事業として計画されましたが、事業化に至ったのは後者のみでした。これには、事業費の多寡や地域的な性格の違い、前者は中心市街地の事業進展に影響される一方で後者は単一事業であり周辺状況に影響されないという事業環境・性格の違いなどが影響を及ぼしたと考えられます。

第 3 に、戦前期から戦後復興期の各計画の間に一致がみられたことです。筆者は本論文に先立つ研究で、仙台の建物疎開区域は戦前都市計画街路のプランと一致がみられることを指摘しましたが、この一致は戦災復興都市計画の街路にも確認できました。このことから事業化が困難であった戦前都市計画街路のプランは建物疎開区域指定を通して、戦災復興にまで引き継がれたという計画の連続性を窺うことができます。

本研究では日本に限った議論となっていますが、今後は海外における都市防空と都市計画の関係や戦後復興の展開も視野に入れた研究を進めたいと考えています。



図 仙台における建物疎開跡地の街路転用

触媒学会 第41回光がかかわる触媒化学シンポジウム優秀ポスター賞

Ni@SiO₂ コアシェル触媒を用いた光熱変換型 メタンドライリフォーミング

椿本 純也

Junya TSUBAKIMOTO

村田製作所原料製造部

私は 2022 年度に大学院人間・環境学研究科の修士課程を修了し、現在は村田製作所で生産プロセスの開発に関わる仕事に従事しています。このたびは総人・人環フォーラムへの寄稿の機会をいただき御礼申し上げます。ここでは私が大学院の修士課程在籍時に行ってきた研究について紹介いたします。

産業革命以来、全世界での CO₂ の排出量は増加傾向にあります。現在、CO₂ は主要な温室効果ガスであるという認識が広がり、その削減が求められる一方で、CO₂ は豊富に存在する炭素源であるため、炭素を含む多くの化学品の生産に利用できる可能性を秘めています。私は大学院で、太陽光エネルギーを用いて二酸化炭素を資源化するための触媒反応系およびそのための触媒材料に関する研究を行ってきました。具体的には二酸化炭素とメタンから、産業用に有用な合成ガス（一酸化炭素と水素の混合ガス）を光のエネルギーを用いて生成する、メタンドライリフォーミング反応（DRM 反応、図）を研究対象としていました。得られる合成ガスは、炭化水素などの燃料やメタノールの生産のための原料として利用することが可能です。

太陽光を集光して高強度の光照射下で行う触媒システムの開発では、触媒反応器の設計や触媒材料自体の性能など様々な要因で性能が決定されます。今回の研究では、石英ガラス製のシンプルな触媒反応器に、太陽光に似た波長分布をもつキセノンランプの光を照射することで DRM 反応の触媒性能の試験を行っています。私の研究では、高い活性と安定性を有する触媒材料の開発を実施しました。通常、DRM 反応は、ロジウム、ルテニウム、ニッケルなどの金属ナノ粒子を担体と呼ばれる金属酸化物微粒子上に担持した材料が用いられますが、今回の研究では、比較的成本が低いニッケルを活性金属として選定しました。ニッケルを用いるメリットは上述のとおりですが、貴金属ナノ粒子と比較してニッケルナノ粒子は高温で凝集して粗大化したり、コーキングと呼ばれる触媒表面で炭素（C）が析出したりしやすい元素として知られています。凝集やコーキングは、触媒反応を進行させる金属ナノ粒子の表面積を小さくしてしまうため主要な活性低下の因子です。

この課題を克服するために、私は表面を酸化ケイ素で被覆したニッケルナノ粒子触媒（いわゆるコアシェル粒子触媒）の合成を検討しました。こういったコアシェル粒子の

調製の場合、一旦ニッケルナノ粒子を調製して、そのあとで酸化ケイ素のシェルを合成する 2 段階の方法が使われる場合が多いです。一方で、本研究では、担体となる酸化ケイ素とニッケル錯体をアンモニア水溶液中で加熱しながら混ぜることでニッケルとケイ素の化合物を合成しそれを熱分解することにより、1 段階で簡便にコアシェル触媒を合成できる手法を用いました。この方法では、最終的に数 nm 程度のニッケル粒子が酸化ケイ素粒子表面に担持され、且つその表面が酸化ケイ素でコーティングされた状態になります。光照射下での活性試験を行った結果、酸化ケイ素で被覆されたニッケルナノ粒子触媒は、典型的な金属ナノ粒子触媒の調製法である含浸法で調製したものよりも数倍高い触媒活性を示し、さらに酸化ケイ素によって炭素析出が抑制されていることがわかりました。

また、触媒中のニッケルの含有量は活性や安定性に影響を与えることが予想されますが、今回の研究では触媒材料自体の熱伝導率も変化させ温度分布にも影響を与えると考えました。そこで、ニッケルの含有量の影響を系統的に調査しました。結果的にニッケルの含有量は光照射下での温度や触媒性能に様々な要因で影響していることはわかりましたが、その中でも、特に触媒表面の反応温度を上げることが触媒活性を向上させるために重要であることを突き止めました。この触媒表面上の温度は、光吸収による発熱と熱伝導などによる放熱のバランスで決定されると考えられますが、今回の研究では触媒材料自体の熱伝導率を低くして光照射部位を選択的に昇温した方が高い活性が得られるという結果が得られました。ここで得られた知見は高性能な触媒反応システムの設計に貢献するものだと考えています。

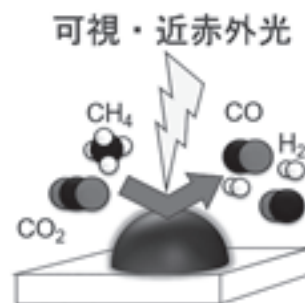


図 光熱変換型 DRM 反応のイメージ

近畿化学協会有機金属部会 第68回有機金属化学討論会ポスター賞

イリジウム錯体触媒を用いたアルコール類のメチルアミノ化ならびにジメチルアミノ化反応

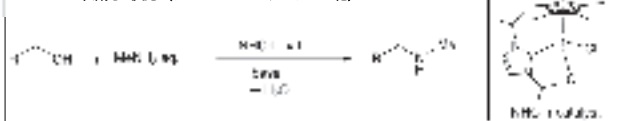
吉田 七瀬

Nanase YOSHIDA

化学メーカー勤務

私は、「安価かつ入手容易なアルコールを原料に用いて、経済性と環境調和性に優れた *N*-メチルアミン類合成法を開発する」という研究をおこなった (Scheme 1)。言い換えると、私の研究は、*N*-メチルアミン類という重要な物質を、手に入りやすく安い原料から、環境に優しい方法で作るということである。化学産業において、原料が安くて手に入りやすいことや、製造プロセスの環境への負荷を減らすことは、大きな意義をもつ。

Scheme 1. 本研究の反応 (アルコールのメチルアミノ化)

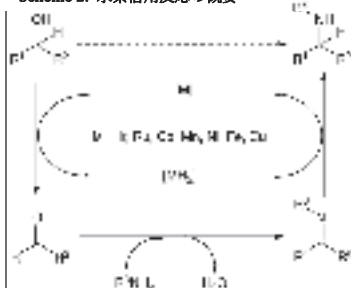


N-メチル部位を有するアミン誘導体は、天然物、生理活性物質によく見出される構造であり、材料や医薬、農薬等、様々な分野で応用されている重要な化合物群である。

従来の *N*-メチルアミン類の合成法は、還元剤等の環境負荷の高い試薬が使われ、有毒な化合物を副生する等、環境調和性の観点から改善すべき点がある。

近年、遷移金属触媒を用いた水素借用反応による第二級・三級アミンの合成が、環境調和性に優れた反応として注目を集めている。反応機構は次のように考えられる (Scheme 2)。まず、アルコールの脱水素化反応によるカルボニル化合物の生成、続いて、アミンとの縮合反応によるイミンの生成、最後にイミンの還元という3段階で反応が進行する。このとき、金属触媒は、アルコールから水素を借りて、それをイミンへと返すという役割を担っているため、水素借用反応と呼ばれる。副生成物は無害な水のみであることから、環境調和性および経済性に優れたプロセスといえる。

Scheme 2. 水素借用反応の概要



このような環境調和型の水素借用反応による *N*-メチルアミン類の合成法として、メタノールを用いた第一級アミ

ンのメチル化反応が報告されている。しかし、*N,N*-ジメチルアミン類が副生するため選択性が低いことや、比較的高価な第一級アミンを出発物質に用いているというコストの高さが課題点として挙げられる。

そこで私は、第一級アミンのメチル化の課題点である選択性とコストの高さを解決するために、「アルコールのメチルアミノ化反応による *N*-メチルアミン類の合成」を目指した (Scheme 1)。この反応では、*N,N*-ジメチルアミン類が副生せず、高選択的に目的物が得られ、さらに、比較的安価なアルコールを出発物質に用いていることから、低コスト化が期待できる。また、有機溶媒を用いず、よりクリーンな溶媒である水中での反応にチャレンジした。このように、合成価値の高い *N*-メチルアミン類を、環境調和性に優れた方法で、高選択的かつ安価に得ることは、有機合成プロセスのクリーン化、低コスト化に繋がり、大きな意義のある研究と言える。

まず、私は反応条件の最適化を行った。様々な触媒、塩基、反応温度や反応時間を試し、最適な反応条件を定めた。今回、Scheme 1. に示したイリジウム錯体が触媒として適していた理由は、以下のように考えられる。錯体が有する含窒素複素環カルベン (NHC) 配位子 (構造左側部分) が、中心金属への電子供与能が高いことが知られており、今回の反応においてはイミンの還元ステップを進めるために有効であったと考えられる。

次に、私は定めた最適な反応条件をもとに様々な構造をもつアルコールを用いて、*N*-メチルアミン類の合成を行った。結果、電子求引基・電子供与基を有する様々なベンジルアルコールや、脂肪族のアルコールから対応する *N*-メチルアミン類を合成することができた。

本研究では、安価なアルコールから合成価値の高い *N*-メチルアミン類を高選択的に得ることができた。また、環境負荷の高い有機溶媒や還元剤を用いることなく、水中での触媒反応に成功した。従来の *N*-メチルアミン類合成法と比較して、合成プロセスのグリーン化ならびに低コスト化を達成したといえる。

フラーレン・ナノチューブ・グラフェン学会

The 63rd Fullerenes-Nanotubes-Graphene General Symposium Young Scientist Poster Award

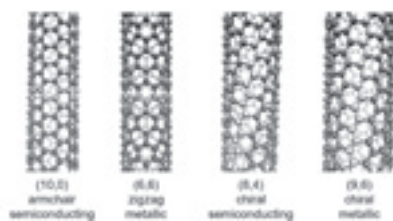
Interlocking of SWNTs with Metal-Tethered Tetragonal Nanobrackets to Enrich a Few Hundredths of Nanometer Range in Their Diameters

Guoqing CHENG

程 国慶

Graduate School of Human and Environmental Studies, D3

Carbon nanotubes (CNTs) are cylindrical structures composed of carbon atoms arranged in a hexagonal lattice, akin to graphene. When CNTs consist of just a single layer, they are referred to as single-walled carbon nanotubes (SWNTs). The structure of SWNTs is conventionally described using a roll-up index denoted as (n,m) . This index (n,m) functions as a vector, indicating the relative positioning of two overlapping carbon atoms when a graphene sheet is rolled into the form of a SWNT. Figure 1 illustrates some common (n,m) -SWNTs. The physical and chemical properties of SWNTs are intrinsically linked to their unique structures. However, during the synthesis of SWNTs, various structural configurations are created. This presents a significant challenge when it comes to processing SWNTs with consistent properties. Therefore, further research is essential to devise a cost-effective and straightforward method for the separation of SWNTs based on their structure.

Figure 1. (n,m) -SWNTs structural variations.

In our previous studies, we employed a selective solubilization method to isolate CNTs using host-guest complexation with molecules referred to as “nanotweezers” and “nanocalipers.” Nanotweezers, resembling conventional tweezers, consist of two arms set at an angle designed to capture SWNTs with specific diameters. The resulting complex structure can be effectively solubilized in organic solvents such as methanol. On the other hand, nanocalipers operate on the same principles but feature a deeper cavity, enabling a more secure binding with the SWNTs. The primary objective of this study was to tailor the molecular shape to precisely match the desired CNTs.

In this work, we developed a rigid cyclic molecule that selectively interlocks SWNTs with a narrow diameter range, inspired by the famous molecular machine “rotaxane.” A novel host molecule named tetragonal “M-nanobrackets,” was developed, synthesized, and used for separating SWNTs. It consisted of a pair of dipyrin nanocalipers corresponding to two square brackets “[” and “]” tethered by two metals (M). Due to mechanical interlocking, the cyclic molecule does not detach from the SWNTs as long as the metal-dipyrin linkage is stable. A facile three-step process, including one-pot Suzuki coupling, resulted in M-nanobrackets on a gram scale (M = Cu) from carbazole derivatives. SWNTs were extracted in the presence of a square nanobacket and copper(II) acetylacetonate. *In situ* formation of tetragonal M-nanobrackets was observed. M-nanobrackets were found to interlock the SWNTs and disperse them in 2-propanol. Interlocking was confirmed by transmission electron microscopy (TEM) observation and Raman spectroscopy. The straightforward unlocking process allows for the accurate assessment of diameter selectivity in SWNTs using Raman, photoluminescence, and absorption spectroscopies. Our observations have revealed a diameter enrichment in only three specific types of SWNTs, namely (7,6), (9,4), and (8,5), within the narrow diameter range of 0.02 nm, spanning from 0.90 nm to 0.92 nm, among a total of 20 SWNT types with diameters ranging from 0.76 nm to 1.17 nm. Figure 2 illustrates the procedure and the corresponding results.

This work was published as a research article in *ACS Nano*, 16(8), 12500-12510 (2022).

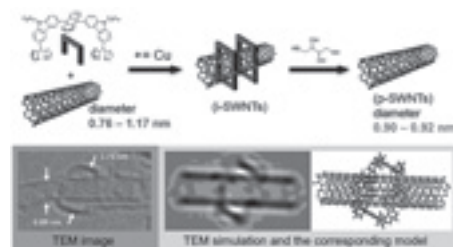


Figure 2. SWNT extraction with Cu-nanobrackets and the TEM observation of the interlocked structure.

The Electrochemical Society The 242nd ECS Meeting PEFC&E22 Student Poster Awards, Third place

***Operando* X-ray Absorption Spectroscopic Study on Influence of Specific Adsorption of Sulfo Group in Perfluorosulfonic Acid Ionomer towards ORR Activity of Pt/C Catalyst**

曹 偉傑

Weijie CAO

人間・環境学研究所 環境学専攻 博士後期課程 2 年

現在、使用されているエネルギーの多くを石炭、石油、天然ガスといった再生不可能な資源が占めており、エネルギー資源と環境に大きな悪影響を及ぼしている。例えば、化石燃料の過剰消費は、エネルギー資源の枯渇に繋がるだけでなく、温室効果ガスの増加といった環境に悪影響を与えることが知られている。世界中の研究者がエネルギー危機問題を解決するために再生不可能な資源の消費によって引き起こされる気温や気象の長期的な変化に注目している。このように、従来の化石燃料に代わる持続可能なクリーンエネルギー資源の開発は極めて重要となる。

水素は最も高い重量エネルギー密度を持つ点や炭素の排出がゼロになるといった利点があることから、現在のエネルギー源に代わる持続的な燃料として期待されている。燃料電池はクリーンエネルギー技術として、水素と酸素を化学反応により結合させ、水と電気エネルギーを得ることが可能である。アノードでは水素が触媒によってイオンと電子に分解され、プロトン交換膜を通じてカソード側に輸送され、そこで酸素と結合することにより水が生成され、電子が外部回路を流れることにより電流を得ることができる。さらに、燃料電池のエネルギー変換効率は理論上 80% 以上であり、他のエネルギー源を大きく上回ることが知られている。

21 世紀以降ではアメリカや日本、韓国などが世界の燃料電池業界のリーダーとして燃料電池技術の開発を推し進めている。燃料電池は今日では定置用電源や車載用電源として発売されており、自立的な普及に向けて期待されている。現状、燃料電池は使用温度や電解質の種類などによって様々なカテゴリーに分類される。この中でもプロトン交換膜型燃料電池 (PEMFC: PEFC とも呼ばれる) は、作動温度が比較的低いことから機動性に優れており、車載用電源として注目されている。現在すでにトヨタ自動車の MIRAI や本田技研工業の CLARITY、現代自動車の NEXO などが実用化され、市場に出ている。

しかし PEFC は、触媒に高価な白金 (Pt) を使うことやセル内の温度・水分の厳しい管理が求められること、また、一般的な内燃機関自動車に搭載されているシステムに比べてコストが高いなど、自立的な普及の達成に向けて乗り越えなければならない障壁が多く存在する。特に PEFC

の Pt 使用量は、現在の内燃機関自動車に使用されている排気ガス浄化触媒の使用量程度まで少なくするべきであり、Pt 系触媒の性能を向上させる必要がある。

触媒の問題だけでなく、高分子電解質膜の研究も PEFC にとって重要である。現在、最も広く使われている電解質膜はパーフルオロスルホン酸系高分子電解質膜であり、DuPont 社の Nafion[®] が代表される。Nafion の最大の特徴は耐久性と化学的安定性により、他の電解質膜より動作に強いといった点にある。パーフルオロスルホン酸膜ではプロトンが移動できる一方で電子は絶縁するため、カソードとアノードを分離でき、短絡を防ぐことができる。しかし、側鎖からのスルホ基アニオンの吸着が Pt の活性部位をブロックすることが多くの報告で示されている。これまでの研究では触媒表面において Pt 酸化物の形成やアイオノマーの吸着により活性点が減少し、酸素還元反応 (ORR) 活性が低下すると考えられてきたが、吸着種の定量的な評価が困難であり、まだ詳細な理解には至っていない。

本研究では、ORR 活性電位 (0.90 V vs. RHE) に等しい高電位領域での特異的吸着を実現するために、オペランド X 線吸収分光法 (XAS) 測定を行い、任意の電位でのアニオン特異的吸着によって誘起される Pt 原子の電子状態および局所構造変化を観察した。オペランド XAS 測定は、電子状態、Pt 表面の詳細な構造、Pt-Pt 結合距離の圧縮/伸長を誘起する歪みを観察するための信頼性の高い方法である。本研究では、正確な XAS スペクトルと ORR 活性を確保するため、電気化学測定とまったく同じ担持量で Pt L 吸収端の XAS 測定を行った。そして、電気化学測定と XAS 分析を利用して、Pt 触媒上の酸化物種ならびにアイオノマーの特異吸着が ORR 活性に与える影響を定量的に評価することに成功した。

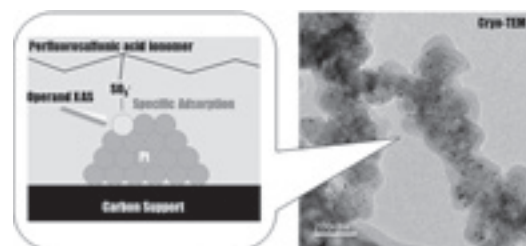


図 1. アイオノマー特異吸着と XAS 測定

Osaka-Kansai International Symposium on Catalysis 2022 Outstanding Research Award

Controllable Product Selectivity by Light Position in Photothermal Steam Reforming of Methane

西野 優冴

Yuko NISHINO

人間・環境学研究科 環境学専攻修士課程

受賞対象になった上記題目の内容について、受賞時から進展した内容も織り交ぜて解説させていただきます。

「水素社会」という言葉は現在、多くの方がご存じかと思えます。現在私たちが使っている化石燃料の枯渇や使用時に二酸化炭素を排出することが国際的に問題視されています。また、日本は天然資源に乏しいため国際情勢に燃料価格が大きく左右されてしまいます。(この20年間でもガソリン価格は80円近く変動しています) このようにエネルギー問題は私たちの生活に直結する重要な課題です。豊かな暮らしを継続するために、そして地球環境のためにも、化石燃料への依存度が低い次世代エネルギーをどのように作り、貯蔵し、使用していくのか、多くの人々が模索しています。その鍵となる再生可能エネルギーには風力や水力、そして太陽光などが挙げられますが、私はこの太陽光を使って水素をつくることに注目して研究を行っています。「水素社会」という言葉もあるように、使用時に二酸化炭素を排出しないという点で水素も次世代のエネルギーとして非常に注目されています。最近ではトヨタ自動車が水素を燃料とした車で24時間耐久レースを完走したというニュースが話題を集めていました。ガソリンや電気だけではなく水素を使って車が走ることができるのです。

現在、水素は主に水蒸気改質反応というメタンと水蒸気を反応物として製造されています。この反応は吸熱反応のため、反応の促進には600度以上の高温が必要になります。現在の方法では、化石燃料を燃やすことで発生する燃焼熱が使われているのですが、この過程で二酸化炭素が排出されることが課題となっています。私は、集光した太陽光を金属触媒に当てることで熱に変え、その熱で上記の反応を進行させるという形で原料のメタンの利用効率の向上や二酸化炭素の排出量の低減を可能にする触媒システムに関する研究を行っています。この反応ではメタンと水蒸気から二酸化炭素、一酸化炭素そして水素が生成しますが、供給したメタンがどのくらい反応したかという指標(メタン転化率)と生成物のうち目的のものをどのくらい得られたかという指標(本研究では二酸化炭素の選択率)を使って、双方ともに100%を目指しています。この二つの指標は一方が増加するともう一方が減少するため、ともに100%を達成するのは非常に困難です。また、現在の水素製造法で

は少なくとも10%の一酸化炭素が生成するため、新しい手法を用いることでこれをゼロに、すなわち二酸化炭素選択率100%を達成したいと考えています。その手段として、集光した光を当てることによって触媒上に生まれる温度勾配に注目しました。集光した光を物質に当てた状態をイメージしていただくと、中心部分は高温で中心から離れるにつれ低温となることが想像できるかと思います。本研究において私は光照射下で触媒層内に大きな温度差が存在すること、そしてこのような温度勾配が存在しない均一な温度条件では達成不可能な高いメタン転化率と二酸化炭素選択率の両立が可能であることを明らかにしました。具体的には、反応速度は温度に依存しますが、温度勾配が存在する場合は低温でも進行する反応や高温でないと進行しない反応など複数の反応が起こります。これを利用して、高温領域で進行する水蒸気改質反応(メタンと水蒸気から水素と一酸化炭素が生成)と低温領域で進行する水性ガスシフト反応(一酸化炭素と水蒸気から二酸化炭素と水素が生成)を逐次的に起こすことで、均一な温度の場合では実現できないメタン転化と二酸化炭素選択率を得ることができました。

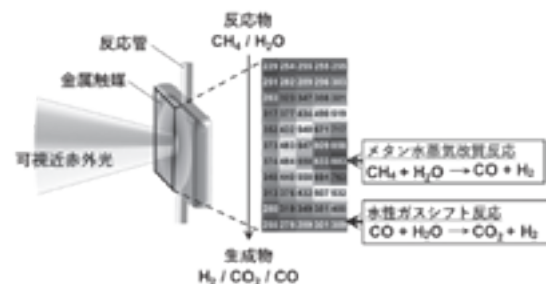


図1. 光照射による触媒上の温度分布

日本植物分類学会第21回大会 口頭発表賞

多様な表現型を示すダイモンジソウの系統進化史

孫田 佳奈

Kana MAGOTA

富山県立大学工学部助教

地球上の様々な環境への進出と適応は生物の進化に重要なプロセスであり、生物がもつ多種多様な特徴や形質（表現型）の進化を促してきました。多くの種は特定の環境への適応によって限定的な分布を示すため、表現型のばらつきはそこまで大きくありません。しかし中には広い分布をもち局所環境ごとに生育に適した表現型が進化することで、種内に複数の表現型が見られる種もあります。

本研究で対象にしているユキノシタ科の広義ダイモンジソウは、種内に表現型多型を含む植物の一例です。本種は東アジア広域（中国大陸、朝鮮半島、日本列島、極東ロシア）に分布する多年生草本です。大陸の集団は山地帯の湿った林床に生育し形態の変異は小さいのに対し、日本列島では多様なハビタットに生育し、ハビタットに応じて葉形態や生態特性等の異なる生態型が存在します。①日本列島に広く分布するダイモンジソウ（以下、標準型）、②高山帯に生育するミヤマダイモンジソウ、西日本の溪流沿いに分布する③ナメラダイモンジソウと④ウチワダイモンジソウ、⑤房総半島と伊豆諸島に分布する島嶼型のイズノシマダイモンジソウ、⑥屋久島に生育し矮小化したヤクシマダイモンジソウがあります。ハビタットへの適応によって生じたと考えられる多様な生態型の進化の過程には、過去の集団動態と自然選択が影響したことが考えられます。

そこで本研究では、広義ダイモンジソウの各生態型の系統進化パターンを明らかにすることを目的としました。まず、ダイモンジソウを含むユキノシタ節 18 種と北米に分布する姉妹種を用いて、核および葉緑体 DNA の部分配列決定を行いました。系統解析の結果、ダイモンジソウには約 704 万年前（中新世～鮮新世後期）に分岐した 2 系統（大陸地域系統と日本列島系統）が存在し、さらに日本列島内には約 366 万年前（更新世以前）に分岐した南北系統が存在することがわかりました。次に、朝鮮半島と日本列島の 61 集団から個体を採取し、ゲノムワイドに取得した一塩基多型（SNP）を用いて遺伝構造解析を行いました。その結果、標準型以外の生態型（高山型と溪流型、島嶼型）はすべて南日本系統内含まれており、表現型の多様化は南日本系統のみで起きたことがわかりました。南日本系統内ではおおよそ北から南への段階的な系統分岐が見られ、南に行くほど遺伝的多様性が減少しました。この結果から、南

日本の祖先集団は更新世以降の気候変動の影響を受けて北から南に分布を拡大した可能性が考えられました。加えて、特殊な生態型（高山型と溪流型、島嶼型）は南系統の末端枝に位置しました。これら集団が分布する地域は適応進化のホットスポットと知られており、他の植物でも共通して形態や生態特性等の変異が観察されています。ダイモンジソウにはこの地域に分布の先端集団が位置することになります。小集団が空間的に隔離して分布することで、強い自然選択により表現型の進化が起こりやすかった可能性が考えられました。また、高山型と溪流型ではそれぞれ遺伝的なまとまりが支持されず、標準型から複数回起源したことがわかりました。局所的な自然選択の影響を受けて同様の表現型が繰り返し進化してきたことがわかりました。

多様なハビタットへの進出と適応を繰り返してきた本種の進化的ポテンシャルの高さは、大変興味深いトピックです。今後は個別の環境要因への生理的・生態的適応メカニズムに着目し、表現型進化の起こりやすさを決める要因の解明を目指したいと考えています。

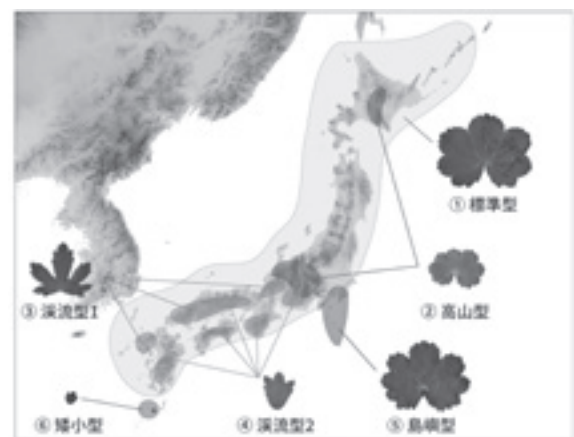


図 広義ダイモンジソウの生態型の分布と葉形態

私の歩みを振り返って

西山 教行 | Noriyuki NISHIYAMA

西山 教行 (にしやま のりゆき)

人間・環境学研究科人間・社会・思想講座教授

1984年明治大学文学部卒業。1990年ポール・ヴァレリー大学専門研究課程 (DEA) 修了。1999年新潟大学経済学部助教授。

2005年京都大学人間・環境学研究科助教授。専門は言語教育学、フランス語教育学、言語政策。

私は現在のところ外国語教育政策論や言語政策を講じているが、もともとそのような科目を講ずるような大学教育を日本で受けてきたわけではない。そこでこれまでの経緯をたどり、フランス文学から始まり、フランス語教授法、言語政策、そして言語教育学へといたる歩みを振り返ってみたい。

1. はじめにフランス文学があった

私が大学に通っていた昭和時代の終わりの頃も、フランス文学はなお輝きを失っていなかったと思う。東京の下町に生まれた文学少年は高校生の頃にはフランス近代文学の影響を受けた日本の作家や詩人に親しむようになり、背伸びをしながらも、小林秀雄の評論や中原中也の詩、ランボーやボードレールの翻訳などに親しむようになった。その中で、齋藤磯雄の随筆集『ピモダン館』をたまたま手に取り、その高踏的な世界を垣間見て、驚嘆と感銘を隠すことができなかつた。齋藤磯雄訳のボードレールやリラダンの翻訳を読むにつれ、正字正かなで織りなされた高雅で孤高の世界に憧憬を抱くようになった。

これを契機として、大学でフランス語でフランス文学を勉強したいとの純粋で素朴な思いを抱くようになったものの、これが研究にまでたどり着くのは相当の時間を必要とした。ボードレールに関する修士論文をкаろうじて提出し、その後にロータリー財団の奨学金を得る僥倖にあずかり、南フランスで2年間の留学生活を送った。ボードレール研究には先人たちの残した研究がうずたかく積み重ねられ、俊英が多く競合することを前に自己の非力を感じ、ある先生の勧めや、また大学のゼミで取り上げられたこともあり、ナチスの迫害のために斃れたユダヤ人詩人マックス・ジャコブに宗旨替えを行い、なんとか論文を書いた。帰国後にもジャコブの論文を少しは書き続けていったものの、まもなくフランス語の非常勤講師を始めるようになり、関心はフランス文学から次第にフランス語教育へと移っていった。今から思いおこせば、この選択は時宜にかなったもので、フランス文学にとどまっていたならば、現在の私はあり得なかつたと思う。

2. フランス語をどのように教えるか

日本でフランス語教育に従事している教員の大半はフランス文学を専門分野としており、フランス語学を専攻するものも多少いるものの、フランス語教育を専門とする教員は、微々たるものだった。そもそもフランス語教育に従事することと、フランス語教育を専門にすることは、同一の事象だろうか。教室でフランス語教育を実践しているものはフランス語教育を専門にしていると言えるだろうか。確かに多くのフランス語教師は専門家としてフランス語教育に従事している。少なくとも大学などの教育研究機関ではそのような認識のもとに教員を雇用しているだろう。その一方で、その同じ教員が文学や語学の論文を書くことはあっても、これまで長きにわたりフランス語教育に関する論文を書くことはなかつた。フランス語教育はあくまでも教育実践に他ならず、さらに言うならば、生業として位置づけられるもので、研究の対象とは必ずしも考えられてこなかつたと思う。とはいえ、フランス語教育を実践する教員の中には教科書や参考書を執筆する人々もいる。それにもかかわらず、フランス語教育は研究対象にはなりにくかつた。私がフランス語を教え始めた頃のフランス語教育の位置づけはこのようなものだった。

私は非常勤講師としてフランス語教育に関心を持つようになったのだが、そこでの関心は自分の担当するクラスの教授法を改善することであり、カリキュラム全体や教育の目的などを考える余裕や知見、権限はなかつた。80年代より日本のフランス語教育界にはコミュニケーション・アプローチの波が到来し、フランス語によるコミュニケーションの効能が現実のものとして議論されるようになっていった。教員も以前の世代と比べてフランスへの留学経験者が多くなり、教員自身のフランス語コミュニケーション能力も格段に上がってきた。私は可能な範囲で学生のコミュニケーション能力の向上に努める授業を心がけた。教授法の能力向上のために日本フランス語フランス文学会、日本フランス語教育学会、在日フランス大使館開催の夏季スタージュに参加し、その翌年の夏休みには文科省の支援を得てフランスでの夏季研修に参加した。その後、東京で学会等によりフランス語教育セミナーが開催されたことから、そのような機会をとらえて、研鑽と交流を深めた。そしてそ

の延長線上でフランス政府の給費を得て、CREDIF（フランス語普及教育研究センター）に留学することとなった。これは1996年の廃止にいたるまで、外国としてのフランス語教育に関する最高峰の研究教育機関で、そこでの長期研修こそが現在に到るまで私の教育研究の原点となっている。実際、帰国後に数年を経て、専任教員のポストを得てから科研など様々な機会を活用して留学時代に師事した幾多の研究者を日本に招聘し、いささかなりとも大恩に報じることができたと思う。

CREDIFでの留学はフランス語教授法の研究だけではなく、教員養成の指導者の育成が主たる課題だったことから、その国全体に資するようなプロジェクトの作成が求められた。一介の非常勤講師にすぎなかった私はシャンソンの活用をテーマとした教材の作成に取り組んだ。

その頃はシャンソンがネットで配信されるような時代ではなく、CDによる音楽視聴が一般的で、そのためフランスの楽曲をフランス語教育に活用すべく、関係者と折衝を重ねていったが、そこには著作権をめぐる法律上の壁が立ちふさがっていた。フランス語普及の大義であれ、楽曲の教育的活用は大変に困難だったのである。そのような状況の中で、フランス外務省がフランス語普及のためフランス国内のフランス語学校と提携し、各国のフランス文化ネットワークやフランス大使館文化部向けにCD教材を編集していることがわかり、その日本版を作成することを提案した。この企画は在日フランス大使館の支援を受け、1996年に東京で開催された国際フランス語教授連合世界大会と連動して実現した。

このプロジェクトの実現へ向けてフランス外務省などとの交渉を通じて、フランス政府がフランス語普及になぜ多くの資源を投入するのか疑問を抱いた。なぜフランス語普及は国連の常任理事国のポストの維持と同程度の価値があると、外務大臣は明言するのか。このような疑問こそがその後の言語政策研究へと発展していく原動力となった。

3. 言語政策研究の創出

2度目のフランス留学から生まれた疑問は、なぜフランス政府はフランス語普及に大義を見出し、多くの資源を割くのか、というものだった。実のところ、私が日本人フランス語教師としてCREDIFに派遣されたのもフランスの対外言語普及政策の一環に他ならなかった。では、対外フランス語普及政策がなぜ、いつから、どのような形で実施されるようになったのか。この疑問は知的な問いかけであるとともに、自らの職業倫理にも関わる。そこで文化外交と呼ばれる対外フランス語普及政策の起源や形態を考えるようになった。なぜフランス語を教えるのか、フランス語教育の目的とは何か、このような一連の問いかけは現在にいたるまで私をとらえてやまない。

そこでフランス語普及政策の起源への関心から、アリアンス・フランセーズに関する論文を何本か書いた。これは、1883年にフランスで設立された組織で、当時の植民地や外国にフランス語を普及することを目的として設立され、

現在にいたるまで世界各地に展開している。19世紀末のフランス語普及に関わる論文は2004年から1年間の在外研究期間にパリに滞在し、フランス国立図書館で入手した資料をもとに進めたもので、フランスの内政外交を横断する学際的な歴史的研究に位置づけられる。普仏戦争に敗れ、国内分裂の危機に瀕したフランスがフランス語普及を通じて国民統合を進めようとしてきたプロセスをフランス語教育を通じて解明することを試みた。従って、教室でのフランス語教授法に関わるものではなく、フランス語教育の歴史的根拠を明らかにすることを狙っている。この頃になると、教室での教授法の改善にも増して、より原理的で理論的な研究に着手するようになっていった。とはいえ、日本国内での同学の士は少なく、フランス植民地帝国のフランス語教育の根拠に対する批判的な眼差しを向ける研究が直ちに評価されたわけではない。

19世紀末からのフランス語普及政策に関わる研究は広い射程を開くもので、そこから様々な疑問や興味が次々に生まれてきた。例えば成人移民に向けた言語教育政策もそのひとつである。成人移民の言語政策は植民地教育の延長線上にあるもので、これは脱植民地化によって旧植民地の人々が旧宗主国へと移動することにより発生した現象と考えることもできる。どのようなフランス語を教えるのか、どのようなフランスのイメージを伝達するのか、といった課題も歴史的言語政策研究から生まれた課題である。さらには過去の歴史を踏まえて、現在の言語政策に目を向けると、そこでは継続性ととも新たな展開が生まれている。19世紀の国民国家の形成の中で作りあげられた言語政策は国家の結束性を高めることを重視するもので、他国との協調は論外であり、むしろ他国とは競合関係にあり、冷戦期における対外言語政策はナショナリズムと切り離し難いものだった。しかしヨーロッパはその後に、国際協調主義へと転換し、多国間の枠組みのもとに言語政策を展開するようになっていった。欧州評議会の一連の言語教育政策はその好例で、2001年にはそれまでの言語教育政策の総決算に当たる『欧州言語共通参照枠』（CEFR）を発行し、言語教育を通じてヨーロッパ諸国の交流と相互理解を進める方向に進んでいった。言語政策研究も多国間の枠組みへと展開しつつある。

結論

フランス文学への関心から始まり、教授法、そして言語政策、言語教育学と、私は知的関心の赴くままに専門分野を移りゆき、日本では小さいながらも、新たな領域を開拓していったのだと思う。京都に異動の後は、後進の指導に関わる機会を得たことから、言語や地域、時代を越えて知の世界は広がりつつある。この国には、この道一筋、といった態度を尊ぶ風潮があり、私の事績はそのような点ではまったくのところ失格ではあるが、「新しき葡萄酒をふるき革囊に入ることは為じ」（マタイ9.17）ともいう。進取の機運を磨くことはアカデミアに欠かせない。

ピアノ音楽とパリ音楽院をめぐって

上田 泰史 | Yasushi UEDA

上田 泰史（うへだ やすし）

人間・環境学研究科芸術文化講座准教授

2006年東京藝術大学音楽学部楽理科卒業、2016年東京藝術大学大学院音楽研究科博士課程修了（音楽学）、2017年パリ第4大学博士課程修了（音楽学）。専門は西洋音楽史、とくに19世紀のピアノ音楽と教育。

原点？

蒔絵師松田権六の生家がある金沢市大桑町で過ごした少年時代、夏休みの宿題は「セミの変態」や「大桑層の化石」などと題する冊子を作って提出していた。研究という営みに原点があるとすれば、自然科学的な関心だったかもしれない。現在の専門である西洋音楽（クラシック音楽）との関わりは、習い事のピアノとヴァイオリンが最初だったが、長くは続かなかった。父が務める大学の関係で、時々画学生が家に遊びに来ていた。みな音楽好きで、ヴァイオリンやピアノやギターを弾いてくれると、しみじみと聴き入った。東京藝大の楽理科を志した高校時代から、努力してクラシック音楽を聴くようになった。それなりに楽しい学びではあったが、一方で西洋の音楽を研究するというのは、どこか遠いドイツやオーストリア、あるいはロシアの「傑作」や「大作曲家」について一生かけて研究することなのだろうか、との疑念が拭えなかった。

未知の音楽家たち

ある晩、カーステレオから聴いたことのない音楽が流れしてきた。一聴したところ初期バロック風だが19世紀的なピアノ技法を駆使しており、四角四面の不思議な音楽である。その後には、20世紀初頭の音楽かと思わせるモダンなジューグが続いた。ライナーノーツを読むと、それはシャルル＝ヴァランタン・アルカン（1813～1888）という作曲家の曲で、フレデリック・ショパン（1810～1849）と親交のあったフランス人だと説明があった。演奏しているのは地元の中村 攝さん（その後、金澤と改姓）という作曲家兼ピアニストだった。洋画家と舞踏家を両親に持つ氏は、1974年から約4年間パリに遊学した独学の音楽家・研究者で、アカデミックな音楽界とはあまり接点をもたず独自の視点から音楽史探究を行っていた。氏の作業部屋には、過去200年の仏独伊の作曲家を中心に、夥しい数の楽譜が棚に収まりきらず床の上にまで積まれていた。目を見張る個性的な自作品の数々は全て自筆譜の状態ですべて戸棚にしまっていた。東京藝術大学音楽学部の楽理科に入学した私は、帰省の度に氏の自宅にお招き頂き、1人の作曲家の作品を何回かに分けて初期、中期、後期と順に弾いて聴か

せて頂いた。全く知らない作曲家でも、作品番号順に聴いていくと、その人の到達点、作曲家の世代ごとの共通点、作品が書かれた時代の共通点が次第に浮かび上がり、個人・時期・地域ごとの類型的表現やジャンルの流行を捉えることに興味をそそられるようになった。

音楽史記述への関心

一方、大学ではD. J. グラウトとC. パリスカによる『西洋音楽史』と対峙していた。『西洋音楽史』は日本語で読める中では大部の西洋音楽通史で、学部生だった当時、授業参考書に指定されていた（原書は2014年に新たな編者を加えて改訂された）。17世紀以前については多くを学んだものの、18世紀後半から19世紀にかけては、個々の「大作曲家」の作曲様式変遷を軸とする構成が目立っていた。たとえば、中巻には次のような章が連なっている。「後期バロックの音楽」「18世紀前期の音楽」「初期古典時代のソナータ、交響曲、オペラ」、「18世紀後期：ハイドンとモーツァルト」、「ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン」。なぜ、18世紀後半になると数名の個人名、しかもウィーンで活躍した数名の男性作曲家だけがハイライトされるのだろうか？これは、大きな疑問だった。

19世紀音楽研究

大学の内外で育まれた西洋音楽史への関心は、（大）作曲家・（傑出した）作品を必ずしも軸としない、新たな文化的視野を拓いてくれた。音楽通史は、しばしば作曲様式の変遷を横糸としつつ、新しい様式の出現に注目して時代間の断絶を強調する。むろん、それは一つの可能な語り口ではあるが、一部の限られた作曲家・作品ばかりが同時代の音楽文化の担い手だったわけではない。作曲家・演奏家・聴き手はどのような教育を受け、時代の文脈の中で音楽活動に参加していたのか。そのような視点から時代の変遷を見てみたいと思うようになった。

ピアノ音楽に関心のあった私は、まずピアノが市民権を獲得した19世紀を研究フィールドとした。19世紀は反動的な時期もあったが、政治革命、産業革命、ナショナリズムの高揚など基本的には進歩思想に彩られ、音楽史ではベルリオーズ、リスト、ワーグナーを初めとする先鋭的な音

楽家が音楽史の表舞台で目立っている。その一方で、今日の「クラシック音楽」のように、人々が過去の音楽に熱い視線を向けたのも19世紀のことである。美術や建築、詩芸術、弁論術には古代ギリシャ・ローマの古典があるが、音楽の古典はせいぜい対位法の規範となった16世紀のG.ダ・パレストリーナまでしか遡ることができない。ピアニストにとっての古典は、ようやく19世紀になって歴史主義的関心や初期ロマン主義美学を背景として、18世紀から19世紀初期までの音楽の所産（バッハ、ハイドン、モーツァルト、ベートーヴェンらの作品）の周囲で成立した。未来と過去に眼差しを注いだ19世紀という時代に、ピアニストの演奏レパートリーがどのように構築されていったのか、明らかにしてみようと思いついた。

パリ音楽院ピアノ科のレパートリー研究

国家が主導する最初期の職業演奏家養成機関のひとつに、パリ国立音楽院がある（1795年創立、以下、パリ音楽院と略す）。パリ留学時代には、パリ音楽院ピアノ科教授でアルカンの師でもあったジョゼフ・ヰイメルマン（1785～1853）についての研究を掘り下げた。ヰイメルマンは古典的音楽書法に長けた作曲家で、先見の明を持つピアノ教育者でもあった。名高い音楽サロンの主宰者でもあり、パリの音楽界で影響力を持っていた（四女は作曲家シャルル・グノーと結婚した）。ショパンやリストが訪れる国際的なサロンで得た知見をもとに、彼は自身のピアノ教本に、最新のピアノ演奏技法の精華を採り入れた。伝統的技法と新技法の折衷を図る彼は、1840年、院長ルイジ・ケルビーニの演奏曲目に関する保守的な教育方針にも拘わらず、学内期末試験において革新的な名手S.タールベルクの近作を自身のクラスの生徒に弾かせていた。

学内試験レパートリー研究へ

フランス国立古文書館のパリ音楽院関連史料に基づくこの調査結果から、パリ音楽院（コンセルヴァトワール）の教育の実態はそれまで指摘されていたほど保守的（コンサーヴァティヴ）ではないと考えるようになった。そこで、ピアノ科で演奏された作品の実態を詳細に調査することにした。パリ音楽院におけるピアノ教育史の研究は、それまでもF.ド・ラ・グランヴィル氏らによって行われていたが、学内期末試験の演奏曲目の研究はまだ充分に進んでいなかった。期末試験の曲目は、教員又は生徒が任意に決めていたので、課題曲制の修了試験よりも多様性に富んでおり再構築が難しいからである。そこで、私は敢えてピアノ科で行われた前期・後期末試験の演奏曲目の再構築に取り組むことにした。音楽院関連史料を調べてみると、1840年以前は演奏曲目の記録が残っていないものの、それより後は、20世紀の中頃まで、複数の史料を組み合わせながらピアノ科全クラスの期末試験の曲目情報——誰が何を弾いたのか——を一覧化できることが分かった（ただし、1840年代から60年代の演奏曲目は部分的にしか記録され

ていない）。この一覧化作業は現在に至るまで継続しており、今年度をもって1840年代から1950年代までのデータが揃う予定である（1890年から1954年までは、全日本ピアノ指導者協会〔ピティナ〕の協力を得てデータベースを先行公開している¹⁾）。学内試験のレパートリー変遷を長期的に追うことで分かるのは、ピアノ科の生徒がショパン（1849年没）以前の作曲家、とくにその価値が歴史的・美学的に高く評価されてきたベートーヴェン、J. S. バッハ、ショパンらの作品を「古典」として演奏してきたという事実である。一方で、それほど大きな割合を占めないが、同時代の作曲家の作品も常に演奏されていた。1870年代には、中堅教授たちがそれまで定期試験記録に現れなかったリストの作品を採用し、さらに1861年に《タンホイザー》のパリ初演で論争を引き起こしていたワーグナー作品（F. リストによるピアノ独奏用編曲）も導入されていた。かなり珍しいケースではあるが、自作品を演奏した女子生徒の存在も確認された。1870年～71年の普仏戦争以降、ナショナリズムの高揚に伴い、フランス人作曲家も重視されるようになっていく。音楽アカデミズムの重鎮C. サン＝サーンス（1835～1921）の作品は、フランスの顔として急速に試験曲目に定着した。20世紀にはいると、サン＝サーンスの弟子G. フォーレ（1845～1924）の作品も、フォーレ自身が院長を務めた時代にはよく演奏された。他方、C. ドビュッシー（1862～1918）やM. ラヴェル（1875～1937）の先鋭的な作品は、彼らの生前から定期試験で演奏されてはいたものの、フォーレ作品ほどではなかった。演奏曲目の定着には、美的判断以外にも、音楽界における政治力の影響も考慮に入れなければならない。

2023年9月、音楽院ピアノ科研究の先駆者F.ド・ラ・グランヴィル氏を訪ねた。学生の時分、私はアポイントもなしに氏の自宅を訪ねて博論の複写許可を請うたことがある。非礼にも拘わらず親切に対応して下さった氏は、後に私の博論審査会で副査の一人として名を連ねた。ランス大学を退職された氏と7年ぶりの再会を喜び、レパートリー研究の進捗を報告し、意見を伺うことができた。別れ際、氏は自身の博士論文の原本にしかないという詳細な附録の一つをおもむろに切り離し、私に手渡そうとした。写真に撮らせて頂ければ充分だと申し出たが、他に研究を継ぐ人もいないからと言われるので、受け取るほかなかった。レパートリー研究は今年度でひと段落となり、現在は演奏様式の研究に傾斜しつつあるが、パリ音楽院の研究とはこれからも接点を持ち続けたい。

1) <https://enc-paris-conservatory-exam.piano.or.jp/> このデータベースには、演奏曲目の他、クラス担当教官、生徒名、典拠史料に関する情報も含まれている。

真鍋公希＝著

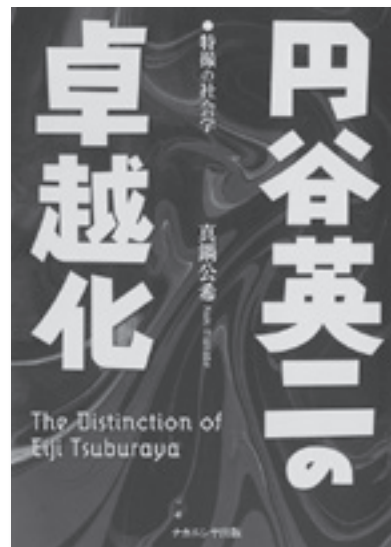
評者・中森弘樹
(立教大学准教授)

円谷英二の卓越化 特撮の社会学

ナカニシヤ出版

定価 3080円

2023年3月刊 306頁



巨匠が巨匠たる所以を、考えたことがあるだろうか。巨匠たちは、圧倒的な才能や多大な功績によって、なるべくしてその位置についたのだと、一般的には解されている。一方で、巨匠たちに匹敵する才能を持ちながらも、それを発揮しきることなく一生を終える芸術家や、多くの仕事をなしたにもかかわらず、神格化されるまでには至らなかった第一人者の例は、枚挙に暇がない。

では、ある分野（場）で、巨匠と称される人物と、そうならなかった人々の間には、どのような違いがあるのだろうか。その差異を、技量の差や偶然のめぐり合わせだけで説明しつくすことは不可能だろう。そこには、場の構造や力学もまた、影響しているはずだ。

本書は、「特撮の神様」と称される円谷英二が、映画・映像制作の分野で「卓越化」していった過程を、丹念な資料研究によって明らかにした労作である。「卓越化」(distinction)とは、社会学者のピエール・ブルデューが提唱した概念で、他者との差異化を行い、際立つことを意味する。著者は、ブルデューの「場の理論」に依拠しつつ、円谷が映画制作という場で様々な資本——特に権威や信用を正当化する象徴資本——を獲得してきた経緯を、当時の映画や特撮が置かれていた状況や人間関係と併せて記述してゆく。また、ゴジラやウルトラマンの「生みの親」とも称される円谷の立ち位置を踏まえると、円谷の歩みは、特撮というジャンルの成立過程そのものである。よって、本書は副題のとおり、「特撮の社会学」でもある。

こうした視点で書かれているがゆえに、本書は特撮ファンのみならず、評者のようにゴジラやウルトラマンにそれほど興味を持っていない読者にとっても、十分に読み応えのある内容になっている。以下では、本書の特長を三つ挙げておく。

第一に、本書の構成の巧みさについて。本書は、筆者の博士論文が元になっており、各章は、筆者が過去に発表してきた6点の論考を再構成したものとなっている。つまり、元は別々だったパーツを繋ぎ合わせることで書かれているのだが、それらの「繋ぎ目」の跡は皆無といってよい。特に、円谷の卓越化の過程を3つのステップで説明する四～六章

では、書き下ろしと見まがうほどスムーズに論が展開されてゆく。本書は、同分野で投稿論文から博士論文を構成し、そして単著化する際に、大いに参考になると思われる。

第二に、特撮という映像技法への深い洞察について。本書では、映画の場における円谷の卓越化と、特撮を観る視点の成立が、パラレルに分析される。特撮では、怪獣による戦闘や都市の破壊など、およそ現実にはありえないシーンが、ミニチュアを撮ることで展開される。よって、特撮は、ひとたび目を離すだけで、たちまち作り物に見えてしまう危うさと隣り合わせになっている。だが、むしろ筆者は、本当はミニチュアを撮っているという仕掛けを観客が知っているという「メタな認識」こそが、信疑のあいだを往復する特撮の魅力を成立させているという、興味深い仮説を提示する。このような鑑賞態度の成立は、本書では主に制作者と技術解説者の言行録を資料に用いて分析されているが、強いていえば、当時の一般視聴者の言説を分析するとどうなのかも知りたいところではある。

第三に、本書の学術的貢献について。筆者は、ブルデューの「場の理論」に拠りつつも、新たなモデルを導出している。それは、「芸術と金銭の対立」の構造を利用した、経済資本を否定することによる卓越化の「戦略」が通用しない場における、別様の卓越化の過程である。筆者は、円谷の映画場での歩みを、「経済資本を担保に新しい象徴資本を創出する卓越化」の過程として結論づける。このようなモデルが提示されると、それが類似のカルチャーにおける巨匠たちの歩みにも当てはまるのか、気になるところだ。本書では、ジョージ・ルーカスとの比較が言及されているが、では手塚治虫や宮崎駿はどうなのだろうか。評者のごく個人的な見立てになるが、筆者はこれからも特撮を中心に研究を深化させてゆくのではないかと思う。だから、他の研究者によって、本書のモデルが様々な事例に応用されることを、評者は期待したい。

*真鍋公希さんは2020年3月に人間・環境学研究科博士後期課程を研究指導認定退学、翌年3月に博士号取得。現在、中京大学現代社会学部講師。

和田萌＝著

評者・池田亮

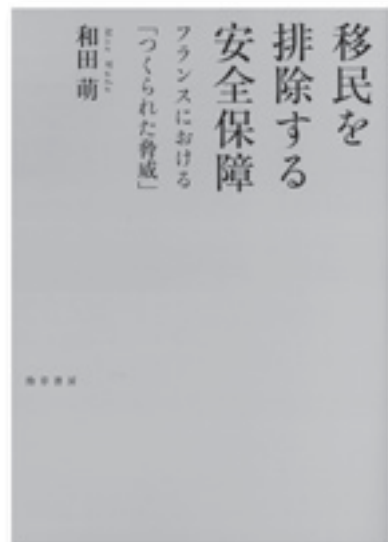
(東北大学教授)

移民を排除する安全保障——フランスにおける「つくられた脅威」——

勁草書房

定価 5,500円

2023年3月刊 240頁



主に第二次大戦後に発展した国際関係論は、基本的に主権国家を分析の基礎に置いてきた。主権を制約する国際制度を重視するのである、国家以外の多様なアクターに注目するのである、主権国家が中心に存在することに変わりなかった。この傾向は、政府資料に依拠する歴史研究ではより顕著であった。だが1970年代にヨーロッパ諸国で移民の増加が注目され始めると、国境をいかに管理するか、移民をいかに政治共同体に取り込むか、そして政府がこの現象にいかに対外的に対応するかも、国際関係論の分析対象となった。本書は、ライシテを掲げるフランスがこの問題に対応した事例を用い、人の移動がもたらす政治を安全保障化論の文脈で捉え直そうとした研究である。以下で簡単に内容を紹介した上で、感想を述べる。

第1章は、政治学・国際政治学が人の移動をいかに安全保障との関連で理論的に捉えてきたか、視点を整理する。またフランスを題材とする前提として、共和国統合モデルとライシテを概観し、ムスリム系移民の増加が緊張関係を作り出していることを指摘する。第2章は、安全保障化論の先行研究を整理し、非伝統的安全保障研究としてコペンハーゲン学派とパリ学派の議論を提示する。前者が、安全保障とは、脅威を提示して特別措置の必要性に言及することだと論じるのに対し、後者は日常的な実践としての安全保障に注目する。第3章では、2002年から2010年までのフランスの移民政策を事例に、実際に安全保障化が進行するメカニズムが考察される。安全保障化の成功にはオーディエンスの承認が不可欠だが、本章ではその多様な役割を分析するため、エリート、一般大衆、技術官僚、学者の4種類に分類する。各オーディエンスは、承認だけでなく対抗も含め多様な反応を示した。第4章は、安全保障化の際にマスメディアが果たす役割を、メディアが産出するフレームが持つ権力を強調するパラダイムに基づき、シャルリ・エブド襲撃事件とパリ同時多発襲撃事件を事例に分析する。その結果、メディア・フレームも基本的に統治エリートの見解に基づき構築されていると議論される。第5章は、フランスで移民が安全保障化する際、世俗性—宗教性が果たす役割を分析する。ライシテは近代化と世俗化を端的に表す原理でありながら、戦闘的ライシテに代表されるように、一部では政治的に動員可能な資源とみなされ、

問題の安全保障化に貢献するケースもあった。では安全保障化の進んだ社会で、脱安全保障化はいかに可能なのか。レジリエンスという戦略に注目しつつ、第6章はこの問題を検討する。本章はライシテ監視機構の活動を取り上げ、この機構が①宗教の自由を保障する原則としてのライシテを掲げたこと②対話に基づく過激化対策を講じたことで、脱安全保障化に貢献したと論じる。

本書の最大の貢献は、ライシテと移民の存在の緊張関係が、フランスで社会的軋轢を生んでいることを安全保障化論の文脈に位置付けようとしたことであろう。一般的には国内の文脈で分析されるこの問題を国際関係論の文脈で捉え直そうとした点は、高く評価できる。

しかし、安全保障化論の中でライシテの位置づけがやや不十分な印象を受ける。脱安全保障化のメカニズムへの注目や官僚機構への注目など、フランスを事例とするにあたり、本研究が基本的にパリ学派に依拠しつつコペンハーゲン学派を批判的に扱う点は説得的である。だがそうであれば、ライシテが特に前者の理論で占める位置を明確化しつつ、両学派の理論を架橋しながら議論を進展させるべきであろう。

本書によれば、非伝統的安全保障研究が興隆したのは1970年代以後である。だが少なくともフランス革命期以来、外敵の脅威が国民を分断し、政治共同体を不安定化させる現象は頻繁に見られてきた。つまり、必ずしも軍事的脅威を用いずとも、国民共同体を動揺させることで、それを主権国家の動揺に繋げる政策も、むしろ伝統的だといえるべきである。ライシテの有無に関わらず、国民国家を標榜する多くの国では国家の安全保障と個人のその間には鋭い緊張関係が存在してきたが、それを媒介するのが国民という想像された政治共同体であった。理論研究であれ歴史研究であれ、国際関係論は主権国家体系に依拠するあまり、こうした論理を軽視してきたのではないか。国際関係をより現実的に分析するために、いかに個人の視点を取り入れるか、その中で国民国家をいかに位置づけるのか、本書は我々に改めて問いを投げかけている。

* 和田萌さんは、2022年3月人間・環境学研究科博士後期課程修了、同年同月博士号取得。現在、東北大学助教。

開信介＝著

評者・佐々木幸喜

(京都大学国際高等教育院特定准教授)

久生十蘭作品研究
—〈霧〉と〈二重性〉

和泉書院

定価 3,520円

2023年3月刊 260頁



本書は、大正期から昭和期にかけて活躍した作家・久生十蘭（1902-1957）作品群の技巧・構造の解明をめざすものである。《多面体作家》あるいは《小説の魔術師》と呼ばれる十蘭は、その惹句が指すように、「巧緻な構成、文体やジャンルの多様性」が光る作家として知られる。本書の起点は副題にあるとおり、〈霧〉と〈二重性〉、この二つのモチーフである。「本書のはじめに」に続き、本書は六章からなる。以下、本書の概要をみながら、その議論を追ってみたい。

第一章では〈霧〉モチーフが、第二章では〈二重性〉モチーフが検討される。作品例として前者では「水の園」（1949-1950）、後者では「魔都」（1937-1938）、両モチーフが融合するものとして「雲の小径」（1956）が取り上げられる。〈霧〉モチーフには、十蘭の「美意識の反映」や「作品構成や物語内容などとの関連性」があることが指摘されるとともに、洋の東西を問わず、十蘭が多様な先行作品に取材していることが指摘される。あわせて、両モチーフの有する「不定形さや流動性」という「共通性を巧みに活かす」ことで、十蘭が「作品をより緊密で生彩に富んだものに」していることが指摘される。両モチーフについて、開氏は「クリシェ、紋切り型といってよい」と断りつつ、ここに視座を置く。それは他でもない、「その組み合わせの妙」が「作品に様式的な鋭角」を作り出すためだとし、開氏はそれを緻密な考察により整理する。前半二章で議論の枠組みが示された後、次章からは、個々の作品分析に進む。

第三章では、「鶴鍋」（1947）が取り上げられる。検討されるのは、〈霧〉と〈二重性〉両モチーフの様相である。「家」制度の解体をはじめとする同時代状況がどのように作品に反映されているかが検討され、それと同時に、〈二重性〉モチーフの中でも重要なものの一つ、「見立て」が作品内で効果的に用いられるさまを観察する。

第四章では、「予言」（1947）が取り上げられ、〈二重性〉モチーフが検討される。ナラトロジー（物語論）の知見から語りの特徴が丹念に洗い出された後、二重化された語りと幻覚小説、語りと〈二重性〉モチーフ、それらの関連性が述べられ、〈二重性〉モチーフが「幻覚小説としての構成上の要請によるものではない」ことが指摘される。

第五章では、「母子像」（1954）が取り上げられる。前章に続き〈二重性〉モチーフが検討された後、本作が第二回

世界短編小説コンクール（*New York Herald Tribune* 紙主催）一等となった経緯が検討される。本作は、従来、授賞過程において大幅な改稿が行われた可能性、改稿に政治的影響が関わる可能性が指摘されてきたが、開氏は、反証を整理するとともに、日英テキストの対照から内容上の異同を確認することで、その内実を迫る。その際、開氏は、十蘭作品に加え、日本から同コンクールに応募した他の三作家による作品も分析対象とし、先の反証の裏づけを行う。議論は翻訳の問題にも及び、ここでも、開氏の丁寧な仕事ぶりを垣間見ることができる。

第六章では、「湖畔」（1937）をもとに、〈霧〉と〈二重性〉両モチーフが検討される。本章までの考察を通じ、両モチーフは、「流動的・相対的・非合理的な世界認識への志向」の「象徴」であったと結論づけられる。「補論」として、「三澄半造」名義でモダニズム雑誌『新青年』に掲載された六篇が十蘭の手によることが指摘される。

開氏が「先行テキストの重要度が高い」というように、十蘭の小説作法を探る上で、材源の検討・解明は欠かせない。その点においても、開氏の論考は、日本語だけでなく外国語の文献にも目配りが行き届いたものであり、多くの示唆を与えてくれる。

一方、開氏の論考に触発されたことで、読者の一人として欲が出てしまったところがある。それは、“思考の跡”を（もう少しだけ）一緒に辿りたいと感じるところがあったことである。例えば、〈霧〉モチーフの分類について。用例の中に「霧か、霏か」（「水の園」前掲）、「雲とも霧とも定めがたい」（「新版八犬伝」1938）などがあり、それらを「霧」一語に集約するのにどのような経緯があったのか。また、「霧」の濃淡の描写にも作品によって違いがあるように思われる。執筆時期による傾向はないのか、どのような特徴づけが意図されていたのか、十蘭の語彙選択の問題にも関わっているように思われる。開氏の論旨が明快であるからこそ、さらなる議論に進みたいと読者は駆り立てられるだろう。続論が待ち遠しい。

* 開信介さんは、2017年3月人間・環境学研究科博士後期課程を研究指導認定退学、2018年3月博士号取得。現在、三重大学特任准教授。

衛藤恵理香＝著

評者・佐野宏

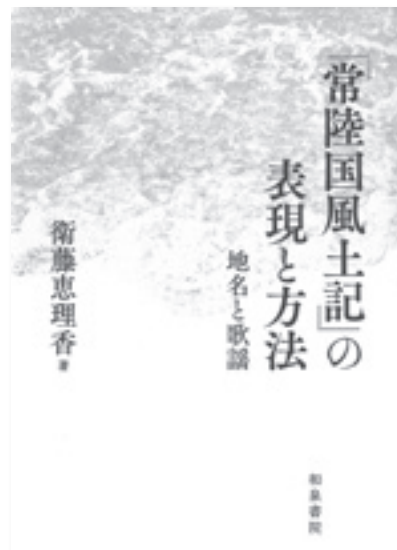
(人間・環境学研究科教授)

『常陸国風土記』の表現と方法 地名と歌謡

和泉書院

定価 3,600円＋税

2023年3月刊 228頁



いわゆる「風土記」は平城遷都後、『古事記』成立の翌年、和銅六年（713）の「郡内に生ずる所の銀銅彩色草木禽獸魚虫等の物、具さに色目に録し、及び土地の沃瘠、山川原野の名号の所由、又古老相伝ふる旧聞異事は、史籍に載せて言上せよ」（『続日本紀』和銅六年五月甲子）とある官命に応じて各地で編纂された。この時『日本書紀』の編纂事業が中央では進行中で、此の国の成り立ちとその姿が中央と地方のそれぞれで史書と地誌として描かれることになる。官命のうち徴税品目や産出品、租税に関わる土質などは現実の実態に照らして客観的に記載することができるけれども、その土地の命名起源や伝承された「旧聞異事」は地域毎に存在し得るから取捨選択という、風土記述作者の判断が多分に含まれる。

古事記が撰進され、日本書紀編纂事業が中央で進む中で「史籍に載せて言上せよ」という官命は「史籍」に対する地方官人らの認識にばらつきをもたらす。それは作業が進む日本書紀に代表される中国史書のような漢文体か、あるいは古事記に代表される倭語の語り物としての倭文体か。文芸の方法や文章様式として二様が自覚されていた時代であって、当時のエリート達が都を離れた土地で古事記・日本書紀のような史籍を編纂したら何が起こるか。

「風土記」研究の醍醐味は、民俗学的な口承文芸の記載と実態という次元だけではなく、述作者の文芸意識をこそ観察するところにあると筆者は捉えている。古事記・日本書紀・万葉集の文芸意識の中に風土記を包摂できるかどうか。その問いを筆者は風土記が記紀万葉で行われるのと同程度の訓詁を展開して、その試練に風土記が耐えられるかと探りながら検証してみせる。必ずしも善本に恵まれない風土記だが、現在もっとも校訂が進んだ『常陸国風土記』を対象に選んでいるのも筆者の意図が風土記説話の文学性を問いなおすところにあるからである。

筆者は歌謡と説話との相関に、地誌の中にある文学の揺り籠を見出す。記憶された伝承が作品へと転成する瞬間には述作者が触媒となって文芸意識という創造が働く。素材

としての伝承に対する述作者の解釈とその主題化が働いて作品へと生まれ変わるからである。これは口承文芸では常に起こることながら、それを「風土記」という地誌テキストの文体論として展開してみせたところに本書の特色がある。

本書は大きく二部からなっている。第一部は、「風土記の表現世界—神なるものの風景—」として、産品とともにある土地の性格と伝承の関わりと、伝承の記載に伴う漢語語彙の選択について述べている。伝承の外部と内部について本書での考察のプロットを示す論考二篇を収録している。第二部は「伝承と歌謡—遙かなる記憶と今の記載—」として四篇の論考を収録し、散文と歌謡との相関について具体的な分析を試みている。補論として「近代国家における風土記の「発見」として明治期国定教科書にみられる風土記説話の論を収める。

とくに評者をして興味深く思うのは、神と人との関係性についてである。これは本書には断片的にしか述べられていないから、評者の感想だけれども、常陸国風土記には神が人と共にありたいと思う説話と、人が神と袂を分かとうとする説話のプロットが観察されるように思う。神々の歴史と人のそれが連続的な日本神話のあり方に照らして、神と人との関わりを奈良時代という当時の近代社会においてどのように捉えていたのかという点は大問題だが、いずれ筆者によって解き明かされるのだろう。古代日本の地誌における文学の揺り籠というのは後世の地名歌枕を生む土壌であるとともに、当時の文芸意識のさまざまな位相が混在する風土記の性格をよく言い当てているように思う。

* 衛藤恵理香さんは、2017年3月人間・環境学研究科博士後期課程修了、同年同月博士号取得。現在、日本文理大学経営経済学部助教。

岡久太郎＝著

評者・神原一帆

(立命館大学言語教育センター [嘱託講師] / R-GIRO [客員研究員])

『文法と身体——曖昧な文を伝達する
イントネーションとジェスチャー』

京都大学学術出版会

定価 3,400円 (税別)

2023年3月刊 238頁



言語とは便利でありながらも厄介な道具である。例えば「多少は勉強しますから」という表現を読んだ時にあなたはどんな場面を想像するだろうか？一つは意地の悪い教員に詰められた学生が悔しそうに食い下がる姿かもしれないし、他には巧みな話術で目当ての商品を購入させようとする販売員の姿かもしれない。このような解釈の揺れは、この表現に含まれる「勉強」という語に「新たな知識を取り入れること」と「提示されている値段を低くする」という二つの意味があるからとされる。我々が使う言語は厄介なことに同じ形で異なる内容を表すことがある。このような特性のことを言語学者は曖昧性と呼ぶ。

このような曖昧性は語だけに限らず、「小さいバッグのポケット」のような句のレベルでも観察される。先の「勉強」の例とは異なり、小さいのはバッグなのか、それともポケットなのかということはこの表現が使用される状況だけで判定することは困難である。これは上の多義語の存在が原因となるものではなく、当該の修飾語が何を修飾するものなのかが明らかではないことで生じる構造的曖昧性である。では、このような曖昧な表現で、どちらかの意味を伝えなければならない時、私たちはどのようにこれを伝えるであろうか。この解決には様々な方法が考えられるが、代表的なものはジェスチャーやイントネーションを補助的に駆使することで、意図する内容を伝えようとするのであろう。

意外に思われるかもしれないが、言語学者たちは非言語的要素の使用がどのように曖昧性の解消に繋がるのかについて十分な答えを提供してこなかった。本書は我々が構造的に曖昧な表現をどのように表し、かつ理解するのかということをジェスチャーや韻律情報といった非言語的要素との関係から論じる研究書である。

本書は次のように構成される。第1章では言語研究における言語「外」の要素を取り入れることの重要性が導入される。第2章では認知的構文論と呼ばれる枠組みを概観した上で、言語外的要素の検討の必要性を論じる。第3章か

ら第5章では、構造的曖昧性をもつ表現の発話における、韻律情報、視覚情報（ジェスチャー）との関係、韻律情報と視覚情報の相互作用について実験データとともに論じられる。そして、第6章では言語外的要素が理解にどのような関係にあるのかについて実験データとともに論じられる。そして第7章ではまとめと今後の展望が論じられる。

本書の特色はその現象の身近さと興味深さだけでなく、その議論の緻密さもその重要な特色としてとりあげられる。本書はヒトの一般的な認知能力と言語表現の関係を探る認知言語学の立場から、興味深い現象の単なる観察を超え、従来の言語学的な分析の限界を指摘しながら、ジェスチャーや韻律情報がどのような形で我々の言語知識と関わるのかを論じている。このような言語のマルチモーダルな側面の重要性を捉えようとする研究は狭義の言語学の関心を越え、より広い認知科学的な関心をもつ読者にも多くの学びを提供するであろう。

また、近年の認知言語学では従来の定性的なテキスト分析を中心に据えた方法論の限界が論じられる中で、心理実験的手法などの量的な手法を採用することの重要性が論じられている。本書は心理実験を利用した研究のお手本ともいえるようなものである。理論言語学の議論の不足点を指摘し、それを解決するための手法として、量的な手法を提示するという流れを汲んだ本書は現象とその分析の興味深さという点だけでなく、今後の認知言語学者が見習うべきモデルケースを提示しているともいえるであろう。

* 岡久太郎さんは、2021年9月人間・環境学研究科博士後期課程修了、同年同月博士号取得。現在、静岡大学情報学部情報社会学科助教。

中元 洸太 = 著

評者・山路麻衣

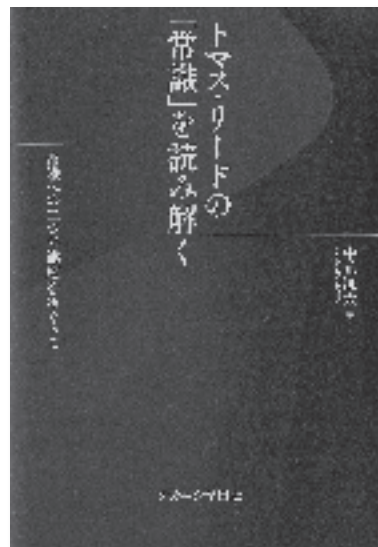
(京都大学吉田南総合図書館職員)

トマス・リードの「常識」を読み解く ——常識への二つの態度をめぐって

ナカニシヤ書店

定価 4,600円+税

2023年2月刊 250頁



「哲学って、将来就職する時に何かの役に立つの？ってよく聞かれるんですよ」と、ある院生さんに言われたことがある。きっかけは確かその人が大学院を出て就職が決まった話をしていた流れだった。「だろうな」とほぼ無意識に私はそう思ったのだが、その後その院生さんは、「哲学は社会で周囲と交わりながら生きる上でかなり汎用性の高い学問」だと予想外のことを言った。

本書は著者の博士論文を書籍化したもので、18世紀スコットランドの哲学者であるトマス・リードが打ち出す「常識」が、彼にとってどのような役割を担うものであったかを「動的性格」と「静的性格」の二つの側面から明らかにする研究書である。著者は学部生時代から一貫してリードをテーマに取り上げ研究を続けている。現代からも多く輩出されている哲学者を差し置き、近代に生きたリードの哲学を、著者はなぜ取り上げたのか。それは彼の打ち出す「常識」がさまざまな要因によって「より良いものに更新されていく（動的性格）」ものであることと、「誰にとっても弁えられるべき大切なもの（静的性格）」とされることが、遠い昔の話ではなく、今を生きる私たちの生活と照らし合わせて観察できるからである。

本書を読み終わって面白いと感じた点は、「精神の陶冶」のことを「他人とのかかわりを含めた体系的なものとして」リードが捉えていることだ。「陶冶」とは、「人間のもって生まれた素質や能力を理想的な姿にまで形成すること [日本大百科全書より]」である。これは「教育」とも言えるかもしれないが、本書を読む限りもう少し狭い概念で、人間しか持ちえない能力（道徳など）を磨くことを指しているのではないかと感じる。彼は陶冶を、生きる上で最初に身につける知覚から得られるもの、他人とのかかわりで得られるもの、外部からの配慮や意図を伴うものの3つの側面に分けている。「教育」と「反省」を繰り返し、精神機能を「改善」することで、社会生活（人生と言っても良いと思う）をより充実したものにできるなら、哲学はやはりただの学問で

はなく、実用的で不可欠な学問分野だと思える。このことが、本書を読んだ一番の収穫だったと思う。自分以外の他人とのかかわりによって、もともと自分が持っている考え方や思い込みに気づき、考えの違いなどによって起こり得る他人との摩擦を緩和し、社会生活をより生きやすいものに改善していく。リードのこういった考えは、日常的に私たちに起こる様々な問題や悩みを多面的に捉えるという方向へと導いてくれる。大学を卒業し、学問や研究を自ら行う環境から遠く離れ、日々社会人として仕事をする際、哲学が予想以上に日々の生活の見え方を充実したものに変わってくれることを再認識できた。

一つ疑問に思ったのは静的性格の位置づけである。著者は結論部分で動的性格を「ゴム紐」に、「静的性格」を今ある揺るがぬものとして「鉄」に例えている。ただし、別の章にて「静的性格」は「人が追い求めるものである」とも記されている。とすると、静的性格には「鉄」の側面だけでなく、「伸びたゴム紐の先にあるもの」という別の見方もできるのではないだろうか。

最後にもう一つだけ感想を書きたい。異なる考えや意見が生まれる理由を、異なる原理を持つためだけでなく、個々が育んできた先入観によるものだ、というリードの考察を読んだ際、駆け足になりがちな生活の中で、一呼吸おいて俯瞰し、物事に向き合うことの必要性を認識させられた。難解な内容ではあるが、本書を読み終わった時にはきっと何か自分にとって大切なものを見つけてもらえるのではないかと確信している。

* 中元 洸太さんは、2022年3月人間・環境学研究科博士後期課程修了、同年同月博士号取得。現在、大阪工業大学及び森ノ宮医療大学・非常勤講師。

山根直子＝著

評者・峯村至津子

(京都女子大学文学部国文学科教授)

『尾崎翠の詩学』

臨川書店

定価 4,290円

2023年3月刊 300頁



本書の表紙には、グスタフ・クリムト「メダ・プリマヴェージュの肖像」が配されている。両足を広げて立ち前方を見つめる少女。その両手は背後に回されて我々には見えない。目に見える物語の背後に潜む無言化された物語の存在——エレイン・ショーウォーターらによる女性作家の小説をめぐる指摘を援用し、本書の著者山根直子氏は、尾崎翠（1896～1971）の作品が、女性に求められる生のあり方を拒否するマイノリティが抑圧の中で自己の表象を企てる手立てに覆われていることを看取り、その意味を読み解いて〈隠された物語〉を顕在化させようとする。

翠の活動は大正末期から昭和初期の短期間、残した著作の数も少ないが、林芙美子をして「一度読めば恋よりも憶ひ出が苦しい」と言わしめた如く、同業者をはじめとする一部の人々の心に忘れ難い印象を刻んできた。翠作品が読者にもたらした心的体験は如何にして可能になったのか。本書は、「第七官界彷徨」「歩行」「こほろぎ嬢」「地下室アントンの一夜」の代表作四作のモチーフ・生成過程・構造を分析し作品を解釈することでその秘技に迫り、翠の作品を一部の愛好者の手からより開かれたものへと解き放つことを目指す。

最新の研究動向を踏まえ、翠の著作を辿りつつ生涯と創作活動を捉え直した序章では、後年の作品の源流となる志向の出現について確認がなされ、翠の創作活動の基盤となった内外の思潮が整理されて、翠を知る為の基礎文献として有益である。説明的・理智的表現に飽き足らず象徴を志向した有島武郎「詩への逸脱」（1923年）への翠の共感を重視する著者は、翠の「詩学」（＝文学的方法）考究の鍵として、象徴・追憶・告白・分心・対話の五つを提示、それらを全五章で検討しつつ、〈隠された物語〉を炙り出してゆく。

第一章では、「第七官界彷徨」に登場する「藪」の種類の特定から導かれた「雌雄同株」という性質を根拠に、作品内の「藪の恋」が象徴するものを、両性具有の恋＝生殖に繋がる肉体関係を排除した、心に生じる「影」への恋で

あると結論づける。「こほろぎ嬢」に登場する女主人公が通う図書館のモデルの確定とその実態との対比から、女主人公と会話を交わす「産婆学の暗記者」が幻覚であるとの指摘に至る第三章なども同様に、作品内の細部への着目が光り、同時代資料を博捜しての綿密な考証と作品本文の精読とによって新説を提示してゆく手際は新鮮である。続く第四章では、翠が、自身が傾倒したスコットランドの小説家ウィリアム・シャープの手法（女性名フィオナ・マクラウドによる創作）に想を得、更に創意を加えて、女主人公（≡作者）の複数の「分心」を語り手とし、当時幻覚に悩まされていた翠自身を女主人公に仮託して、幻覚を相手とする〈声なき言葉による告白〉などの複数の言説を並置した作品として「こほろぎ嬢」を読む。自己表現欲求とその抑圧の下での作者の煩悶を如実に表し、単一的・絶対的な視点を退けて独自の私小説的手法を見せた作品である、との主張も一定の説得力を持つ。総じて翠作品の用例や同時代の文壇の状況に目を配って考証を重ねる研究態度は手堅く、作品本文の精読に重きを置く姿勢は作者からの呼びかけに応答すべく誠実である。考証の厳密さと解釈や文章に漂う瑞々しさ、その落差に山根氏独自の個性が宿る。

「地下室アントンの一夜」を、「分心」との「対話」を通して単一的自己を解体し日常を無化する祝祭的空間とする第五章など、ユーモアと軽みを漂わせ、そこから得られる清涼感などの読書体験をもたらす翠作品の性格が鮮やかに捉えられている。深い煩悶が求める強靱なユーモアや「分心」・連作等の手法などについて、先行・同時代・後続の他作家の作品との具体的比較があると、その「独自性」がより明確になるだろう。今後の発展が期待される。

*山根直子さんは2021年3月人間・環境学研究科博士後期課程修了、同年同月博士号取得。現在、京都大学文学連携研究者、国際高等研究所特任研究員、京都女子大学、同志社大学、同志社女子大学にて非常勤講師。

雑賀広海＝著

評者・鷺谷花

(一般財団法人大阪国際児童文学振興財団特別専門員)

『混乱と遊戯の香港映画 ——作家性、産業、境界線』

水声社

定価 4,950円

2023年3月刊 365頁



1970年代の李小龍（ブルース・リー）への熱狂以来、あるいは、ことによると1960年代に、東宝が香港・電懋との合作を開始し、電懋の看板スター尤敏（ユー・ミン）を招聘して、『香港の星』（千葉泰樹監督、1961年）以下の一連の合作映画を製作して以来、香港映画とそのスターたちの魅惑は、長年に渡って日本の観客を惹きつけてきた。香港映画に関しても、すでにかなり膨大な日本語の文献の蓄積があるが、その中心を占めてきたのは、本書も指摘しているように、ファンによる、ファンに向けた趣味のテキストだった。その一方で、日本語のアカデミックな映画研究の側から香港映画に向けられる関心は比較的稀薄であり、個別の作家・作品論の枠組みを超える香港映画論が発表される機会は乏しかった。

したがって、地元映画産業の繁栄がピークに達し、世界的なファンダムの規模も爆発的に拡大した時期にあたる1980年代の香港映画界の創造的な狂騒状態を、ほとんどが日本語未訳の豊富な英語及び中国語文献を読み込んだうえで、俯瞰的に記述しつつ、ジャッキー・チェン、ツイ・ハーク、ジョニー・トーという、この時期を代表する「映画作家」3名が、それぞれに「作家性」を確立するにあたっての試行錯誤を解きほぐそうとする本書は、日本語で書かれた香港映画論の画期をなす著作であることは間違いない。本書の序章で語られるように、著者は、ジャッキー・チェンの出演作品を通じて最初に香港を知ったファンとしての視点をもちつつ、上述した3名の映画作家の1980年代～90年代の作品の詳細な分析を試みている。ファンによるテキストと、個別の作家・作品論は、先述したように、香港映画に関する日本語文献の中心を占めてきたが、そうした従来からのアプローチを、より包括的な地域の映画文化及び映画産業の歴史記述と結びつける試みとしての本書の意義は大きい。

本書の全編を通じて、1970年代以前の香港映画界では確立していた「父」としての監督と「子」としての俳優の関係が、1980年代には、配給会社と製作会社の力関係の

変化や、80年代を代表する映画会社のひとつであるシネマシティの集団制作方式などによって、「監督」の職分の不安定化によって困難となり、そうした「父子関係」の危機に対するリアクションから、各自の「作家性」が形成されてゆくという分析がたびたび示される。1980年代の香港映画界の「監督」の職分についての本書の議論には、興味深い点も多々ある。しかし、ここでの「父権的」「父子関係」概念はかなり抽象的であり、現実とフィクションの世界の別を問わず、年齢と権力の差のある男性同士の関係について幅広く適用されるため、いささかの濫用傾向がある。たとえば、ジョニー・トーが独自の作家性を確立するきっかけとなった初期作品のひとつとして取りあげられる『過ぎゆく時の中で』阿郎の故事（1989年）は、チョウ・ユンファ演じる主人公が、「規範的な父親になることに失敗してしまうという物語」（234頁）として説明される。ところが、シルヴィア・チャン演じるもう一方の主人公が、アメリカに移住して映像作家として成功した後、CM撮影のために香港に帰還し、オーディションで過去にチョウ・ユンファとの間に設けた実の息子と偶然に再会し、主役に抜擢するという、「母親である映像作家が子との絆を回復しようとする物語」については一切言及されない。『過ぎゆく時の中で』の分析に顕著であるように、「監督」と「俳優」の関係を、「父親」と「息子」の関係に見立てる本作の記述に、「母親」及び母をめぐる関係への関心は薄い。そこには、香港映画を、「男たちの絆と闘いについて語る、男たちのための映画」の側面に還元する従来からのステレオタイプを上書きする危うさもあるのではないか。

* 雑賀広海さんは、2020年3月人間・環境学研究科博士課程修了、同年同月博士号取得。現在、日本学術振興会特別研究員PD。

人環図書 — 教員自らが語る新著 —

Transborder Los Angeles: An Unknown Transpacific History of Japanese-Mexican Relations

徳永悠著

University of California Press, 2022年10月



本書は、第二次世界大戦前にロサンゼルス郡内で暮らしていた日本人移民とメキシコ人移民の関わり合いに光を当てて、移民社会における人種的また階級的境界の性質について環太平洋史 (transpacific history) の観点から論じるものである。1924年のアメリカ移民法 (排日移民法) から1942年の日系人強制収容までの間、当時ロサンゼルス郡の主要産業の一つであった農業においては、日本人借地農が白人地主

から土地を借り、メキシコ人農業労働者を雇うという人種と階級の三層序列関係 (triracial hierarchy) が形成されていた。この特殊な序列関係は、環太平洋地域の地域的な諸要因と国際的な諸要因を絡み合わせながら、ロサンゼルス郡の農地において人種エスニック集団間の対立だけでなく、相互理解や歩み寄りの契機も同時に生み出していた。本書は、このような移民集団間の関わり合いの歴史を通して、排日移民法、世界恐慌期の農場ストライキ、日系人強制収容、そしてブラセロ計画といった歴史的に重要な諸事象の密接な関係を明らかにしながら、移民社会における人種的また階級的境界の流動性について論証する。そして、在米メキシコ人移民と在米日本人移民がロサンゼルス郡の農地においてそれぞれ経験してきたことを、別々の移民集団の歴史ではなく、一つの環太平洋史として描く。(徳永悠)

[Paperback 274頁] \$29.95

『我々の星のハルキ・ムラカミ文学 惑星的思考と日本的思考』

小島基洋、山崎眞紀子、高橋龍夫、横道誠編著

彩流社 2022年10月



村上春樹の小説は、今や米国発の「地球」文学ではなく、日本発の「惑星」文学としてある——G・C・スピヴァクならそう言ったかもしれない。本書の巻頭論文でジュリンスカ=エリオットは、村上文学が英語版や米国文壇を経由することなく、ダイレクトに各言語に翻訳されていく様を描き出している。日本語で書かれ、日本を舞台とする村上の作品は、この「惑星」の隅々まで流布していく。

では、なぜ村上春樹だけが、こうも容易く言語と文化の壁を越えていくのか——このような問いを「惑星」の住人たる我々は発さざるを得ない。その未知なる答えを探索するのが本論集の目的である。

論点は以下の四点、①翻訳、②歴史/物語 (hi/story)、③海外作家、④紀行に整理される。横道誠氏は日本語から直接「翻訳」された『国境の南、太陽の西』ドイツ語版の秀逸さを論じ (2章)、内田康氏は「物語」論的観点から「喪失」と「父殺し」の二つのコードに着目し (5章)、ジョナサン・ディル氏は『風の歌を聴け』に「海外作家」フィッツジェラルドの影響を見出し (7章)、山崎眞紀子氏は『ノルウェイの森』が「紀行」『遠い太鼓』と共に古都ローマで執筆された意味を探る (9章)。(小島基洋)

[A5判 344頁] 2,970円

『文化冷戦と知の展開—アメリカの戦略・アジアの論理』

森口 (土屋) 由香、川島真、小林聡明編著

京都大学学術出版会 2022年11月



冷戦期、アメリカ政府および民間財団は、東アジア地域で生み出されるアカデミックな知や科学技術知、そしてジャーナリズムなどの専門知の構築に深く関与していた。本書は、日・韓・中・台・米の研究者たちが、冷戦期東アジアの知的生産における大国のヘゲモニーと地元のエージェンシー (行為主体性) に深く切り込む実証研究論集である。さまざまな国や地域の事例を俯瞰することで、それらに通底する共通

項と地域特性の両方が浮き彫りになるだけでなく、大国の論理の脆弱性や、弱小アクターのもつ力、そしてローカル事情によって援助の内容や意味が変容する様子が可視化されている。

第I部「地域研究」では、フォード財団による中国・台湾研究への支援や、アメリカにおける日本研究および韓国・朝鮮研究の成立経緯、また「近代化論」をめぐる日米の対立などが扱われる。第II部「科学技術」では、中国の原子力研究、アメリカから台湾への原子力技術援助、英国の原子力外交、非武装地帯 (DMZ) における米韓合同生態系調査、台湾の対ベトナム農業開発支援などに焦点が当てられる。第III部「ジャーナリズム」には、アメリカによる台湾、香港、韓国、日本へのジャーナリズム教育支援についての論考が所収されている。(森口 (土屋) 由香)

[A5上製 466頁] 5,060円 (税込)

『おとなは子どもにテロをどう伝えればよいのか』

ターハル・ベン・ジェルーン、西山教行訳

柏書房 2022年11月



2001年のアメリカ同時多発テロ以来、テロ事件は世界各地で頻発している。フランスでは2015年1月にシャルリーエブド襲撃事件、11月に同時多発テロ事件などが発生し、フランス政府は全土に非常事態宣言を出した。その恐怖は現在も完全に消え去ったわけではない。

テロはいつ、どこで、誰に向けて発生するかわからない。これがテロリストの狙いであり、テロリストは社会に不安と混乱

を巻き起こすことを狙っている。しかしテロはなぜ発生するのか、若者はなぜテロリストになるのか、このような疑問に答えるのは容易ではない。

著者のベン・ジェルーンは、モロッコからフランスに移住し社会学の学位を持つジャーナリスト、作家で、現在では油絵やデザインなどアーティストとしても活躍している。本書はフランスの中学生との対話形式の著作で、平明なことば遣いで複雑な課題に答えることをめざしており、テロリズムをめぐる対話を通じて、現代世界の中でのイスラームのあり方、フランス社会における宗教の位置づけ、ライシテ (政教分離) の原理に迫る。日本では大学生以上の一般読者の知的関心に応えるに違いない。(西山教行)

[四六判 202頁] 1,980円 (税込)

『政策と情報』

佐野亘・山谷清志監修、岡本哲和編著
ミネルヴァ書房 2022年11月



「自著」といっても、監修者としてかかわったに過ぎないのですが、せっかくなので紹介させていただきます。最近はやりのDXに象徴されるように、公共政策と情報は切っても切れない関係にあります。ところが「情報」の観点から政策について考える、という試みはこれまであまりなされてきませんでした。せいぜいのところ情報化政策みたいなテーマで捉えられ

ながら、適切な情報なしに適切な政策をつくることはできません。また政策の内容も、一般の国民・市民に情報としての的確に伝わる必要があります。そういう意味では、一種のコミュニケーション過程として政策過程全体を捉えることもできるでしょう。この本は、第一部「情報のための政策」と第二部「政策のための情報」によって構成されていますが、この構成そのものが政策と情報が循環的な相互依存関係にあることをよく示しています。政策と言えば環境政策や福祉政策といった個別の政策が想像されやすいのですが、情報という視点を導入することで見えてくるものもありそうです。政策に興味がないひとが読んででも意外な発見があるかも。(佐野亘)

[A5判 224頁] 3,300円(税込)

『たえる・きざす—生態人類学は挑む SESSION 6』

伊藤詞子編、風間計博著(分担執筆)
京都大学学術出版会 2022年12月



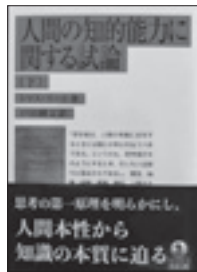
日本の生態人類学は、1970年代に京都大学と東京大学の研究者が中心となって研究会を開催したことを嚆矢とし、今日に至っている。版元は、過去にも生態人類学講座を刊行しているが、本書を含む「生態人類学は挑む」シリーズを新たに企画した。ここで「挑む」とは、産業革命以降、人類の営みが地球環境に過大な負荷をかけ続け、環境破壊や気候変動が深刻化した現代世界において、生態人類学の可能性を模索する

研究者たちの苦難と意志を示した言葉である。人新世とよばれる時代が到来し、近代西欧的な認識論を前提とした「自然と文化」の二分法が瓦解した状況下、他の生物たちとともに在る人類は、いかなる針路をとるべきだろうか。編者の伊藤は「序」のなかで、本書のタイトル「たえる・きざす」に言及しながら、混沌の時代を生きること(死ぬこと)の意味を問うている。人間中心主義を批判する思想潮流のなかで、生態人類学は、人間と非人間(動植物、菌やウイルス、モノ等)の織り成す複合的世界をいかに捉えることが可能なのか。生態人類学は従来、自然科学的思考に傾斜する向きがあったが、本書では狭い枠組みを超えて、霊長類学から文化人類学まで分野を横断した著者たちが、環境変化のなかで生きること(死ぬこと)について論じている。(風間計博)

[A5判 344頁] 3,520円(税込)

『人間の知的能力に関する試論』(上)(下)

トマス・リード、戸田 剛文訳
岩波書店(岩波文庫)2023年(上・下とも)



本書は、スコットランド常識学派の代表的哲学者と言われるトマス・リードの原著を翻訳したものである。本書においてリードは、近代の代表的な哲学的理論である観念説が懐疑論に至るといふ考えのもと、それを論駁するために、時には古代の学説にまで辿りつつ、デカルトにはじまる近代哲学の流れを編みつつ批判していく。

一方で、リードは、人間の知識の出発点として常識に基づく原理を設定し、人間の知識体系の構造を明らかにしようとする。リードの哲学はまさしく「常識」というものを重視するため、日常的なその概念のイメージもあり、しばしば過小評価されてきた哲学者である。実際に、日本でもリードに関する研究を見ることは、(今でも非常に少ないが)私が学生の頃は本当に珍しかった。

しかし、そういう哲学者であるが故に興味を持ち読んでみると、なかなか面白く、また後代に与えた影響も大きい哲学者であることがわかってきた。とにかく日本で読める文献が少ないので、15年くらい前から少しずつ訳し始めてようやく出版にまでこぎつけることができたのが本書である。長大な本の翻訳がいかに難しいかということはこの邦訳では思い知った。後になって「あ・・」というところもいくつかあるが、分厚い文庫を並べて見るとやはり感慨深いものがある。(戸田 剛文)

[上632頁 下662頁] 上1,650円 下1,848円

『近代中国の国家主義(ナショナリズム)と軍国主義(ミリタリズム)』

小野寺史郎著
晃洋書房 2023年1月



日清戦争の敗北後、清は本格的に政治改革を開始し、西洋や日本をモデルとして近代国家の建設と徴兵制の導入を図った。しかしその過程は、先行して西洋の制度を導入した日本と比べ、はるかに大きな困難を伴った。近代中国において、こうした困難にまず対処しようとしたのは、少数のエリートである知識人たちだった。彼らはさまざまな立場に分かれて、国民と国家の関係、社会と軍隊の関係、民衆と知識人の関係はいかにあるべきかをめぐり論争を繰り返した。

1920年代に成立し、現在の中華人民共和国まで続く政党国家体制や党軍という仕組みは、こうした論争の一つの帰結と言える。しかし、それらによって近代以来の中国の国家・社会・軍事をめぐり問題が全て解決されたわけではない。

そのため本書は、これらの問題をめぐり清末から1920年代の知識人たちの議論に立ち戻り、そこで何が問題となったのか、当時の国内的・国際的条件が議論の枠組をどのように規定していたのかを検討し、その特徴を明らかにした。

ただ、これらの議論がどのように後の政党国家体制や党軍の構想につながったのかという最も重要な点については、本書では十分に論じることができなかった。今後の課題であり、さらに検討を深めていく必要がある。(小野寺史郎)

[A5判 204頁] 4,620円

『啓蒙の弁証法』を読む』

上野成利・高弊英知・細見和之編
岩波書店 2023年1月

ホルクハイマーとアドルノの共著『啓蒙の弁証法』(1947年)は思想史的には「名著」と位置づけられていて、私もそう思っているのだが、いざ、演習などで使うといこうに進まない。私の恩師の徳永尙先生が長年かけて訳されて、この種の本としてはベストセラーに匹敵するように版を重ねている岩波文庫版をテキストにしても、受講生の質問に答えてゆくうちに、時間が瞬く間に過ぎてゆくのだ。それでその分かりやすい解説書を、と編者一同は願っていたのだった。

発端は2003年で、当時北海道大学に在職中だった高弊英知さんを中心に「批判理論研究会」が立ち上げられたのだった。しかし、担当していただくはずの編集者が亡くなったり(当初は岩波書店以外の出版社と相談していた)、研究会が解散を余儀なくされたりして、しばらく立ち消えになっていた。20年近くをへて、ネジを巻きなおすようにして編者で相談し、新たに執筆者を検討し、執筆者全員によるオンラインでの編集会議を何度かもった。

全体はⅡ部構成で、第Ⅰ部は「テキストを読む」、第Ⅱ部は「コンテクストを読む」。訳者の徳永先生にも寄稿いただいて、執筆者は編者をふくめて11名。この分野を代表する研究者を集めることができたと自負しているが、それだけに「解説入門書」にしては難しい論考もある。そういう論考を読むためには、さらなる解説本が必要かもしれない。

ともあれ、教員学生を問わず、『啓蒙の弁証法』が積読状態になっていないかたには、是非とも本書の併読をお勧めしたい。(細見和之)

[四六判 202頁] 2,750円

『冬物語』

シェイクスピア、栗山智成訳・解説
岩波文庫 2023年2月

『冬物語』はシェイクスピアの単独作として最後から二番目に当たる。物語はシチリア王リオンティーズの苦悩で始まる。彼は親友ボヘミア王が王妃と浮気したと思ひ込み、彼女を投獄し、生まれた赤子も荒地に捨てさせる。しかし裁判の場で、幼き王子が母の身を思うあまり死に至ったとの知らせが入ると、彼は一連の確信が思い込みだったと認識する。一方、王子の死を知った王妃はその場で意識を失い、やがて

彼女の死が告げられる。その後、時と名乗るキャラクターが突然登場し、作者である自分がこの物語を16年先に進め、場面をボヘミアに移すと宣言する。赤子は優美な女性へと成長し、偶然にもボヘミア王子と恋に落ちている。果たして二人は結ばれるのか、過ちを悔い続けるリオンティーズに救いは訪れるのか…。本作が描くのは、時の大きな物語の中で全体像も部分も把握できぬまま生きねばならない人間の姿や、真実を掴もうとして自分の生みだす物語に翻弄され孤立してしまう人間の「冬」である。しかし、互いの命に暖を取りつつ、物語を語り合い、信じ合うことで「冬」を越せる可能性も示されている。一連の悲劇の後にシェイクスピアが示したのは、こうした生の物語性、人間知の限界、そして共生への希望であった。(栗山智成)

[文庫 300頁] 850円+税

『ドイツ語圏のコスモポリタニズム—「よそのもの」たちの系譜』

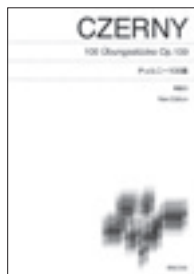
菅利恵編
共和国 2023年2月

コスモポリタニズムはしばしば懐疑や反発を呼び起こす。「世界」や「人間」を掲げる普遍主義的なそのかまえに、欺瞞と排他がつきものだからだ。けれども、そうしたかまえこそが、異端的な存在に生きのびと自己主張の道を開くこともある。18世紀末のドイツ語圏においてコスモポリタニズムは、「いま、ここ」の論理に絡めとられまいとする知性のための観念的な拠点

だった。カントら啓蒙の知識人にとってそれは公共性の理念的な支えだったし、ロマン派にとってそれは「いま」を超えて生を革新するための条件だった。19世紀が進み、「いま、ここ」が国民国家の色に染め上げられてゆくと、コスモポリタニズムはそこに収まらない存在や事象のための受け皿となる。さまざまな「よそのもの」たち—たとえば国民意識の高まりにゆれるユダヤ人、あるいは富国強兵の世相になじめない芸術家、または故郷を追われた亡命者—が、脱領域的な広がりの中で自分や世界をとらえなおそうとした。普遍の欺瞞を可視化させることは大事だが、同時に、生をできるだけ普遍的に肯定するための言葉や論理も、常に意識的に鍛えておかねばならない。「よそのもの」をキーワードにドイツ語圏の事例を8人で追った本書は、後者の課題のために編まれた論集である。(菅利恵)

[菊変型判 336ページ] 3,960円(税込)

『チェルニー 100番』

上田泰史著(解説)
音楽之友社 2023年3月

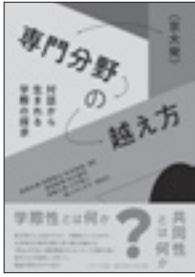
ピアノ練習曲の代名詞カール・チェルニー(1791～1857)はベートーヴェンの弟子で、生涯に作品番号付の曲だけでも861曲を書いた多作家である。だが、その名はもっぱらピアノ練習曲によって知られている。日本ではチェルニーの練習曲集を「30番」や「40番」のように、各曲集を構成する曲数によって呼びならわしている(これは演目数を「番」と数える伝統芸能の慣習に由来するのだろう)。

交響曲や室内楽、浩瀚な作曲教本をも手掛けているチェルニーとあって、彼の練習曲の中には機械的な練習に留まらず、作曲様式に即した演奏表現法の習得を目指すものも少なくない。「100番」(1827年初版)は、様々な演奏技法と様式を含む100の小曲で構成されている。学習者が各曲の様式を把握するには、音楽史的観点からの解説が不可欠である。当時どのようなオペラや舞曲が流行していたのか、その歌唱の旋律がイタリア風なのかドイツ風なのか。様式やジャンル視点から練習曲を解説する曲集はこれまで殆どなかった。この曲集では、同時代の文化的文脈を踏まえ、初学者が指導者と共に様式に即した表現を追究する上で参考となる楽曲を例示しながら、各100曲の特徴を簡潔に解説している。(上田泰史)

[菊倍判 96頁] 1,540円

『(京大発) 専門分野の越え方：対話から生まれる学際性の探求』

萩原広道・佐野泰之・杉谷和哉・須田智晴・谷川嘉浩・真鍋公希・三升寛人編著、総人のミカタ編集協力
ナカニシヤ出版 2023年3月



はじめに、本欄への掲載を快諾して下さった編集委員のみなさま、そして、本書のもととなった「総人のミカタ」(以下、ミカタ)の活動に、さまざまな形でかかわって下さったすべての方々に感謝を申し上げます。

本書はミカタの活動を端緒として編まれたものだが、単なる活動報告ではない。というのも、過去の活動はすでにウェブページや報告書で公開しており、改めて書籍化する意義はないからだ。そうではなく、私たちは本書で、ミカタの活動を通して得られた気づきを、より普遍的な問題へと接続しようと試みている。それが、本書の中核となる「学際性」と「共同性」という二つのテーマである。

この二つのテーマをめぐって、本書には、ミカタの運営に携わったメンバーの論考だけでなく、外部の研究者を招いての二回のシンポジウムの様子と、登壇者の論考が収録されている。また、メンバーの論考には別の専門分野の院生からのコメントと、それへの応答を付加し、さらに、ミカタの発足に影響を与えた教員・先輩や、初期メンバーが人環を離れた後の運営に携わっている教員・院生にも寄稿していただいた。このように、本書は、総勢二十八名の執筆者が、さまざまな場面で対話を繰り返す珍しい構成となっている。

もっとも、本書で展開されている対話は、一つの結論へと収束しているわけではない。むしろ、読者はいたるところで、論者のあいだにさまざまな主張の差異を見つめることになるだろう。だが、こうした差異こそが対話を駆動させ、一人では決して辿り着けなかった場所に導き、思いもよらなかった景色を見せてくれることを、私たちは知っている。そのことを、身をもって体験したのがほかでもないミカタの活動であり、本書の執筆・編集作業だったからだ。だから今度は、本書を通して、読者に少しでも新しい風景を見せることができればと思う。とりわけ、本書の、そして本書との対話が、「学際越境」を旗印にヴァージョンアップした総人・人環のこれからの寄与することを、編者として、卒業生として、願ってやまない。(真鍋公希)

2017年4月に総人／人環で活動が開始された「総人のミカタ(以下、ミカタ)」という教育実践活動をもとにした書です。ミカタは、大学院生によって自主的に始められた活動であり、人環の様々な分野の大学院生たちが、主に学部生(総人生)に向けて、自分たちの専門分野からのものの見方や考え方を講義形式で提供し、また同時に、学部生や大学院生に寄り添う味方になることを目指した場です。

本書は、ミカタの創設メンバーである当時の人環の大学院生たちが中心となって執筆したものです。ミカタの活動が開始された背景やその意義をはじめ、人環のもつ「学際」的な性質や、「研究を語る」という観点にも焦点が当てられています。また、ミカタの活動を通して生まれた、普段接点ない他分野の大学院生同士が交流するコミュニティの可能性についても言及され、共同性という観点から、人間関係を作る場の形成や維持・発展といった、より一般的な話題にまで議論が展開されています。

単なるミカタの活動報告書ではなく、彼らが考える学際とミカタの活動を見つめ直すことで、より普遍的な問いに迫り、「学際」的なあり方の可能性を探求する一冊となっています。(萩生翔大)
[A5判 290頁] 2,970円

『観念説と観念論——イデアの近代哲学史——』

佐藤義之ほか編著
ナカニシヤ出版 2023年3月



本書のタイトルのうち、「観念説(theory of idea)」、「観念論(idealism)」に共通の「観念(idea)」という語は、語源的には古代ギリシアのプラトンの「イデア」概念に遡る。

イデア概念は決して心の中のものに限られはしないのであるが、近代初頭、デカルト、ロックらによってそれが「心の中の観念」として位置付けられるようになった。「心の中の観念」というとらえ方を中心に

した認識論のモデルが「観念説」である。以後の哲学において、彼らの学説一般への賛否にかかわらず、観念説は広く共有され決定的な影響力をもつようになった。そして「心の中の観念」を外界とどうかかわると考えるかが哲学の核心的な問いとなるに至った。「観念論」も観念を解釈する試みのひとつの極限的な形だといえる。

本書は近代以降の西洋哲学を規定した核心的な論争である「観念」をめぐる論争を追ったものである。とりわけ「観念説」という語については耳慣れない方が多いかもしれないが、そのことは本書のような試みがそれだけ斬新であることを示している。

執筆者はそれぞれの哲学者についてすでに声望のある専門家に依頼した。重厚な布陣で、ひとつの核心的テーマを描き出せたと自負している。(佐藤義之)

[A5判 180頁] 2,970円(税込)

『世界居住文化大図鑑一人と自然の共生の物語』

サンドラ・ビシク編、本間健太郎・前田昌弘監訳
柘風舎 2023年5月



本書は、世界各地のヴァナキュラー建築を豊富な写真とともに解説した大著『HABITAT: Vernacular Architecture for a Changing Climate』の全訳である。ヴァナキュラー建築とは、地域の気候や立地、人々の生活や文化に応じてつくられる建築であり、そこには何世紀にもわたる人々の知恵が埋め込まれている。本書はこれらを単に懐古的に伝えるのではなく、むしろ持

続可能な未来に向けた教訓を与えてくれる存在として紹介している。この一冊だけで、過去から現在にいたる、世界中の住まいを旅することができるだろう。

地域の気候によって、対処すべき環境条件が定まり、手に入る建材も限定されるため、気候ごとに似通った建築がうまれる。このような、いわゆる「風土論」が本書に通底する思想である。しかし同時に、その環境応答の驚くべき多様性も、本書を通読したときに感じられる。そこに風土論だけでは説明しきれない人間の独創的な構想力が表れている。

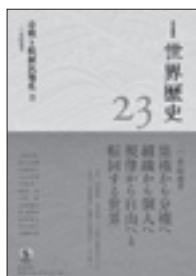
本書はまた、世界各地の貴重なヴァナキュラー建築と居住文化が失われつつある現状を切実に伝えている。その背景には近代化に伴う開発や気候変動の影響があるわけだが、ヴァナキュラー建築はそのような危機的状況にさえ適応し、進化している場合がある。このような「人新世」の時代における人と自然の共生のあり方も本書から学ぶことができる。(前田昌弘)

[B4変型判 496ページ・フルカラー] 20,900円(税込)

『冷戦と脱植民地化Ⅱ 20世紀後半（岩波講座 世界歴史 第23巻）』

中野聡編

岩波書店 2023年6月



一般にポスト冷戦期と呼ばれる1990年代以降の世界秩序は、ロシアによるウクライナ侵攻やイスラエルによるガザ侵攻によって大きな転換点を迎えたといえる。この30年間を規定してきたものは、冷戦終結をアメリカ（西側）による勝利として捉える冷戦勝利史観であった。

1997年以来、戦後3回目の刊行となった今回の岩波講座『世界歴史』は、グローバル・ヒストリーの視座や非国家主体の当事

者性を重視しつつ、マイノリティや文化といった概念が歴史において持った意味を深く理解することを意識して編集されている。

冷戦の最中に展開された東西文化外交について論じた担当章では、米ソ両国が相互に音楽家やバレエ団を送り込んだ背景、両政府の思惑、参加した芸術家の動機、観客や批評家の反応を考察した。グローバルに展開された文化外交の特質を批判的に検討することは、文化の解釈をめぐる国家、芸術家、批評家との間に生まれた摩擦の存在を明らかにする。それは同時に、冷戦がアメリカ文化の勝利に終わったと主張する冷戦勝利史観を批判的に捉え直す視座を提供するのである。（齋藤嘉臣）

[A5判 324頁] 定価3,520円

Faktum, Faktizität, Wirklichkeit. Phänomenologische Perspektiven.

Inga Römer, Georg Stenger 編、安部浩著（分担執筆）

Felix Meiner 2023年7月



ドイツ現象学会が機関誌 Phänomenologische Forschungen の別巻第五集として刊行した論集。一方では「ポスト・ファクト」やデジタル化等が齎した「リアルな事実」の権威の失墜、他方では（寄稿者の一人である M. ガブリエル氏のそれを嚆矢とする）「新実在論」における「現実」の概念を刷新する機運。本論集は、かく錯綜せる昨今の新思潮に対峙しつつ、狂瀾を既倒に廻らすべく、「事実・事実

性・現実性」を巡る種々の問題の再考を「現象学の諸観点」から試みる二十二篇の論文を収録したものである。

右の問題設定の下で、2019年にウィーン大学にて同学会大会が開催された際、筆者は基調講演者の一人として御招きに与った。その折の拙話を増補改訂した愚論“Was ist Wirklichkeit? Watsuji phänomenologisch denken”では先ず、本邦の近現代哲学の存在理由——すなわち日本哲学は、西洋哲学に対して、後者の立場を理論的に「基礎づける対立項（ein fundierendes Gegenstück）」たらんとするものであること——について論じた。次いでその証左として、フッサールとハイデガーにおける「現実性」の概念を闡明した後、かかる泰西の現象学の立場に対して、和辻哲郎の思索が有する意義——すなわち和辻倫理学に所謂「絶対空」が前述の「現実性」概念を論理的に下支えするものとして解される所以——を詳らかにした。（安部浩）

[版型 15.24×2.82×22.86cm 496頁] 136€

『インクルーシブ教育ハンドブック』

ラニ・フロリアン編、倉石一郎・佐藤貴宣・渋谷亮・濱元伸彦・伊藤駿監訳

北大路書房 2023年8月



友人たちと語らって始めた翻訳が、3年越しでようやく刊行された。原著は総ページ数982頁もあり、全訳は不可能だったため泣く泣く落とした章も多数ある。それでも立派に「鈍器本」になってしまった。けれど、監訳者全員がいちばん悶絶したのは、実は原著タイトル“The SAGE Handbook of Special Education”の special education という言葉をどう訳すかだった。

本文中には全編にわたりこのタームが頻出する。「特別教育」が順当な訳なのだが、私たちは「特殊教育」との間でずいぶん迷った。結果的には、原則「特別教育」とし、歴史的な文脈で登場する場合には例外的に「特殊教育」とすることもアリとした。特殊教育とは、子どもの障害の有無で教育の場を分けたり、障害を理由として教育の対象外にすることが普通であった時代によく使われていた言葉である（そして現在の日本は未だこの状況を抜け出していない）。それに対して、世界標準の special education では、障害があってもできる限り同じ学級、同じ学校で教育を行うことを原則とし、分離別学に安易に走らずそれは最後の手段にとどめるという考えに立つ。これが邦題のインクルーシブ教育なる名の所以だが、その特徴は単に「分けない」ことだけにとどまらない。障害をもつ子ども以外に、たとえば貧困、移民的背景、性的指向といった種々の要因から、教育の場で周縁化されたり学習に困難を来しがちな子どもまで視野に入れ、かれら全てに必要な支援を積極的に行うことが含意されている。英国ではこうした「特別教育」を受けている子どもは全体の20%程度にまで及ぶ。

いまだ「特殊教育」段階にとどまっている日本の特別支援教育が、世界標準の特別教育（インクルーシブな教育）に一日も早くアップデートしてほしいという思いで本書を訳した。片手で支えるには少し重い、ぜひ本書を手に取り中身を受け止めていただきたい。（倉石一郎）

[A5上製 864頁] 13,200円（税込）

『ドイツ語のことわざ—聖書の名句・格言の世界』

河崎靖著

松籟社 2023年9月



ことわざには、民族の精神が反映されており、中には人類の知恵が詰まっている。言葉のあやによりイメージをふくらませ、言いたい内容を強く印象づける表現ができ、併せてその表現力が豊かになる（例：「宗教は民衆の麻薬である」）。このイメージは言語が異なれば、言語ごとに違わずであるけれども、こうした相異を超えてどの母語話者にも共通の感覚というものがありそうな印象も一方で持ち合わせている。

どの言語にも各々よく用いられる言い回しがあるが、着想の根本が意外に類似している場合が少なからずあり驚きさえ覚える（「猫に小判」、「豚に真珠」など）。言語文化の粋とも言えることわざは、人々の口をついて出てくるまでに深化しており、先人の知恵を育むことわざを今日の人々が受け継ぎ、さらに育て上げているわけである。

本書には、「聖書」の名句・格言の中でも、特にことわざを軸に、言語文化の影響・作用が民衆レベルで息づいていることを示すという狙いがある。人類に共通する言語事象であることわざに

関し、その定義を行い、なるべく広い範囲で文化圏相互の関連を見出し、ことわざの発生・由来を起源に遡り解明していくのを主たる目標としている。(河崎靖)

[A5判 336頁] 3,520円(税込)

『シンデレラはどこへ行ったのか——少女小説と「ジェイン・エア」』

廣野由美子著

岩波書店 2023年9月



外から来る何かが自分の人生を変えて守ってくれるだろうという無意識の依存願望。女性の自立をはばむこの内的要因に着目したアメリカの女性作家コレット・ダウリングは、それを「シンデレラ・コンプレックス」と名づけ、1981年に同題の著書を発表し、大きな反響を呼び起こした。それから40年余り経ったが、男女平等のための「外側」の改革が盛んに求められている昨今であっても、依然としてプリンセス・

ストーリーからの完全な脱却が遂げられたとは言い切れないだろう。

他方、《恵まれない環境に生まれ、美人でなくとも、自分の能力によって道を切り開き、試練を乗り越えて自己実現していく》という、もうひとつの形のストーリーによって、多くの女性たちが内から駆り立てられてきたという事実については、看過されがちである。19世紀終わりから20世紀初頭頃、アメリカ圏の女性作家たちによって書かれたこれらの少女小説の源流を求めて英語圏の文学史を遡っていくと、イギリスの作家シャーロット・ブロンテの『ジェイン・エア』(1847)に辿り着くことを、著者は発見した。本書では、この古典作品の影響により一群の少女小説が生まれた現象を「ジェイン・エア・シンドローム」と名づけ、代表的な作品を取り上げて読み解く。(廣野由美子)

[新書判 223頁] 1,034円(税込)

『政治における法と政策——公共政策学と法哲学の対話に向けて』

田中成明・足立幸男編著

勁草書房 2023年9月



この本は、わたしたちのかつての同僚で2021年に亡くなられた那須耕介さんを追悼するために編まれた論文集で、わたしもひとつの章を担当しました。那須さんの三回忌に間に合うように出版されました。編者の田中成明先生是那須さんの恩師、足立幸男先生はわたしの恩師なのですが、那須さんは院生のころから足立ゼミに参加し、大学教員として就職してからも公共政策学会に参加するなど、しばらくのあいだ積極的に公共政策について研究をされていました。また亡くなる前にはサンスティーンのナッジについて本を出されたりして、法哲学だけでなく、ひろい意味で政策に関する研究を続けてこられました。わたしの章では、那須さんが『思想と科学』に深くかかわっていたこともあり、加藤典洋や鶴見俊輔からの影響が大きいこと(だけ)を指摘しています。那須さんのことをよく知っているひとにとっては当たり前のことなのですが、意外と知られていないかとも思っており、あえて指摘してみました。執筆者の多くは法哲学者なのですが、那須さんの議論に触発されて、多様な論点が提示されていて、全体として興味深い本になっていると思います。(佐野亘)

的に公共政策について研究をされていました。また亡くなる前にはサンスティーンのナッジについて本を出されたりして、法哲学だけでなく、ひろい意味で政策に関する研究を続けてこられました。わたしの章では、那須さんが『思想と科学』に深くかかわっていたこともあり、加藤典洋や鶴見俊輔からの影響が大きいこと(だけ)を指摘しています。那須さんのことをよく知っているひとにとっては当たり前のことなのですが、意外と知られていないかとも思っており、あえて指摘してみました。執筆者の多くは法哲学者なのですが、那須さんの議論に触発されて、多様な論点が提示されていて、全体として興味深い本になっていると思います。(佐野亘)

[A5判 272頁] 4,950円(税込)

『法、政策、そして政治』

那須耕介著

勁草書房 2023年9月



わたしはこの本の「後記」を書いただけで、まったく自著でもなんでもないので、ひろい意味で「共著」のようなものとして載せていただける、ということでしたので、紹介させていただきます。この本是那須耕介さんがあちこちに書かれたものを集めて本にしたものです。那須さんの著作としてはすでに『法の支配と違法責務』という本が生前にでていますが、この本はその続編という位置づけになります。内容は法哲学者しか読めないものではまったくないのですが、第一章だけは本格的な法哲学の論文で、いきなりこの章から読み始めるのはおススメできません。那須さんの関心は、だれにとっても社会はいわば「自分に対する圧迫」として現象するけれど、同時に、だれも社会なしには生きていけない、という両面性をどう捉えるか、ということにありました。その両面性をうまくつなぐのが「ルール」だというのが那須さんの考え方の根底にあります。そう思って読んでみれば、意外とだれもが読めるのではないかと思います。法にも政策にも政治にも関心がないひと、「社会とわたしの関係」に関心があるひとにはぜひ一度手に取っていただきたいです。(佐野亘)

内容は法哲学者しか読めないものではまったくないのですが、第一章だけは本格的な法哲学の論文で、いきなりこの章から読み始めるのはおススメできません。那須さんの関心は、だれにとっても社会はいわば「自分に対する圧迫」として現象するけれど、同時に、だれも社会なしには生きていけない、という両面性をどう捉えるか、ということにありました。その両面性をうまくつなぐのが「ルール」だというのが那須さんの考え方の根底にあります。そう思って読んでみれば、意外とだれもが読めるのではないかと思います。法にも政策にも政治にも関心がないひと、「社会とわたしの関係」に関心があるひとにはぜひ一度手に取っていただきたいです。(佐野亘)

[A5判 320頁] 6,050円(税込)

Integrated Skills Development: Comprehending and Producing Texts in a Foreign Language

TAKAYUKI Nakamori 著

ひつじ書房 2023年10月



国の指定研究の成果を、国の助成を受けて世界へ発信する著作、第3弾が完成した。

英語の研究では、単語、句や文レベルを対象としたものは多く蓄積されてきた一方、文章をどのように理解して生み出すのか、そのメカニズムについては、基礎研究は少ないのが現状である。著者が推奨し、国策にも盛り込まれた統合型の英語技能学習では、視聴覚素材を理解した上で自分の

言葉で説明する、読解素材を要約し自身の意見を述べるといった活動が中心となる。その基盤は、訳に依存しない、円滑な外国語文章の理解、解釈、生成や表現の能力である。

本書は、学校科目として系統的に英語を教育していくに当たり、学習困難性を回避するために、言語習得理論を根拠として技能の指導順序を再検討し、統合に向けた新しい知見を提供する。音声や文字で与えられた外国語の文連続から意味を抽出し、意思や意図を滞りなく文連続で表現していく認知システムを脳内に創成することを目指して、効果的かつ効率的に英語を修得するための提案を行う。

本書は前著2冊と同様に、英語圏の主要図書館に所蔵されることから、国際的な理論としての一般化が図られているが、日本の教育環境に適合した和書を執筆中で、2年以内に出版予定である。(中森誉之)

[菊村上製 236頁] 11,000円+税

感銘を受けた3点

柳瀬陽介（英語教育）

(1) ジェイソン, H (2023)『資本主義の次に来る世界』東洋経済新報社

AIの台頭と共に、私はマルクスの『資本論』の商品論の部分を再読した。AIによって、大規模標準テストによる「英語力」が商品ひいては貨幣のように扱われる現状が拡大することを恐れたからだ。その関連で読んだ本書は啓発的だった。英語学習を促進（あるいは強制）する英語教育も、これからはグローバルサウスの観点からの世界的理解を必要とするだろう。

(2) 柄谷行人 (2022)『力と交換様式』岩波書店

柄谷行人の最新刊を読み、氏への関心が再燃した。『マルクスその可能性の中心』『トランスクリティーク』『世界史の構造』『世界共和国へ』『帝国の構造』などを（再）読し、（世界的な）権力関係から英語教育を捉え直す問題意識がある程度定まった。

(3) 下西風澄 (2022)『生成と消滅の精神史』文藝春秋

AIの言語生成は、人間の言語使用とどう異なるのか—この問いが言語教育者に突きつけられている。地に足のついたことばで人間の「心」についての研究史を語り直すこの本を一つの契機としてこの問いに答えたい。

佐野巨（公共政策学）

今年は伝記ばかり3点です。なんとなく全体に「昭和」っぽくなりました。

①小林信彦『おかしな男 渥美清』

渥美清といえば「寅さん」のイメージしかなかったのですが、ここにたどり着くまでの長い苦労や葛藤、また「寅さん」からは想像しがたい渥美の「暗さ」や複雑なキャラクターがよくわかりました。渥美が「寅さん」として成功しすぎたばかりに、それに縛られていく辛さもよく描かれており、全体として、ひとりの人生の重さを感じとることのできる貴重な読書体験でした。

②副田義也『あしなが運動と玉井義臣』

「あしなが育英会」はわたしが学生のころにはすでに存在し、てっきり厚生省の外郭団体かキリスト教会関係の団体か、あるいは渋沢栄一のような篤志家が始めたものだと思っていました。ところかじつは自分の母親を交通事故で亡くしたひとりの市民がほとんど独力で始めた運動をきっかけにできた組織であり、「日本最大のNPO」と呼ばれることもあることをこの本で初めて知りました。学術書であり、また論文集でもあるので、いわゆる伝記からは外れる内容もあるのですが、それも含めて楽しく読めます。

③司馬遼太郎『菜の花の沖』

恥ずかしながら、読む前は黒屋光太夫と高田屋嘉兵衛の区別すらついておらず、いつになったら漂流するんだろうと思っていました。高田屋嘉兵衛は貧しい漁村出身で、北前船で成功し、幕府の依頼で「蝦夷地」の開発に関わるのですが、『日本幽囚記』で有名なゴローンを救おうとしていたロシア船に拿捕されます。驚くべきことに、嘉兵衛は、捕虜になっている間に仲良くなったロシア人の少年から少しかけロシア語を学び、日本語を知らないカムチャッカ長官と、ゴローンを釈放のための外交交渉を始め、成功させてしまいます。司馬によればそのような奇跡が可能だったのは、当時の浄瑠璃文化によって培われた倫理観と社会観を嘉兵衛が深く身に着けていたからだ、ということなのですが……。

司馬の長編小説としてはめずらしく武士や軍人が主人公ではなく、一種の経済小説のような趣もあり、嘉兵衛もなんだか高度経済成長期の起業家のように描かれています。ともあれ江戸期後期の日本の「近代性」にはいろいろな面で驚かされます。

吉田純（社会学）

・中島みゆき『世界が違って見える日』（ヤマハミュージックコミュニケーションズ、2023年3月1日）

コロナ禍による活動中断をはさんで、約3年ぶり44作目のオリジナルアルバム。この3年の時間、デビュー以来48年の時間、そしてもっと遠く見通しがたい歴史的過去から堆積してきた時間—それらのすべての時間の意味への彼女なりの応答か。アルバム終盤になるほど深まる昏い闇の底から、終曲「夢の京」では、遙か上方の眩い明るみへと解き放たれる。そこには、彼女自身の過去の諸作品の残響と、それらが響いてくる／響いてゆく時間軸のさらに先にある、まだ見ぬ未来への意志が聴こえる。

・ワーグナー『ニュルンベルクのマイスタージンガー』（2023年3月5日、沼尻竜典指揮京都市交響楽団、びわ湖ホール）

びわ湖ホールプロデュースのワーグナー・シリーズ最終回の大千秋楽。この楽劇は、ドイツ・ナショナリズムの高揚を含む内容から、かつてナチスによって政治利用されたことでも知られる。

たとえ神聖ローマ帝国が雲散霧消しようとも
聖なるドイツの芸術は我らのもとに残るだろう

終幕の大合唱によって歌われるこのフレーズは、この作品のそうした歴史的文脈の中に漂う暗雲のゆえにこそ、その暗雲を振り払おうとする意志の表現として、むしろ強く深く胸に響く。

・アニメ映画『アリスとテレスのまぼろし工場』（岡田麿里脚本・監督、2023年9月）

製鉄所の大爆発事故によって外界から閉ざされ、一切の変化と成長を禁じられた地方都市という舞台。タイトルの意味は、作中で引用されるアリストテレスの言葉「希望とは、目覚めている人間が見る夢である」に由来する。自分たちが生きている世界が「まぼろし」であると知るからこそ、現実世界は「夢」の世界として表象され、そこへの脱出が「希望」となる逆説のダイナミズム、そして少女少年たちの「恋する」ことへのエネルギーが「未来へ」のエネルギーに転化してゆく終盤のアッチェレランド。この作品は、思春期の記憶を失わない、失いたくないすべての人々に、未来への希望を鼓舞する物語なのだ。

小島泰雄（人文地理学）

・4年ぶりの中国。

日常さまざまに伝えられる情報にからめとられ、つくりあげられた中国イメージは、幾ばくかの恐ろしささえ伴うものだったが、中国に足を踏み入れて、その空気を吸い、水を飲むこと、そこに暮らしている人びとの息吹に触れることで、変化と継続のリアリティを取り戻すきっかけとなった。

・イエスタの退団。

どんなに優れていても、なお戦う能力と意志があっても、

チームの方向とすれ違いが生じると居場所を失ってしまうプロスポーツの冷徹な場面において、彼に贈られたファンの温かい声援に素直に感動した。

・レスリー・カーン『フェミニスト・シティ』。

フェミニズムが地理学に与えた影響の大きさは、ある程度理解しているつもりだったが、現実の都市空間において女性として暮らすことの困難をめぐる記述を通して、具体的に考える機会を得た。

久代恵介（行動制御学）

・日本スポーツ界の躍進

近年、野球、サッカー、ラグビー、卓球をはじめとする国内の競技団体が世界の舞台で好成績を取っています。個人としても、プロ野球大リーグの大谷翔平選手、サッカープレミアリーグの三笥薫選手、米プロバスケットボールリーグの八村塁選手など、世界のトップリーグで活躍する選手が増えています。今から30年程前、野球の野茂英雄氏、サッカーの三浦知良氏といった先人達の挑戦は、我々の感覚を「無理でしょ〜」から「案外いけるかも…」へと変化させました。そして近年の日本スポーツ界の躍進は「やればできる！」のレベルまで夢を追う挑戦者たちの心理的ハードルを引き下げたように感じます。海外日本人選手の活躍をニュースで目にするたびに、かつては想像もしなかった日本スポーツ界の現状を感慨深く思う今日この頃です。

・自転車のディスクブレーキの構造

家の自転車は自分で修理（そのたびにチューンダウン…）しており、先日、ディスクブレーキの修理を試みました。ディスクブレーキは2つのプレートが3つのボール（ベアリング）とバネを挟み込んだシンプルな構造で、ブレーキワイヤーが引かれるたびに片方のプレートが回転し、それに伴いボールが深さの変化する溝を移動してプレート間距離を広げ、これによりパッドがディスクを押さえつけて車輪を止めるという仕組みでした。少数の部品のそれぞれが効果的に機能して目的を達成させている機構が実に美しく、小さな感動を覚えました。自転車屋さんに持っていけばそれで済むことですが、自分でやってみると新たな発見があるものだなとも思われた経験でした。

菊池亨輔（法哲学）

・末弘巖太郎『役人学三則』

役人の心構えをこの上なく簡潔な3箇条にまとめた著作。初出は1931年なのだが、皮肉をたっぷり効かせて形式主義や縄張り意識などを指摘したその内容は（悲しいことに？）今でも古びていない。おそらく学部生時代に読んで、いまひとつ響かなかった。多少の経験をして歳を重ねた今だからこそ、より納得感がある。

・「ビールスタンド重富」のビール

広島立飲み店のビール。提供されるのは大手メーカーのビールで、銘柄も1つだけ。メニューからビールの「注ぎ方」を選んで注文する。よく知った銘柄なのに際立って美味しい。何より、同じビールの味が注ぎ方によって鮮明に変わること本当に驚いた。

・那須耕介『社会と自分のあいだの難関』

本研究科にいらっしやっただけの那須先生の学外セミナーの書籍化。非法学部向けに法学を教えるヒントを求めて読んだ。法に関する話とは思えないほど読みやすく面白い。地に足が付き肌感覚を伴ったことばで法や社会の在り方を語る離れ業を目の当たりにした。裁判は争いを解決するのではなく扱い易い形に変える、とい

う説明は秀逸だと思う。

戸田剛文（哲学）

・呪術廻戦

京都も魔界都市とかと言われてたりするので、5歳の息子に多少なりとも呪術に触れさせないと思い一緒に見てみたら最近のTVアニメの映像の綺麗さに驚いた。今年テレビを75インチにしたのでますます没入。グロアニメなので息子への影響は心配している。

・SPY × FAMILY

5歳と言えども息子に「人には裏の顔がある」ということを教えないかと思いついて見始めたが、僕の方が笑っているように思う。アンプも買い替えたので没入してします。

・鋼の錬金術師

科学史学習の一環として錬金術を息子に学ばさなければと思い、有料配信を契約して一緒に（僕は久しぶりに）TVアニメ版を見た。縦横比が昔の比率のアニメだが、今見ても面白いと思った。研究室に置いていた原作を家に持ち帰って一人で読み直してしまった。

小木曾哲（地球科学）

・神聖かまってちゃん「グロイ花 feat. 戸川純」「僕は頑張るよっ feat. ano」

神聖かまってちゃんというバンドを知ったのは7〜8年前。ほんの数曲しか知らないが、どれも妙に心に突き刺さっている。戸川純は高校生のころからずっと聴いている。anoは今年になって知ったが、そのキャラクターの表面的な特異さからは想像し難い、歌手としての卓越した演奏力・歌唱力に惹かれた。3組に共通するのは、狂気を狂気として表現し、しかもそれを人に届く確固たる表現として成り立たせているところ。これは並大抵の能力ではできないと思う。「僕は頑張るよっ」のミュージックビデオのラスト、膝を抱えてうずくまる ano の姿が、若き頃の戸川純と重なる。戸川純を源泉とする流れが、神聖かまってちゃんを通じて ano へと、確かに続いていると感じる。

廣戸聡（有機化学）

1. 落合洋文「哲学は化学を挑発する」（化学同人）

哲学に興味をもって手にした本。科学哲学に関する書籍は多数あるものの、その多くは科学論を論じたものであり、自然科学と関係の深い領域まで踏み込んだ和書は少ないと思う。この本の著者は元々京都大学工学研究科で有機化学の研究で博士の学位を習得し、企業に就職した後、哲学の道に進んだという経歴をもつ。本書は化学、特に有機化学に深い関係をもつ分子の観点から哲学の領域に踏み込んだ内容が書いてあり、我々初学者にも入り込みやすい内容になっている。「やってみなければわからない」という化学のメンタリティーについても言及していて、悪く言うと雑な化学の研究スタイルが実はちゃんと理由（哲学）があるのだよ、ということ考察し、文章化してあってわかりやすい。また、分子という目に見えないものを対象とする研究の曖昧さなどが記述されており、我々自然科学の研究者が前提としてもっていないといけな姿勢を示しているような印象を受けた。

2. ザ・スーパーマリオブラザーズ・ムービー（任天堂）

家族で見に行った映画。スーパーマリオといえば日本のキャラクターであり、故安倍首相がオリンピックで扮装していたことから、日本のゲームを代表するマスコットと言える。しかし、

実はこの映画は最初はアメリカで公開され、その後日本で公開された。実写版ではなく、全て3DCGで描かれており、内容はいわゆるファンタジーもの。スーパーマリオ兄弟がクッパを相手に立ち向かうというゲームのストーリー通りのオーソドックスなものである。私は内容もさることながら、3DCG技術の発展に非常に感銘を受けた。私の世代の人は共感していただけるのではと思うが、3DCG技術で思い浮かべるのはファイナルファンタジー7 (FF7) だと思う。ゲームのRPGで3DCGが使われるようになった黎明期の代表的な作品だ。このころはポリゴンと呼ばれる立方体を繋ぎあわせた人形のようなもので、今からみるととても稚拙なものだったけど、その衝撃は凄かった。このFF7が映画化されたときのことも印象深かった。このマリオと同じくフル3DCGだったものの、全く売れなかった(と思う)。時代が早すぎたのか、内容のせいなのかはともかく、この時代に日本初のキャラクターをつかった3DCGによる映画がこれほどの完成度で世界において広く受け入れられているのを見ると感慨深いと思った。

青山拓央 (哲学)

最近のロック・ミュージックから三点を。一点目はアルバムで、二点目と三点目はシングル曲。

・The Rolling Stones— Hackney Diamonds

平均年齢七八歳のバンド、ローリング・ストーンズによる数十年ぶりの会心作。現代のサウンドでありながらストーンズのサウンドになっており、ミックのソロ風の楽曲のなかにもキースの成分がちゃんと混ぜ込まれている。この素晴らしい仕上がりは、孫のような年齢のプロデューサー、アンドリュー・ワットによるところが大だろう。(老いては孫に従え?)

・black midi— Welcome To Hell

ジャンルとしてのロック・ミュージックは同時代性を失いかけているが、それでもなお、新しいスタイルのロックを提示しつつ同時代的に戦争を歌うことが、まだ可能であるのだと知らしめられた。

・ZAZEN BOYS— 永遠少女

向井秀徳らしからぬストレートな表現に溢れた歌詞も、ジャキジャキとしたこのサウンドに支えられれば向井秀徳でしかあり得ないものとして耳に飛び込んできて、一九四五年と現在とが繋げられる。

鶉飼大介 (社会学)

・バッハ「マタイ受難曲」

バッハがずっと苦手で、賞賛する文章を読んでも腑に落ちなかったが、マタイ受難曲は圧巻で繰り返し聴いている。敬遠せずに、この曲から聴けばよかったかもしれない。

・坂本龍一 の作品

坂本の没後も、さまざまな人が氏の(ときにかなりレアな)楽曲をYouTubeにアップしている。多様でおびただしい曲からひとつだけ挙げると、バルセロナ五輪開会式で使われた“El Mar Mediterrani”は、入念に作られているように思う。

・山本昌の話

山本昌は中日ドラゴンズの元投手。当初はいつクビになってもおかしくないような投手だったが、一流投手たちが30代半ばで引退するなか、異例にも50才まで現役で活躍した。氏の趣味はラジコンで、ラジコンを頻りに改造するように、ピッチングの「改造」を厭わなかったことが、長く選手生命を保った秘訣のひとつだったと言う。大投手なのに偉ぶらない姿勢も印象深かった。

柴山桂太 (経済学・経済思想)

1. 「トランス・アトランティック 世紀の亡命プロジェクト」 (Netflix)

1940年のマルセイユを舞台に、ユダヤ系難民のアメリカ亡命を手助けした緊急救命委員会の活躍を描く、実話を元にした全7話のテレビシリーズ。冒頭からベンヤミンのピレネー越えの話が出てくる他、マックス・エルンスト、メーリング、デュシャン、シャガール、アレントなどの著名な文化人・知識人が次々と登場して目を引くが、一番びっくりしたのは主人公だった。自らも迫害される身でありながらマルセイユに留まり、多言語話者としての才能を活かして反ナチス活動に八面六臂の活躍をする。物語の実質的な主人公はドイツ名で“アルベルト”。第一話で「大学で経済学を学んだ」と自己紹介するシーンでピンときた。アルベルト・ハーシュマン! 20世紀でもっともユニークな経済学者の若き日々が、半ばフィクションとはいえ、いつの間にかNetflixのドラマになっていたのだから驚きである——第一話のタイトル「隠す手の原理 (Hiding Hand Principle)」は、どんな計画も当初は予想もしなかった難しい事態に直面することを指し示すハーシュマン独自の経済学用語で、脚本家が物語に即してうまく流用している。

このドラマの原作となった小説(“The Flight Portfolio”)は未読だが、ハーシュマンの伝記(“Worldly Philosopher: The Odyssey of Albert O. Hirschman”)によると、1940年後半から41年前半にかけて、緊急救命委員会のV・フライらと協力して、アレントを初めとする2000人の亡命を手助けしたのは事実のようだ。ハーシュマン自身も、この物語の後でアメリカに亡命し、開発経済学や政治経済学の分野で、独創的な理論家として長く活躍することになる。亡くなったのは2012年、97才のことだった。

なお、このドラマの冒頭には“アルベルト”の姉、ウルスラも登場する。弟と同様、彼女も経済学を学び、やがてイタリアの社会主義者と結婚して反ファシズム活動に従事することになる。その娘、エヴァも経済学を学び、やがてイギリスで同世代のインド人経済学者と恋に落ちることになるだろう。彼の名はアマルティア・セン。後に貧困削減の研究で、世界的にその名を知られることになるが、近年はウルスラやエヴァの活躍にも光が当てられている——という後日談があることも記しておきたい。

2. 呉叡人『フォルモサ・イデオロギー』(梅森直之、山本和行訳、みすず書房)

今年のゼミではB・アンダーソンの『想像の共同体』を精読した。アンダーソンはインドネシアの研究者だけに東南アジアの事例は数多く引かれているが、東アジアの事例がほとんど出てこない。本書がその穴を埋めてくれた。日本統治時代に台湾ナショナリズムがどのように形成されたのか。アンダーソンの「公定ナショナリズム」論の枠組みを超える、緻密で繊細な議論が展開されていて、とても考えさせられた。

3. 佐藤俊樹『社会学の新地平 ウェーバーからルーマンまで』(岩波新書)

ウェーバーの伝記的事実や初期論文(『中世商社会の歴史』)を出発点として、有名な『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』や『教団』論文、そして官僚制研究へと至るウェーバー思想の本筋をズバッと抜き出し、それをN・ルーマンの現代的な組織研究へとつなげていく。実に見事な解釈という他ない。「官僚制は自動機械である」という通俗的な理解がいかに誤っているか、納得のいく言葉で綴られている。

須藤秀平（ドイツ文学）

①『しょうぼうじどうしゃじぶた』渡辺茂男作、山本忠敬絵、福音館書店

このところ、とんでもなく忙しかった。こんなことを言うと先輩方から「ペーペーのお前が何を」との誹りを受けそうだが、昨年の夏頃からは本当に忙殺されていた。文学作品などという「タイムコンシューミング」（立花隆）なものはどう頑張っても読めないという状況。文学者であるにもかかわらず、である。これはよく考えたら、プロスポーツ選手が「忙しくて練習の時間がない」とのたまうのに等しい。全くもってグロテスクな状況である。

かろうじて触れることができたのは、三歳の息子を寝かしつけるために読み聞かせるたくさんの絵本であった。これらはむしろ、時間をかけてじっくり繰り返し読むことになる。父である私の方は、もとの絵本の内容や表現を飛び越えて様々に妄想を膨らませながら楽しんだ。戦火の中で子供にお話を聞かせる太宰治『御伽草子』の心境になぞらえては大仰だろうか。

印象に残った絵本は山とあるが、ここでは表題の一作を挙げておく。ジープを改造して作られた小さな消防車「じぶた」が、大きなポンプ車や高性能の救急車に引け目を感じながらも自分の役割や必要性を見出していくお話だ。優秀な同僚に囲まれ、できないことばかりだと思悩んでいた私の心にしみた。初版は昭和四一年で、いま見るとレトロな絵柄も良い。署長をはじめとした人間の大人たちが実はどんくさいのもまた良い。

あとで父に確かめたら、同画家による絵本『とべ！ちいさいプロペラき』は私自身が三歳の頃に執着し、何度も読んでもらった絵本だったそうだ。こちらも小さなプロペラ機がジャンボジェットに引け目を感じながらも自分なりの初飛行を成功させるというお話で、設定が『じぶた』と似通っている。できないなりにどうにか頑張らないといけないう思いはその頃から持っていたようだ。三つ子の魂百までということか。

②『かおのーと』tupera tupera、コクヨ

こちらは絵本ではなく、人や動物や怪物の顔の輪郭が描かれた台紙に目や鼻や口のシールを自由に選んで貼るという工作本のようなもの。要は面白いのだが、子供が予想外のパーツを描き手つきで貼ると、なんとも言えない絶妙な顔が出来上がる。迷いなく、かつ同時に技巧的でないというのがポイントだ。H・v・クライスト『マリオネット劇場について』で表現されるように、すでに知恵の実を食べ、意識を持ってしまった我々にはもはや辿り着けない境地である。

③『酒場の文化史——ドリンカーたちの華麗な足跡』海野弘、東京創元社

ごく素朴な意味で、文化史というものが好きである。酒についてではなく、酒がどのような場所で飲まれていたかという「空間」について書かれた本書は、酒場や呑み助（私はあえて「ドリンカー」とは呼ばない）の描写を通じて石器時代から古代や中世、そして近代に生きた人々の暮らしぶりや価値観をまざまざと浮かび上がらせてくれる。かつて古本市で購入していたものを、深夜に目が覚め寝付けなくなったときに手に取った。顔の見知った個人よりも、むしろ顔の見えない無名の人々の暮らしに慈しみと安らぎを感じる夜もある。

合田典世（英文学）

・下西風澄『生成と消滅の精神史 終わらない心を生きる』（文藝春秋）

洋の東西を問わず、古代から現代まで、哲学と文学にまたがって融通無碍に展開される「精神史」。壮大なテーマを扱いな

がら、（著者の名前の通り）澄んだ風のごときさわやかな読後感を残す。哲学者として本質を見抜く目と、文学者として細部を愛でる目、そしてアカデミズムの枠にとらわれない旺盛な好奇心を併せ持つ著者だからこそ可能な芸当だろう。西洋哲学編では、ともすれば教科書的になりがちな哲学史が、対象への深い理解に裏打ちされた読ませる文章で新鮮に生まれ変わる。西洋と東洋を通観する胆力で、日本近代文学の文脈から漱石を解き放つ章は、これぞ待ち望んでいた漱石論、という感があった。

・『THE FIRST SLAM DUNK』（原作・脚本・監督：井上雄彦、東映アニメーション）

2023年は、この映画をきっかけに『SLAM DUNK』原作を読み直し、関連本も買い漁り…と「スラダン沼」に浸かりきった1年だった。最初に観たのは、本誌編集委員の年度最後の業務＝発送作業が終わった3月某日のこと。作業中、同じく委員だった某先生と漫画談義になり、「私、少年漫画がダメで。スラムダンクですら脱落しましたから」と伝えたことを覚えているが、フィクションならできすぎた「伏線」であった。大げさだが、人生本当に何が起るかわからない——そういえば、これも『SLAM DUNK』の教えの一つなのだった。

・『M-1グランプリ2023』（ABCテレビ制作）最終決戦：さや香「見せ算」

（9月末どころか年末ネタですみません）授業の中でネットミームやお笑いネタ、歌詞などを忍び込ませるのを「芸風」として久しい。とりわけM-1ネタは学生の認知度も高く、開く一方のジェネレーションギャップを超える格好の手段となる（こともある）。令和ロマンの優勝には納得したもの、視聴後ずっと尾を引いていたのはむしろ、評判の芳しくなかったさや香の「見せ算」の方で、今となってはこのネタが一番好きだ。モダニスティックな尖った「ナンセンス」があくまで大衆文化として消費されるさまには、日本らしさが見えて興味深い。番組最後に「さや香、全然よくなかった！」なんて斬った（慰めた？）つもりのも某審査員こそ、お笑いセンスのガラパゴス感丸出しで、「全然よくなかった！」

見平典（憲法・司法政治）

私の専門領域（憲法・司法政治）に関わる印象深い事柄を、紙幅の関係上2点ご紹介致します。

1つは、2023年4月に放送された、日本放送協会（NHK）の番組「ETV 特集 誰のための司法か——團藤重光 最高裁・事件ノート」です。大阪国際空港騒音訴訟において、高等裁判所は、原告住民が請求していた夜間の空港使用の差止めを認めましたが、最高裁判所は、一転してこれを覆しました。本番組は、その最高裁判所の審理過程において、同裁判所の元長官による介入があった可能性を報じるものです。司法権の独立は、法の支配や権利の保障にとってきわめて重要なものですから、番組の内容に衝撃を受けました。それと同時に、NHKが公共放送として、高い視聴率を望みにくいこうしたテーマを1本の番組として正面から取り上げたことを、印象深く受け止めました。

いま1つは、上記番組の基礎資料となった、團藤重光・元最高裁判所裁判官の事件ノートの存在です。團藤元裁判官が最高裁判所時代の資料を含む團藤文庫を龍谷大学に寄贈されたことは学術的にも社会的にも意義深く、それを実現し、長年にわたり資料の整理・分析にあたられ、上記重要事実を解明された同大学の先生方のご尽力に感銘を覚えました。

仁井田千絵 (映画メディア研究)

・文楽公演 妹背山婦女庭訓 (国立文楽劇場)

関西に来てから文楽を見に行くようになった。この月の公演は朝10時半から夕方5時半まで妹背山婦女庭訓の通し狂言。大筋としては、藤原鎌足が蘇我入鹿を倒す話 (だったと思う)。三段目の吉野川では、2組の親子の相手を思う行動に心打たれた。一方、嫁入りと称して娘の首が川を渡っていく様はなかなかシユールだった。

・さくらサーカス 大阪城夏の陣 (大阪城公園 太陽の広場)

サーカスが好きだ。シルク・ドゥ・ソレイユのような大掛かりなものも良いが、さくらサーカスは小ぶりで客席との距離が近い分、醍醐味があった。頭上で繰り上げられる空中ブランコや曲芸を見ていると、ソビエトの映画監督エイゼンシュテインが言っていたアトラクションのモンタージュを思い出す。

・チューリッヒ・トーンハレ管弦楽団 大阪公演 (ザ・シンフォニーホール)

パーヴォ・ヤルヴィ指揮、ブルース・リウのピアノで、ラフマニノフのピアノ協奏曲第2番。感銘を受けたのはアンコールの方で、オーケストラのアンコール曲は「ハンガリー舞曲第5番」。同じホールで聴いた別の2つのオーケストラも同じ曲をアンコールで弾いたが、こちらが一番スピーディーでキレがあった。ソリストのアンコール曲は「子犬のワルツ」。ペダルを踏む足が子犬のようにパタパタと動き回るので、見ていて思わず顔がほころんだ。

日置尋久 (情報科学)

・「脳と人工知能をつないだら、人間の能力はどこまで拡張できるのか」紺野大地、池谷裕二 講談社 (2021)

純粹にわくわくするテーマが並んでいる。(残念ながら??) 現実にはありえないだろうが、(自分のコピーがとれるならバックアップをとっておいて) 本書で語られるさまざまな世界を体験してみたいものだ。

・“IP over Avian Carriers with Quality of Service”, D. Waitzman, RFC2549 (1999)

RFCとはインターネットでのデータ通信の方法や各種サービスの提供方法などの仕様の標準化を主な目的とした文書のシリーズで、これまでに9500通以上発行されている (すでに廃止されたものも含む)。その中でRFC2549は「鳥類によるデータ通信方式 (サービス品質制御あり)」を大マジメに (??) 定義した文書である。じつに粋だ。ちなみに発行日は4/1である (午前中かどうかは不明)。

・“Can large language models provide useful feedback on research papers? A large-scale empirical analysis.” W. Liang et al., DOI: arXiv:2310.01783 (2023)

GPT-4に5000本近くの論文のレビューを書かせて、人間の査読者のレビューと比較して評価した結果をまとめた論文である。採録された論文については、GPT-4と人間が報告書で指摘した点について30%ほどのオーバーラップがあり、不採録論文ではその値が45%近くであったと報告されている。また300人ほどの研究者に、自身の投稿した論文の報告書についてのアンケートをとったところ、回答者の半数以上はGPT-4による指摘は有益であると、さらに回答者の80%以上は、GPT-4による指摘の方が人間の査読者による指摘よりも優れている場合があったと答えたということである。シンギュラリティは近いのかもしれない。

ちなみにこの記事は自分で書いたものである。GPT-4に書かせたわけではない (本当だつてば)。

安部浩 (哲学)

1. マドリード

ソフィア王妃芸術センターとプラド美術館。前者はピカソの「ゲルニカ」。後者はゴヤの連作「黒い絵」、そしてベラスケスの「ラス・メニーナス」。呆然と佇立する。矯めつ眇めつ堂々巡りする。視野が開かれていく。謎は深まっていく。顕密の縁を踏躑する。幽明の境を揺蕩う。

2. バーゼル

バイエラー財団とバーゼルス立美術館。前者はコロンビアの現代美術家、Doris Salcedoのinstallation。後者はホルバインの「御墓の中のキリストの遺骸」。静謐。その中で感得される黙契秘旨。耐え難き喪失の痛みに絶句すること。無言で慟哭すること。死者の傍らを離れず、彼(女)等をしてあらしめ続けること。

3. ミュンヘン

ヘルクレス・ザールとレオポルト座。前者はロシアのピアニスト、グリゴリー・ソコロフの公演。後者は米国の映画監督、クリストファー・ノーランの「オッペンハイマー」の上映。ソコロフの演奏会は、前半がパーセル、後半がモーツァルト。これにラモー、ショパン、ラフマニノフ、バッハが追加された。実演に接するのは二回目であるが、その音色の精彩と陰翳に目眩き、放心する。知情意の三者を自在に出入する魔術的な演奏。「オッペンハイマー」は「原子爆弾の父」ことロバート・オッペンハイマーの半生を描いた映画。科学的探究心と政治的良心の相剋。国家機密の超巨大軍事技術開発計画を主導する公人としての雄姿と、胸裡に秘めた情炎に身を焦がす私人の素顔の交錯。国の英雄たる栄光と国賊同然に追われる恥辱。だがこの希代の天才の光と影もまた——彼自らの発明品たる「世界の破壊者」が世に齎した閃光と雲影の前では——塵に等しい。

細見和之 (ドイツ思想)

・アウグスティヌス『神の国』(服部英次郎・藤本雄三訳、岩波文庫、全5冊)

学生との読書会で読んだ(というか、まだ第4分冊の途中)。前半は、古今東西の文学と思想を知悉していた最大の知識人による政治哲学という意味合いが強く、言ってみれば厳しい現実のなかで紡がれた、当時のまさしく「現代思想」。後半は、創世記の記述解釈をとおして旧約と新約をいささか強引に結びつけてゆく。パウロとアウグスティヌスをへてそういう理解が成立してゆくプロセスがよく分かる。

・『金時鐘コレクションV』(藤原書店)の「著者あとがき」。

刊行中の『金時鐘コレクション』第V巻のいまは編集最終段階で、本誌が刊行される2月末には出版予定。金時鐘さんは現在94歳で生駒市に健在だが、第V巻用の「著者あとがき」は400字詰め換算25枚を超える量で、びっしりと書かれている。私は編集委員のひとりなので事前に読むことができたのだが、『光州詩片』(1983年、福武書店)刊行にまつわるエピソードなど、まさしく40年前の出来事がじつに鮮明で驚いた。

・リュウジさんの「餅アヒージョ」。

「料理研究家」としてyoutubeで人気のリュウジさんのレシピ。オリーブオイルを小さめのフライパンにひたひた位にして、潰したニンニクを入れ、やや細長く切った餅を並べて温める。頃合いを見て、少し腹を裂いた辛子明太子を餅の上に乗せて、輪切りにした鷹の爪を散らす。舞茸などのキノコ類を回りに入れ、最後に刻んだ葉味葱をバラバラと。正月のあまった餅消費のために作ってみたのが、おいし過ぎて、スーパーで切り餅を買い足すにいたってしまった。

西山教行（言語教育学）

・三浦淳（2022）『学歴』で読む日本近代文学』幻冬舎メディアコンサルティング

戦前の日本の文学作品のなかには、学校生活を題材としているものも少なくない。とはいえ、戦前の学校教育が戦後のそれと大幅に異なることは、あまりよく知られていない。教育は誰もが体験する社会現象であることから、とすれば自分の体験をもとに想像を膨らませやすい。

著者は近代文学に見られる学校教育の諸相、とりわけ学歴の意義を、坪内逍遙に始まり伊藤整にいたる明治から大正の時代を生きた文学者による、自己の経験にもとづくとおもわれる学校文化や学歴に関わる小説をもとに分析する。戦前の学校教育の研究については教育社会学の研究がまず思い当たる。しかし、本書の著者はドイツ文学を本業としていたものの、近代日本文学に親しみ、大学での講義でも積極的にその成果を取り上げてきた。本書はその成果でもあり、令和の時代の若い読者が教育制度の異なる戦前の教育文化をよりよく理解したうえで、近代文学に親しんでもらいたいとの啓蒙的な配慮に溢れている。

評者は戦前の外国語教育に関心を寄せることから、本書を興味深く読んだものの、歴史的な関心だけではなく、近代文学の読解、あるいは教育社会学のテキストとして近代文学を活用する手法としても、本書は読者に有益な示唆を与えてくれるだろう。

・土井捷三（2016）『ヴィゴツキー『思考と言語』入門：ヴィゴツキーとの出会いへの道案内』、三学出版

心理学者ヴィゴツキーは難しい。一度たりともその著作に接したことがあるものは、ヴィゴツキーのわかりにくさを前に、ため息をつくに違いない。その晦渋さの原因はヴィゴツキーの思考の独創性や先進性にあることに加えて、ロシア人のロシア語による思考の回路が日本語と著しく異なっていることもその原因にあるだろう。しかしヴィゴツキーの著『思考と言語』を取り上げると、事情はさらに複雑になる。

ヴィゴツキーは若くして亡くなったため、膨大な著作を残したにもかかわらず、それらを十分に推敲する余裕を持たなかった。そのため、その著者は様々な論文を集めたもので、一貫して執筆された単著ではない。しかしこれまではそのような編集の内実やそのプロセスが明らかにされる事はなかったようだ。

本書はこのようなヴィゴツキー読解の背景を解明し、そのうえで日本人読者向けに再構成を行い、『思考と言語』の最良の読み方を提示している。『思考と言語』の解説本であるため読みやすさに徹し、ヴィゴツキーの思想を的確に紹介している。

日本の外国語教育の分野では近年、ヴィゴツキーの思想、とりわけ媒介をめぐる議論が流行となっているが、そこではヴィゴツキーの著作を直接に参照するのではなく、北米で興隆している社会文化理論の参照によってヴィゴツキーの理解をはかるといった傾向が見られる。これまでの日本人ヴィゴツキー研究者はロシア語の原典からヴィゴツキーを読みこみ、考察を深めてきたことから、その研究の厚みは決して北米の研究者に劣るものではない。長年にわたる、ロシア語ロシア研究の成果はヴィゴツキー研究に現れている。

・ピエール・ブルデュー、ジャン＝クロード・パスロン [著]；宮島喬訳（1991）、『再生産：教育・社会・文化』藤原書店

外国語教育研究とブルデューの社会学の間には深い関係がある。外国語教育研究にブルデューが援用されるようになったのは、フランスの言語教育学者ルイ・ボルシェの貢献によるところが大きい。ボルシェは1980年代に言語教育学にブルデューの社会学を換骨奪胎し新たな地平を開いた。評者はフランスへの留学時代にボルシェのゼミに出席し、ブルデュー社会学の要諦を聞くことが

できたことから、ブルデューの理解が多少は進んだと思う。それ以来、院生たちと定期的にその著作を読んでいるが、今年は改めて『再生産』を読んでみた。

『再生産』は昨今、日本で論じられている「親ガチャ」の現象に言及する事は意外にも少ない。『国家貴族』などブルデューの他の著作との記憶が入り交じっていたのかもしれない。ここでは、世代をまたぐ社会階層の再生産にもまして、教育現場で実践されている教師の言説の再生産など、教育をコミュニケーションの場のひとつと捉えて、そこで実践される言説の交換や再生産が重要な課題となっている。

ブルデューが晦渋な言説を通じて解明する教育という社会現象は多岐にわたるもので、教師は教育制度という秩序を維持し、発展させること、すなわち教育制度の再生産を使命としているなど、隠された社会構造の解明は、それが正鵠を射ているがためになおのこと、いささかのやるせなさを感じざるをえない。これまで真綿でくるまれていたものが、韜晦した言説を通じて次第に白日の下にさらされるのは、実に小気味がよいものの、自分自身がその分析の対象でもあることから、意図せざる社会的責任に目を向けざるを得ない。

田口かおり（保存修復学・美術史）

・マームとジブシー《瞬く瞬のあいだに漂う》

演劇作家・藤田貴大の率いるカンパニー、マームとジブシーが行ったインスタレーション。演劇と美術の領域を行き来し切り結ぶ今回の作品は、新たな試みに満ちていました。老舗百貨店「スズラン前橋店」の店内をそぞろ歩いて、映像やボイステキストがからまりあう空間にたどりつく、その道のりも印象的。上演される「場」に深くもぐるフィールドワークに基づく新作として2024年には《equal》の上演が決まっているマームとジブシー、今後の展開がますます楽しみです。

・テート美術館展『光＝ターナー、印象派から現代へ』

イギリスのテート美術館のコレクションから「光」をテーマに作品を選出し編まれた展覧会。ジョゼフ・マロード・ウィリアム・ターナーのめくるめく光から、印象派の画家たちによる外光の表現のバリエーション、ジェームズ・タレルの作品が放つ暴力的なまでの光など、多様な作品群から「光」とはなにかを考え続けた芸術家たちの仕事がちならびました。作品配置の工夫も冴えていた展覧会。

・古谷嘉章ほか『縄文の断片から見えてくる：修復家と人類学者が探る修復の迷宮』古小鳥舎

「修復とは、一体何のために、どこまで、何をすることなのか」この問いに導かれるようにして、縄文土器の修復の世界に携わる修復家たちと人類学者が本を書きました。作品への介入には、はたして唯一無二で完全な回答があるのでしょうか。「修復」におけるオリジナルとは、一体何を意味するのでしょうか？物質的なものだけに留まらない介入の射程を検討する「開かれた修復」の未来について考えるなかで、複製による「復元（再現）」をめぐる問題にも切り込む、読みやすい一冊です。

小林哲也（ドイツ文学・精神史）

・ヨーゼフ・フォグル『資本の亡霊』法政大学出版局 2018年
元々ドイツ文学研究者である著者が、経済思想史に大胆に切り込んだ著作。経済思想をたどりながら、金融経済にも自己調整的市場というユートピアを適用できるかのように語るミルトン・フリードマン的な近年の経済観を批判している。2023年3月に京

大に講演に来てもらった際の氏の佇まいにも感銘を受けた。講演原稿の翻訳はweb雑誌『思想のプリズム』に掲載。

・宇和川雄『ベンヤミンの歴史哲学』人文書院 2023年

ベンヤミンに関しては通例、断片的なものに潜在するものを救済するというイメージで語られるが、この断片性を普遍性へと繋げる道筋を示す優れた研究書。著者の声高ではない理想主義に感銘を受けた。

・アラン・ヤング『PTSDの医療人類学』みすず書房 2001年

授業で第一次大戦時の兵士の「戦争神経症」を扱った関係で読んだ一冊。病の概念が歴史的に構築される過程を追う論述が挑発的でスリリング。第一次大戦時の「シェルショック（砲弾恐怖症）」をめぐる議論も充実しているが、ベトナム戦争後にアメリカでPTSDカテゴリーが導入される過程がとても興味深かった。

木下千花（映画学）

・井上荒野『生皮——あるセクシャル・ハラスメントの光景』朝日新聞出版、2022年。

#MeToo運動がアメリカの映画業界におけるセクシュアル・ハラスメントの告発として始まったこともあり、性暴力およびその被害者のサバイバルについては、強い関心を持ってきた。セクハラどのように起こり、被害者にどのようなインパクトを与えるのか、この小説を読むとありありとわかる。フィクションの力を感じる。

・木ノ下歌舞伎『桜姫東文章』岡田利規演出、ロームシアター。

素人ながらときどき歌舞伎を見て、突飛な転生と「みせびらかし」という特徴が面白いと思っていたら、現代化によってそれがより際だっていた。ヒロインを演じた石橋静河に見とれた。

・チャン・リュル監督『柳川』、2021年。

昨年見逃していたのを出町座で見た。チャン・リュルは中国朝鮮族3世で、韓国映画を支える名匠。中年にさしかかった中国人の兄弟がかつて愛した柳川（リウ・チュアン）という名の女性と、日本の柳川で再会する。掘割の橋を舟がくぐるタイミングや、民泊の屋上が素晴らしい。

〈編集後記〉

▶着任初年度なので、本誌の編集に携わったのも初めてです。私の頼りない仕事をフォローして下さった編集委員会と寄稿者のみなさまに心から感謝しております。総人・人環で行われている研究の多彩さを垣間見ることができたのはもちろん、単なる情報に還元できない雰囲気や空気を感じました。うまく言えないのですが、企画も文章も「文化的」なのです。そう感じたのは、法学の味気ない文章に触れることが普段多いからかもしれませんし、単に私のこれまでの生き方の問題なのかもしれません。こうした文化的なフォーラムが存続できる大学・社会であってほしいです。(菊池)

▶アメリカからDVDを取り寄せてフレデリック・ワイズマン監督『パークレーにて』(2013年)を鑑賞。『高校』(1968年)『病院』(1969年)などの制度的な場にカメラを持ち込み、人間の会議や交渉や労働を描いてきたドキュメンタリーの巨匠が、カリフォルニア大学パークレー校を対象にした様々な授業(宇宙物理学から英文学まで)、理事長ら大学執行部の会議、学生のデモや占拠などの情景を通して公立高等教育の意味を問う素晴らしい作品。ぜひ日本のパークレー(だと私は思う)本学で上映して皆様と議論したいです。(木下)

▶昨年度に引き続き編集委員を務めさせていただきました。冬休みに喫茶店で開いた週刊誌に、2024年は「まさか」の年になる!との見出しがありましたが、本当にその通りになっているような…。落ちたらあとは上がるだけ、とポジティブに考えたいですが、世界も国内も何が起きるかわからない、というのが、2020年代(@コロナで幕開け)の常識になりつつあります。「まさか」が大好きで「やっぱり」が嫌いそうな魔の手にどう立ち向かうのか…これからの時代、学問知がいつそう試されるのだろうなと思ったりしています。(合田)

▶親の介護に関連する用事で故郷に帰省する機会が増えました。自分の実家周辺では空き家と新築住宅の両方が増え続ける一方、同じ市内にある親の実家周辺は急速な過疎化と少子化が進行中。人口減少といってもその実態は様々だと痛感します。能登半島地

震で山間部の被災者支援の困難さが浮き彫りになりましたが、被災時にどのような困難が生じるかは、その土地の具体的な状況によって様々であり、たとえ平野部や都市部であっても、それを事前に正確に予測するのは極めて難しいと感じます。本研究科が目指すところの「人間と環境のよりよい関係の構築」が、はるか遠くに霞んで見える今日この頃です。(小木曾)

▶昨年に引き続き「感銘を受けた3点」の取りまとめをさせていただきました。信頼できる先生方が感銘を受けた書籍や舞台作品などを知ることができ、個人的にも毎号楽しみに読ませていただいております。それぞれの先生が研究や授業で見せるのとは別の一面も知ることのできる点でもユニークなコーナーとなっていると思います。ぜひ一読いただけたら幸いです。ご協力の先生方には、この場を借りてあらためて感謝申し上げます。(小林)

▶今年度から編集委員として一緒させていただくことになりました。着任1年目という状況もあり、右も左もわからず駆け抜けた2023年度でしたが、委員の皆さまと定期的にお会いする時間が日々に打たれる句読点になり、心安らぐものがありました。「もっと読みやすく、わかりやすく」との観点から、構成やレイアウトを考え直し、本号でもいくつかの変更が行われています。ひとつの書物ができあがっていく行程のなかに、どれほどの数の微調整や決定が積み重ねられているものなのかを改めて体感し、あらゆる出版物への愛着がさらに増しました。多くの方のお手元に届きますように。(田口)

▶みなさまのご協力を得て、42号の刊行にいたることができました。あらためて感謝いたします。今号からすべてのページを横組みで掲載することにしました。いかがでしょうか。また、公開講座にくわえて、研究科再編に関わる座談会を掲載しています。齋木副研究科長をはじめ、各講座から参加いただいた先生方に感謝いたします。私も4月で定年退職を3年後に控える身となります。パトタッチがうまくいきますように、誌面の簡素化(希薄化ではなく)にさらに務めてゆくつもりです。(細見)

編集委員会 委員長 細見和之
副委員長 小木曾哲
委員 菊池亨輔・木下千花
合田典世・小林哲也
田口かおり

総人・人環フォーラム 第42号

令和6年2月29日発行

編集 『総人・人環フォーラム』編集委員会
表紙デザイン 倉本修装幀事務所
発行 京都大学大学院人間・環境学研究科
〒606-8501 京都市左京区吉田二本松町
FAX 075-753-7908
印刷製本 (株)北斗プリント社

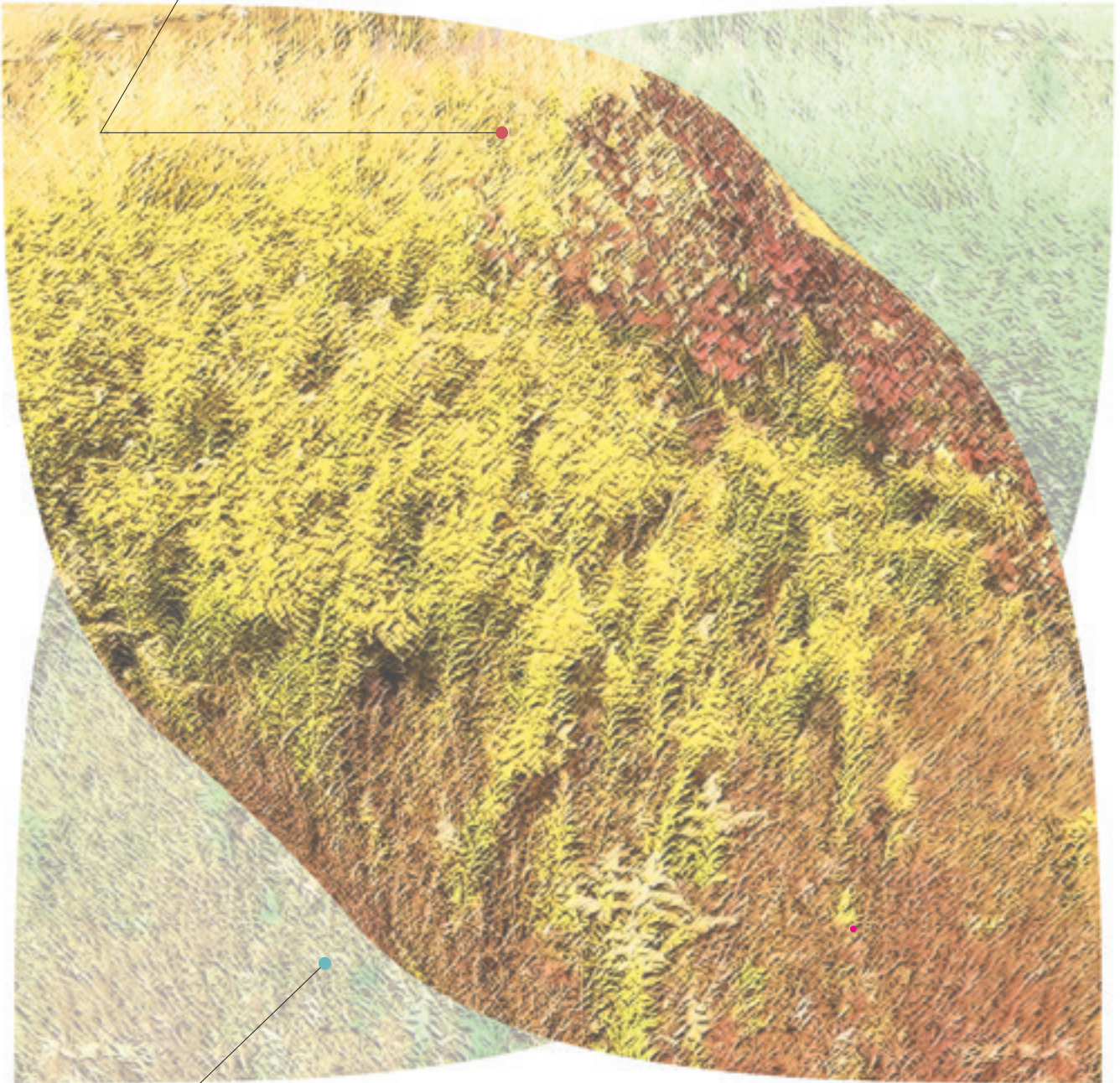
『総人・人環フォーラム』の趣旨

21世紀における人類の生存は、現在直面している地球をとりまく環境の危機をどのように乗り越え、地球上の多様な諸民族の持続的な共存の道をどのように見いだしてゆくことができるかにかかっている、といえましょう。「自然と人間の共生」という理念のもとに平成3年に設立された京都大学大学院人間・環境学研究科(略称「人環」)は、こうした21世紀における人間と環境との新しいかかわりを模索してゆくため、「総人・人環フォーラム」を発刊することになりました。本誌では、人間と環境の相互関係にふれる第一線の研究のうえに立って、精神的豊かさをもった広い視野から、21世紀における人類の課題を問いつけてゆきたいと考えています。

HUMAN AND ENVIRONMENTAL FORUM

総人・人環フォーラム 42号

講演 谷口一美「人間のことば・機械のことば」



座談会 学術架橋力の養成に向けて一人間・環境学研究科再編のめざすもの
齋木 潤・立木秀樹・勝又直也・守田貴弘・森口由香・小松直樹